

れか彼れを不文なりといふぞ。秋成若し能文家として立つ能はずば、何れの邊にか彼れを容れん。彼の『雨月物語』は果して「鼓腹之閑話、口吐出」せしものなるか、あるは彫琢改竄を加へ刻苦して得し文字なるか、諸書の傳ふる所によれば、彼れの文を草するは極めて速なりしもの、如し。余もまた思へらく、彼れの文は容易に成りしもの、如しと、よし彫琢を加へたりとするも、そは文法上の彫琢にはあらで修辭上の練磨なりしなるべし。彼れは字義に拘泥し、係結活用等に意を用ふる底の人に非ず。さもあらばあれ、秋成の文には語格の誤多くして、歌にこれなきは何の故ぞや。蓋し歌は語格を離れて咏じ得べきにあらず、語格なければ歌なきなり。

もろこしに詩つくる人はなへて文をつくれるをなほはいつの頃よりか歌にのみたむきを、いけて言のあやなきそふ文はなすへきものとも思はぬ人なん多きは、いかにぞや。一國文解

と云へるより見るも、當時の國學者の歌にのみ勉めて文を度外視したる様窺ふべきなり。もろこしの詩人にも、現に杜子美の如き、文に拙なるものあるにあらずや。秋成は歌を加藤美樹に學びたり、調をも格をもみだりて名聲赫々たる謂れあらんや。其の歌に破格なきは異しむに足らず。然るに文にありては、音に係結を誤り、過去現在の活用を亂志しのみならず、全く文字の布置配合をも誤り、問々其の意の通ぜざる所あるはいかにぞや。今一例を示さんに『諸藝聞耳世間狙』の序に

臨耳世間狙の呼ぶ事は見彼の人の伽もならんかし

と云へる文あり、これ「世間狙と呼ぶ事は……ともならん爲なり」とか、あるは「世間狙と呼ぶは……ともならんと思ひてなり」とかせずば大なる破格の文字に非ずや。破れの語格は何を以て歌に正しく文に邪なる。彼れ自ら語格を破り語格以外に走るを好みしか。彼れ殊更に俗語を以て之を亂し、か、あるは不知不識の間に誤りしか。或人曰はく、秋成は國學を美樹に學びき何ぞ語格文法を知らざるの理あらんや。夫れ法格に束縛せらるれば文の妙減ず、特に秋成に於て然り、彼れの歌に面白きものなし。よりにて思ふに『癖物語』の如きは、殊更に面白く物せんとてわざと語格を破りたるものならん。余を以て見れば彼れの歌亦面白からざるに非ず、若し論者の云ふ如く、秋成にして能く語格文法の正否を識別せるものなりとすれば、何の必要ありてわざと之を破りしか。さなきだに後世の識者を恐れ書を埋めしに非ずや。たとへ老後の思想は壯年の時と異なるとは云へ、わざと之れを破るの理あらんや。善く法格に通ぜざればこそ、善く通じたるものに取りては、法格も敢て邪魔とならざるをや。然らば彼れの文に破格多きは何故ぞ。他なし秋成に文字の布置配合を誤る奇癖ありし故なり、彼れは之を正さんともせず、否寧ろ其の正格の何れにあるかを知らざりしなり。蓋し當時未だ語格文法の良書なかりき。伴蒿溪は

國つ文の則を教へたるものは未だ見ず去れど古きふみをつらくにかうがへは其則は知らるべし。一國文解

と云へれど、秋成はかく面倒に「古き文をつらくに考へんとはせず唯思ふまゝにかきすたり詮ずるに國つ文の則を立てたるは富士谷成章の『あよひ抄』かざし抄』を以て嚆矢とす、秋成以前

に眞淵の『語意考』ありしかど、これ唯言語の解釋を施したるものに過ぎず。宣長の『言葉の玉緒』はた文法を論じたるものにあらず、かゝり結びを論じ已然將然などの別を明にしたるは春庭いでの後のことなり。されば眞淵宣長に多少の誤なきにあらず、況んや粗放なる秋成をや。秋成の書を見て語格文法の誤多きを嘆ずるは木によりて魚を得ざるを嘲つものど何ぞ擇ばん。宜しく其流れに従ひ川に網して眞淵宣長をこそ責むべけれ。唯秋成の眞淵宣長より誤多き所以は此奇癖ありしと古文の格に従はんことを勉めざりしによる、されば後年成りし國文(擬古文)の書は幾分か古人に模する所あれば、かゝる誤少し。照らしあはせて考ふべし。

中期の秋成

第一章 中期の生涯

中期は、明和七年より寛政元年に至る二十年間なり。秋成三十八歳にして居を失ひ、京攝の間に移り、四方を遍歴して常住なかりき、此間は或は京師に上りて商を營み、或は攝津に下りて寂寞の間に生活しき。朝に熱鬧に處し、夕に幽境に在るは、彼れが半生の生活なりけん。されど秋成の性、繁に居て事を爲すに適せず、其商を營みしは、産を破りしを全うせん念にいであるめれど又これいよゝ其産を破りて漂泊せし所以なり。「名利にうとく世の人とたがふ」秋成にして商に志し、止むを得ざればなるべし。曰はく商戸破産一爲「醫患」疾不立「業泊然二十年」と。そも彼れが商となりしは醫となりし以前なるか。余竊に思ふ、當時いかに醫たるに易かりきとも、尙幾

分か學ばざるを得ざるべし、疑ふらくは彼れの醫を業とせしは其家を失ふ以前即ち中期なるべし而して商を營みしは漂泊の餘、一時の思ひ付に由りしならん。『近世叢語』は彼れが攝津の消息を傳へて曰はく

上田秋成嘗居長柄或人問曰村居寂寞必有幽趣秋成曰然不能無愛憎者曰遠山背嶺與練野陰森成籬、菜花錦繡、霜葉丹青、春晴秋夕月夜旅雁深更寒蛩、春雨蕭草々露頭々、鵲角囉囉時語且叱、野寺鐘聲、夕鷗且待、霜如金、雪爲散葉鮮美、新穀先嘗、是可愛者矣、元早祈雨三冬無被、藁牀糲食、三月垂蚊帳、非綿或紙、蚊帳入、蟬結房、人來則驚、蝶布網、除即喚、春夜蛙鳴妨眠、秋風暴吹害木、野鼠飢穿堵、狐狸番盜飯、或水濁、或柴薪乏無朋、無話貧民餓鬼、里正國王是可惜者矣此の書甚だ信じ難しと雖も或は時として彼れの行ひ之れに近きものありしならん。

上田秋成居於長柄、結茅於水濱松林中、號曰鶴居、一夜盜壁而入、其翼翌日の意秋成見之曰好、宜迎風、乃以窓壁盜竄一日加茂季塵來りて名刺を通す直ちに刀を提げて其室に入る秋成勃然色を變て曰く子吾を殺さん欲するか吾老たりと雖も豈徒に死するものならんやと傲然當るべからず季塵喜ばずして去る古學小傳 近世叢語秋成の行爲動もすれば狂に類せり、而して老するに至りては益々甚しかりきといふ。彼れの狂は重に負けし魂の痼癖に基けり、すなはち狷介不羈の性の自招せし所也。

秋成雖中身政業而才氣超絕不欲倚於他人臆不辱區々法則其所持論多與世不合矣然不獨其所著者奇矣而其人亦奇矣近世叢語古人曰はく微妙なる狂氣なければ詩人たること難しと、又曰はく神來と狂熱との二を得ざれば假空の人物を活動せしめがたしと。蓋し詩人の性の極めて多感にして聞觀に敏なるや、時としては狂人の心狀に似たり、又其想念の具象的なるも狂氣のに相似たり。蓋し狂者は、其の思ひ浮ぶる

百八十
印象の甚だ強著なるが爲に、現實ならぬ空想を現實の如く思惟し所謂精神錯亂の發作に襲はるゝを常とす、これ狂者の詩才と共に夢幻の境に遊ぶ所以なり。秋成もとより狂人にあらず、然れども其の勃々たる妙想を思ひ浮べて直に之を筆に命じ、何等の努力をも感ぜずして自在の境に翱翔し、興來たり機熟すれば、滔々一瀉千里、妙想を傾瀉し來たる状態は、猶狂氣の殆ど意に制せられずして放縱不羈なるがごとし。あはれ秋成もまた眞詩人か、其の狂人に似たるも此の故か。

第二章 秋成の妻

秋成の妻は實家と其の生死とを詳にせず、思ふに秋成が漂泊の初、みまかりしものなるべし。『閑田文章』に、「上田餘齋亡妻の遺せる文の序を求めらるゝに應じて記す」といふ一篇の文あり、此の書巻尾に明和七年七月二十日とあれば、秋成の妻は明和六年の火災後、其の翌年、此の書の成りし前、世を去りしならん。文中に「長柄の庵よりこなたへのうつろひまでのあらし述られたるにて」とあれば、秋成家を失ひて直に長柄に行き、翌年京師に登り、そこにて妻を失ひぬと見ゆ。たゞし彼れの長柄にありしは少くとも四年、蓋し此の際「京攝間移宅凡十餘度」とあれば漂泊の最中なるべし、されど母はありしものとあはしく「後母給仕五十三年亡妻糟糠三十八年今年七十五」とあり、蓋し彼れは六歳にして養母を失ひやがてまた後の母を得たりきとするも、五十二年給仕しぬとすれば、母は六十近くまで存へしか。彼れは漂泊の間常に繼母に伴ひしや否や明ならず。其の老後磯貝氏によりしは繼母うせて獨身となりしが故にや。又「亡妻糟糠三十八年」と

云へるは其の妻を失ひしより七十五歳まで、自ら薪水の勞を執り、三十八年を經過せしを謂ふなるべし。さすれば妻を失ひしは三十七歳の時、すなはち火災前一年なり。さばれは當推量に近ければ老ばらく閑田子の文によりて居を失ひし後一年と定むべくや。

閑田子の言によれば、秋成の妻はよく夫に仕へて家政を理し、其の疇癖を和らげ、よく諫め、よくなため、多少の内助を興へしに似たり。且や「文かき筆のすさびなども拙ながらざりしよし」なれば其の氏をだち卑しかりきとも思はれず、又「此君なんわかきよりせの君にひかれて見聞くこともさばにさるゝから云云」とあるを見れば或は早う秋成に侍したるに似たり。又「衣ぬふつとめ此のみかへづらひ給」ひて深く學問あるをつゝみ「いきかよう人すらも其材を知」らざりきとあれば、此の贊、例の誇張とするも、尙賢婦らしき面影見ゆ。美樹の書に「いもの君へもくれへよきにきこえ給ひてよ」とあれば夫婦共に美樹に歌を學びしにや。『夏野の露』秋成の初に曰はく

田圃のふる長柄のはま松蔭にすむ露有けり身の病はたまんほごいさかりそめなるいほりして住けり

と其の夫をさして翁といふ、いと睦しげなれど、實際はいかになりしか。秋成嘗て一男子を擧げ愛撫養育す

上男子生れしをいさだきて見するにいさおほきやかに玉の光をさしてめでたかりければ誰もく限りなく喜びあへりけり此子の二つさいふ年に乳母は病して死にけり年月経るほごに愛嬌づき香き物云ひてよるづに才有て見ゆるを露いといたういづくしかりて身のなやめるやうなも忘るゝものに唯膝の上にするおきていさほしみ給へりけり

るるを「三ツに成ぬる秋の比より」病に罹り四歳の「夏のはじめ世を去りしかば、夫婦悲哀に沈み
あなや／＼なきまきけへびひなし翁足すりをし聲をあげてなまへり
さて長柄にありし折、小兒に「翁の物もの（妻）が物をもぬいつりて打きせ」たりとあるに、平素
貧なりしに火災後益々窮せしさま明なり。此の文さなきだに哀れなるに妻死して後之れを見いで
たり。

いつのいさまにかゝるはかな實して打ち置たまへりし物の中より探り出たる悲しきより捨んは忘れんとする一ツの心な
りしがすまも本の豈忘れんやはさてもくくも捨られし身のいくべき命がはさてなん寝わけ衣のむかし草さしもにがいあら
ためて獨のみあるいは往に山ほさゝぎす涙を添ふるこそうきの中なるうき事にもあれさいふこなき人にがこちつ背海
原はてなく思ひつくる物狂はしきよつかりしこの年月のむくひしていかにせよか我をすてけむ
と秋成の啣てる宜なるかな。案ずるに秋成の痲痺は之れを制する手綱たる妻を失ひて後一層の激
しさを加へしものゝ如し。

第二章 中期の著書

中期は秋成の漂泊期なれば著書と稱すべきほどのものなし。此の廿年間は製作期にあらずしてむ
しろ社會を觀察せし時代なりき。後日梓に上りし『毎月』『廢蓑』の二冊子の如きは概ね此の間に
物せし歌集ならん。さはいへど『雨月』は此際世に顯れたりと見ゆれば『春雨』『雨夜』の如き物語は
或は此の期中成りしにや、尙考ふべし。

茲に中期の秋成と共に當時の學者社會を窺ふに足るものあり、これ『阿刈腹』となす。これは本居宣
長の所編、秋成との往復文を集めたり。猶此の期の著書と思はるゝものは『漢委奴國王印考』なり
何れの時期に成りしかは明ならねど

茲歲天明四年甲辰筑前國那郡那志加島之一農夫於田畝中一得一個佩印、印中配五字、曰漢委奴國王、黃金重二十九兩大方
八分高三分廣銚高四分

とあれば、印を得し頃の作なるにや。全篇委奴國のゆかりを明辨し「皇朝の稱號に非ず」筑紫伊
都縣主之祖「伊都々彦と云都詐て我國王也と云るを是が族子弟の中なる者私に漢朝に通知して封
を乞ひ印綬を帶て來りしにやあらん」とて大に國牒を稱揚せり。『阿刈腹』の秋成はさながら我が
皇國を度外視したる如く見ゆれど『漢奴國委王印考』の秋成は國粹家にして勤王家なり、をさ／＼
宣長に譲る所なし。此印は今尙^{上野博物館}に蔵す國學者の喧傳する所、後世にはその由來を搜りしもの數多
あれど其の先鞭は秋成なり。倭の一字を明辨せんために多辨を費したる、又大和と大倭と混じた
りとして韻を論じ、古韻書に照し、

^上東以下幽以上は上聲去聲普通音中皇朝の假音は魏以降唐に傳らぬひて其則を立たるものなるべければ梁以降の音韻を以て
^畧漢代の字音は論定すべからざるなり

など云へるより見れば、彼れ廣く唐魏の書を繙き、仔細に漢書を讀みし如し。されば『阿刈腹』の
前篇の如きは、漢學者と和學者との衝突を現じたるが如き感あり。(撰者曰く、福笑子はこれより

『阿彌陀』に就き秋成と直長との争論を叙すること頗る詳細なれども、本論縁海き記事なれば割愛して載せず。

第二章 後期の著書

秋成の著書の梓に上りしは前斯と後期となり。前期の著書は小説にして後期のは専ら茶道和歌に係る、而して後期のは大抵門人の手に集められし歌集の如きもののみ、疑ふらくは舊稿を此期に上梓せしなるべし。第一着は『清風瑣言』也寛政六年七月。今や彼れは京阪の間に茶人としてのみ知らる。蓋し秋成は稗史壇に於ても、歌人としても、國文家としても、當時第一流の人にあらず、故をもて一般に世間は秋成を文人として注目するよりもむしろ雅客として推稱しき。これ當時中流以上の人々、平素閑居のひまに、小説を愛讀するよりも、和歌を朗吟するよりも、寧ろ茶器を翫弄せしによるなるべし。今彼れの雅人に重ぜられし様を窺はんため、餘所事ながら當時の茶人と『清風瑣言』とを見んに、已に『閑田耕筆』にも「茶香は風流の態にて近世盛に行はる」とあり、又『癖物語』にも「天下こぞりて茶の湯なる時代ありけり其世の人は郷黨茶なきには語らず室お茶に非ざれば入らず割截お茶に非ざれば食はず道具書付なきは買はずかさねばお茶と稱し、ぬかればお茶がないとそしる」などあり。總じて當時の雅客は千金の資を投じて一茶器を買ひ、家産を傾けても茶具を求めき

香はもてあつたふ調度など金銀賄給のものなひて貴人の翫びと見ゆ茶具はもの翫びて其室も松の木柱竹のなげし中壁のまつ

實に當時太平の餘、上下驕奢に耽り、華美の風を好み、されば閑散の便にとて茶器を弄びしもの多かめれど、未だ眞に茶を愛して其の理を究めしは稀なりき村瀬梅亭の言によりて明なり今は秋成は世人の産を傾けて一輕甌を買ふを笑ひながら彼れ亦容膝の居に米石の蓄もなく棲みながら、尙鶻居珍玩とて南蠻製茶瓶を有せりけり、こはこの書の初めに圖示せるものなれば「からだを葬禮ごみに賣ても其かけでもなり」珍品なりしなるべし。期くばかり茶事の流行せる折突然此の書出づ、其の歡迎せられしこともとよりなり、さて又『伊勢物語古意校』『よしやあしや』等の著あり

『伊勢物語古意校』は『癖物語』を著す際常に其文を翫弄せし消滴を止めたるもののみ、これを附録として『よしやあしや』成る専ら語源を搜索せるものなり、寛政五年秋九月を以て梓に上る、又『大和物語』を校したる書を見るに出版の年月も記さず單に其文字を傳へたるのみ、『源氏物語』の文法のことを論ひたる書なれど云ふべき價値なし、『古今集打聽』は加茂良淵翁の草する所なり、翁既に没し其の女其遺稿を公にせんす、時に會く秋成の京師に鳴るあれば校補を乞ひしものなりといふ、其他『源氏物語』を校し『萬葉見安補註』を作る、享和元年『冠辭考』梓行す、こは眞淵の『冠辭考』を補ひ、冠辭枕詞を究めたるものなり、當時年既に七十歳氣衰き筆力は衰へたりき、年月のおり／＼筆にまげし止めたるに、送に其巻尾に「いゝいゝはぶきやりしなり老きりてはよるづに爲す事のたゞくしくてなむ」と慨嘆せり、『文苑玉露』の「瑞龍山下に庵すみのこき露の日獨り曾に」といふ文『遠文集』の「十雨首」等を見れば、當時の生活を窺ふに足るべし、又『骨振物語』にて昔

振山の隱士茶の靈に迷ひての物語を記せるものあり自筆小杉樞村氏所持『好古集』に見ゆ。老翁より愚に物狂はしくて万すゝるにのみ有しな世に落はふり遊まり自筆三々三々なは目盲く心も共に若はれてそれにいつはりながら心をやりてやみぬべし著書論辯注解若干編の古井に運めてやうく快しと思ふにはななき夢見はてぬ程に我魂の古井におちて心さもしも梓に上すの意なり事さものあしきを今はさりかへさまほしきを唯打うめきて止まんものか、あらいきういにし年月に木にまらせつるの意なり事さものあしきを今はさりかへさまほしきを唯打うめきて止まんものか、あらいきうきの齡や奇々

老れば世の人数が派華江のあしかる業の男なりしを粗案なる前の漢文を参照

文化三年二月

瑞龍山下無勝七十五齡書

これ秋成茶に事よせて己が思を述べたるものなり。彼れすでに世を觀じ盡くして死し後笑を後世に残さんよりは寧ろ書を瀝めて我が魂を安うさんと欲したり、其の梓に上りしものをすらなほ後世に傳へざらんとしき。其の性の奇なるを見るべし。

案ずるに『冠辭考續』を著し、享和元年の頃は、彼れ古墳累々たる間に生息し、徒に薙露を歌ふを聞きては耳を傷ましめ、白楊の飛ぶを見ては我れ知らず悵然とし、秋草の晚、松柏の夕、獨り梵鐘に睡を驚かし、靜に世のはかなきを觀じつゝあり、然るに此際奮敵手、本居宣長は齡已に七十二、名聲天下に轟き、鏗鏘衰へず、世間に請ぜられて京師に上り、四條烏丸の東に寓し巍然門戸を張りぬ。秋成の當時の感如何なりしぞ。彼れの門下には千家俊信、田中大秀、渡邊重名、植

松有信等の鳴るあり、中山大納言、三條大納言、園大納言、花山右大將、日野一位、大炊御門中納言、綾小路中納言、芝山中納言、富小路三位等の諸卿、或は彼れを殿上に召し、或はみづから旅寓に來たりて、古典か講説を聽き和歌の冊を送り、厚遇至らざるなかりき。然るに此れは如何。霜枯れの落葉矮屋にふりかゝる昔物さびしく、訪ふ人もなき墓の戸には半夜の月の照すありしのみこの時の盛なりし事は隨從の門人石塚龍庵の都日記に詳なり。

第四章 秋成の和歌

秋成の歌集には『毎月集』と『藤箋冊子』との二あるのみ。『毎月集』は曾禰好忠の集むる所、其の序既に墓碑に見ゆれば云はず、『藤箋冊子』は岡崎の僧昇道の輯せるものなり。昇道嘗て秋成に事へたり、其の著の湮滅して世に傳はらざらんを恐れ、同志と謀り、其の文詞を集めて弘布せんとす秋成聞きて喜ばず、曰はく、吁吾目未だ瞑せず、何爲ぞ此の罪業をなさんやと。昇道答へて曰はく先生已に七十を以て涯となす、生くるも猶死するが如し。如何ぞ喙を吾が事に容るゝを得んやと秋成語塞り拒むを得ず、歎じて曰はく、己れの刀を以て己れの身を傷ふ者とは予の謂なる歟と。昇道即ち國文及び和歌數十種を收拾して一種とす、これ即ち『藤箋冊子』なり、此の書出で、秋成の才名藉々、洛陽の紙價爲に貴きに至りぬと云ふ(續近世叢談)。

蓋し秋成の名當時に高かりしは『清風瑣言』と『毎月』『藤箋』の歌集とにあり、これは文化三年を以て梓に上りぬ、時に年七十五歳なりき。同年七月二十五日は伴蒿溪が七十四歳にして逝きし時也。

秋成の歌學界に勢力ありしは橘千蔭の歌集『うけらが花』に散見したるをもて知るべし。又高溪の著『閑田耕筆』に

百八十八

近江彦根の陪臣大管中兼父其主の領地を檢する時或山家にて不納を賣るにつきて其家の後山に林繁茂せるを見付是を伐剪て代さなまばく未納にも及ぶま下きを告む農夫いなこれなくてはあわのふせぎいかにさすべからずといふそれは何の事ぞき問しに雪は積るものなりあわはつみて崩るゝものなれば林をもて防がざれば家をうちたふすなりと答へけるに中兼父は古儀を好む人なれば初めてさきりの万葉集に

ふる雪はあわになふりそ言張のわかひの岡の塞ならまくに

とあるも正しく是にてあわはふりて崩るゝ故に塞さざりたければあわにはふるこななれといふなりけりといへり蓋雪は水氣ある故によくつむあわは密雪に充べし寒至て強き故に水氣盡て輕しさればあわはいふならん上田秋成は釋せり常にあわ雪はふるほまなく消る春の雪さのみおもへりそれにて万葉の歌聞えさるはあらねど切ならずこれらも夏に失て爽にもさむるといふべし

と云へる文あり、以て彼れが當時一方に旗幟を翻へし、様を窺ふに足る。されど彼れ既に本居宜長に斥けられたり、全躰の國學者は殆ど彼れを夷狄視せしなるべし。現に今日歌學者中歌人として彼れを知らざるもの多し。秋成嘗て大文字火を詠じて曰はく

如意が嶽にはこの山つむのおほしやよらせけん相國寺の大まこの文字一つを谷峯かけて筆走らせふん月のその夜是に光を揚て宮も葦屋もあふぎ望ましむは世の目さまし上午よき岩倉花園加茂山につゞきて目を流しやれば受空こそ空にかしちを突入るゝばかりにてそれがあたりの山邊は九重のさのへの御垣なしてむ辨大宮しづにますべき國原なりけり黒谷よし田の丘つとままげみの庭もせの物に林の中よりそひへ出し騒もたが爲にさか遣りけむ此見ゆるあたりはいにしへのにしこりの郷ぞと

人のをしへしに

露霜のあしたに見れば山姫の錦はいまも残るなりけり

大凡和歌に志すの士の播かざるべからざる歌集に二あり、一は時代の風潮に率先し、一家の見識を以て能く特殊の格調を出だし、當世を風靡し、後世の模範ともなりぬべきもの、景樹の如き、眞淵の如き是れなり。さてまた『萬葉』『古今』『新古今』等各々其の時代によりて想を異にし調を異にす、これ吾人が人丸、赤人、貫之、伊勢の歌を玩讀する所以なり。且や古史、古人を知らんとせば勢ひ彼等をもて媒介とせざるを得ず。此等の價值ある歌集は皆讀むべし、されども同じく歌人と稱せらるゝも、敢て古道を發揮せし所もなく、其の歌はた格別の特調なからんか、後人玩讀するとをなさいへし、其を播くの必要を感じること薄ければなり。秋成の如きは蓋し此類ならんが、其の範圍狭小取りいでいふべき風趣なし。彼れの歌集はあるも只名のみにして其の人物を知らんと欲するに非ざるよりは之を播かん要もなし。彼れの歌は『冠辭考讀』四巻にも已に

古歌の工みは思ひがけぬ事をいへども人情のまをいふなり後人はおもてのみよるしくいふなり

とありて、眞淵の下流を汲めるもの如し、されど其の味を見ればむしろ古今以下の調に倣へるに似たり。左に彼れが歌文に對する意見らしきものを掲げん、

昔へは歌ま文のけつめなく育に出てまらばはさのへしなやうつりての世にこは歌なり是は文なりさしも音定めしは言に擧ぐるのみのうたひはやせるけぢめになんあるを立かへりてたゞ讀て見れば何のわきな言の幸ひなりけりもるこの人もいへりき(宋の陳氏文則)六經の文には異體なかりしなり故に易の文は詩に似たり詩の語は書に似て書は禮にひきし鳴鶴在

百八十九

陰其子和之我好爵音與爾之云を時の中に取交たらんに孰か是を父の辭と見あがさん其在乎子今興迷亂于政願覆厥德一流于酒一女雖淫樂從弗念厥紹一國數求先王克共明刑之詞を香の語に入るとも誰か雅の草のこゝに交りしとて撰出べきしも古言はひさつものになん有けるかしこには音韻をたふとみて聲をさしつへうたふさやこゝには言を延べ約めつしらべゆたたくうたひしものささるからに文にも歌にもおなじむり装ひして言はあやなせしたれなん世のさま人の心の長くゆたけきをばつくにもおぼし知らるゝなりけり(冠辭考綴序)

秋成の意見概ね此の如し。歌文の一轍なるを覺り、而して和歌と文章とのけぢめを立てたる、俗流を抜く數等といふべし。

まことや秋成は粗放の驕をまぬかれがたきも、尙其の自由進歩の思想は時流の上に卓然たり。彼れ曰はく

(今の)人の心さかしまに過て言狭く苦しげなるはしも下なげかしき業なりけれなべての人は衣にもうつは物にもあなぐりもとめていにしへなうつさまくするもの我輩は此言の宮びなのみ態をもふなりけり(冠辭考綴序)

と、其の所見の妥正なるを見るべし。あはれ彼れをして僻せしめしものは時勢の罪にあらずして何ぞ。

上田秋成

櫻庭 莖村

おもひ出るも慚愧千萬珍番がるもの二三冊讀見ると早急ち小説家傳の通きなりしと心得、おほけなくも近世小説史編纂を企

て、始は若々事業も進みしが、多く讀見れば多きほど、易きとむづかしく明かなりしと思ひしこと暗くなり、只五里霧中にさまよひぬ、一發見ありて嬉しやと心暗々しくなるあさより疑の雲はまた立掩ひて、果は我心に分けられて目も眩めく心地するに、我が淺學寡聞を今更知りて、筆を抛ち稿を棄てしが、左れども近松門左衛門、曲亭馬琴、上田秋成の傳のみなりと聞へ見んと筆を再び拾ひ上ぐるうち、近松の性行も馬琴の傳も秋成の事も委しく述べられし人ありて、事はこれにて盡き、我志しも果したるが如くなりぬ、此上になた古人を責たり憚たりし、金箔を剥がして味噌を塗り付んこと我等が分には恐れありとあきらめ居たるに、此ほど親知某君大阪よりわざ／＼我が爲に秋成の再編と其文集歌集を取寄られ、かつ秋成につきて文士不遇の論ありしより、感慨の餘熱此にまた、あつたましくも筆をさるゝ、嗚呼後の慚愧は今よりはた淺許ぞや。

某君より賜はりし秋成が手書の一紙は一紙に茶瓶を畫き、上に

冥福掩天眞 厄責顯奇才

あがつきにいつも泣む水湧らせて賣る茶をけさは春の初花

文化五年巳丑非我意

無 腸

これよく翁自らの生涯を盡したるものさいふべし。

上田秋成は浪華の人とばかりにて、出生の地およびその實家を知らず、享保十七年生れ(或は十九年)文化七年に死す、享年七十九歳(また七十七歳)京都南禪寺中に葬る、我意に非ずと昨日の我を打棄たる夫よりわづか二年にして、眼を疾みてものよく見えず、起居を扶くる者もなく、寂寥のうちにすでに心、灰となりたる殘軀ばかりを常に愛たる紅梅樹下に埋めしなり、西澤一鳳の隨筆言狂作書に、上田秋成は崇禎寺馬場の敵討とて世に名高く敵として狙はれたる生

田傳八郎の遺子なりとしたるは奇を好む作者たかしや氣よりの聞誤りなるべし、西澤一鳳は狂言作者にて江戸にも下り、すでに故河竹默阿彌翁もよく其人となり知られ、折々此人につきてのをかしき話あり、其中の一に默阿彌氏これが假寓を訪ひたりしに二階の壁には箆笥の書割あり、坐には古机と硯のみ、よくこそ來玉へ、先づ一服と火鉢押やり其の古机を持って一鳳二階を下りたるゆゑ、此は室の狭きゆゑ取片付たるならんと思ひしに、まばらく待たせて一鳳は酒一壺と皮包を持ち上り、たま／＼の珍客折あしく囊中の寒ければ、古机を賣りて是だけを調へぬ、いざと勸めて少しも貧を苦にせざりし奇人なりと、斯く物に拘はらぬ質なれば隨筆は賊の筆まかせ人に聞かまゝ見らまゝを深くも思考へず、書留たるにて言狂作書のみならず、同隨筆皇都午睡などにも他人隨筆中の話を多く聞くまゝに記し、また古人の和歌發句を引きしも間違數多なり、此人の隨筆一部によりて生田傳八郎の子なりとはにはかに信じ難し、まかも此敵討を初めて竹田小出雲が淨瑠璃に作りしは寶曆八年にして秋成すでに二十七歳の時なり、同じ大阪に在りての事なれば何とか他に志るす人もまた評判もありしならんに七八十年の後の一鳳の隨筆のみなるはいかにぞ、然れども秋成自身に其父母の名をいふことなれば疑案はつひに解がたきか、秋成一とせ妻をともなひて但馬の國城崎あきさきの温泉へ浴みし、事あり、其紀行を秋山記あきやまのきといふ、其文中丹波の福智山のやどりよりよしみの竹田を過ぎ大阪へとて歸るみちの件に「右手の山にそひて煙の立が賑はしく見ゆるを聞へば氷上の黒井といふこの聞ゆる郷はあやうは父達の住たまひし古さといかねて聞しものから

かゝるついでにつけて尋ねゆかましを母刀はな自のいかに待わびたまふらんと思ひ棄てこくりやうの阪道にかゝる云々」とあり、予其境にいまだ至らねば方角おぼつかなければ、明かにこれ秋成が父祖父の故郷を云ひしなり、崇禎寺馬場の敵討に敵を返り討にして卑怯の名を取たる生田傳八郎は大和郡山本多家の臣にて討たれたるも同家中の者なり、寫本の貸本屋物に崇禎寺馬場仇討といふ十卷あり、それには生田傳八郎は播州明石藩庄林八左衛門の次男にて生田惠兵衛の養子となるとあれど、秋成が自ら親祖父の故郷と云しにはあたらざ（尤も此寫本は種々不稔の事を取まじへたる坪もなきものなり）、四十年近くも連添ふ貞實の妻に我が家系を隠すのみか、よし隠すも偽り欺くべき秋成にはあらじ、小澤蘆庵は國學者中氣節ある人なり木下長嘯子を罵りて其集を手にせざりし人なり、其人にして秋成とは最も深く交りぬ、秋成家集中に名の見えて其まじはりの親しきを見るもの詩人にして村瀬栲亭、歌人には芳溪と蘆庵のみ

家集蘆庵しぐれのやみりして其あした傘もたせこされしに云やう

むら時雨ふるにさなれる笠の山がまでぞ君をさめましもを

南禪寺の庵をさひて

君がすむ宿の水音聞つれば濁る心もあらはれにけり

かへし

我庭のさしれ石のす谷水のすむさばかりは人目なりけり

年の暮にはいつも旅を切て聞らるゝにのみてかへせし歌

蘆庵

秋成

秋成

埋火のすみつきいたき部にも思ひをおこす友は有りけり

かへし

蘆 庵

また羨しき友垣ならずや、人を殺して國を立退き敵とぬらふ孝義の者二人まで返り討にして身をかしくしたる無道人の子にしてまかも娼家に出るとせば慷慨潔癖の蘆庵膝をまじゆるも身の汚れとすべし、其家にやどり薪炭をおくるの交誼あらんや、よし蘆庵は世情に疎くして秋成が素性を知らずとするも、此兩人と共に友とし交り深き伴蒿溪は秋成よりは一の年上にて大阪に共に住み世情俗談に通じたるものなり、かゝる異事奇説を六十年來耳にせでやあるべき、有りて諱ば秋成には忠なるか知らぬと蘆庵には何と云はん、かゝる事は萬々あるまじき事なり、奇説は人を惑はせ易し、また聞て傳ふるに興あり、一風が筆すさみにのみよりて生田傳八郎（或は源八郎）の遺子とは予は信ぜざるなり

因に云ふまきに福笑門子ありて秋成が事はつまびらかに述べられ、夫には予も一兩度下問をうけたれば思ふ事は問はるゝに歸りたり、左るゆゑそれに見えたる事は此には成るたけ奇くへし只予が今嗣へたるも異なる點は辨するこゝあるべし、福笑門子くせものかりに序したる竹憲といふ人を誰なるらんか關根先生を訪ひ、故只誠翁の自記の中に竹憲は竹内支々一なりとあるを見て直ちに此の竹憲を竹内支々一とまはめて其傳を事々しく舉げられ、夫より類推して秋成の江戸に來たりしとまで云はれしは若きはやり心の誤りなり、上田秋成の書に序したる竹憲は大阪の儒醫藤世黄とて秋成も尤も親交ありし人なり、關根正直氏も竹憲と只問はれしゆゑ俳家奇人談の作者竹内支々一と思はれて只誠翁の自筆を取出して見せられしなら

ん、秋成が友の竹憲と事よく分けて問ひたらんに、なご方角邊の此盲人を引出されんや、すべて問ふ人は指したる其事柄の一方なれど問はるゝ方は突然のうへ深く事柄を知らず思ひ誤つ事なくして誤つ事もあるものにて、問るゝ人の迷惑なるこゝもあるものなり、斯うは云へども福笑門子の此の穿鑿徒勞にはあらず、竹内支々一は目に盲して心に盲せず、俳家奇人談の著ありし事を紹介したる功少なしといふべからず。

上田秋成は崇禎寺馬場の敵討の敵手たる生田傳八郎の遺腹の子にあらざる證のものとも確なるを云へば此仇討は正徳五年の事にして秋成出生前十六年なり、其日のうちに手紙にて死し、又は自殺したりと傳ふる傳八郎十六年ながらへあらん事かけても思はれぬ事ならずや。

攝津中島郡崇禎寺に在る遠城治右衛門安藤喜八郎兄弟の墓碑に正徳五年十一月四日とありといふ

秋成みづから父母の事を云ひしは宮川保恭の爲に作りし旌孝記の文中に「噫、我れ父に別れて四十餘年、母二人さきなるはいときびはにて面をだに見知り奉らず云々」とありて未だ享和二年三月かいてるしぬとあり、これ秋成六十九歳のときにして是より四十年をかぞへのぼれば寶曆十三年なり餘年とあれば夫より前なるべし秋成二十八九歳の頃ならんか、母は若くしてまだ秋成が幼なきうち死して其面だに見知らずとあり、其人生田傳八郎の妾ならんにはあまりの年の差ひならずやかたゞ以て生田傳八郎の遺子ならぬとは断然たり、一風が聞くまゝの好奇談より、前後を考へざるオイヤ人共これを傳へあらぬ事を信らしくなくして實事譚といふ怪しきものに載せつひには大方の人も是を實説として疑はざるに至りしこそ悲しけれ。

左れども其父の何者なるよしは諱む事ありてやあきらかならず、おもふに丹波の豪家の子浪花の

遊廓に漂かれ狂ひて秋成の母とかたらししも、父母のいさめの厳しきに隔られ手切どかいふ事などになり父子の縁を絶ちたるより、父にして父ならず、子にして子にはあらぬやうになりしにはあらぬか、秋成はじめは放蕩にして後の母の訓にも戻り我儘に振舞ひ、父なし子と云るゝ恨みに營業などはせず、終に資産を失ひて諸所に漂泊する身とはなりしなるべし、前に引きし旌孝記の次の文に「後の母は今すでに十四年の昔へとなし奉りぬいまそかりし時は日を愛すべき心を露ばかりも持たらず大方の事ども御心にたがひて重き罪かうむりし云々」とあり勘當せんなどまで懲らされし事もありしならんか、若きほどより四十歳ごろまで學問に身を入れず、歌舞吹彈の花柳場裏にうつゝ心なりし事は其妻珊瑚蓮尼が老年に及び、二人長柄にやつゝしく暮したるに、斯くわびしき草むらの宿も、昔し君が家を外にのみなして、我一人母御の心をとり内外の事を取まかなひ、空しき園を獨り守りて涙にあかすこと多き時にくらべてはいどのどけく嬉しと云たる文にも知られたり、又門人釋昇道がつゝらぶみを集めし故由を記したる中に。

歌や、文や、露の輪にしては、いささきは、わづらひてなほせし昔は、よろづ打たはれがちに、まめくしき道に心ざしもありりき、四十といふ年より、よみつきならひしといふ物語たり、へちにまち文を題せられし一巻あるを、こは取ある事どもありてゆるしなし、さば四十は下めの手習の、それすら黄枝の術のいさまを論みたる遊びなればうへも多かるまじく

とあるにてよく知られたり、さきに福笑門子秋成を論じて秋成若きほどは放蕩不羈にして妓樓に

夢を結びて曉を知らざりしならんと云れしは知言といふべし、妾形氣、聞耳世間狙は即ち此歌吹海中の漂客たりし時の作なり、晤格テニヲハの法に合はざるも宜なりけり。文才縦横の秋成すでに其頃もてあこなはるゝ八文字屋風の書ぶりは摸して直ちに其堂に上り、多田南嶺をしてひとり奇才を誇らしめず、此才氣を移して國學を獨り學びしたるに加藤美樹江戸より上りて大坂城に勤仕したり、此人加茂真淵の高足弟子なれば秋成は人を介してその門に入りぬ、そは三十七八歳の頃なるべし、此時雨月物語を著して板に刻りて世に出したれば、美樹は其才を奇として、待つに門人を以てせず、朋友として睦みかはせしなり、志かれども秋成は慎しみてこれに師事し、後年美樹が京都に客死したる折にも葬儀厚く取まかなひ、其歌集靜舎集を校正刊行し、また美樹のよみうた中もつとも世に知られ師の真淵もよしと稱へたる、桔梗か原古戦場の歌。

ものゝ草むすひばれば年ふりて秋風寒しきちかふの原

といふを石に刻りて信州桔梗が原に建てたるなど其情厚しといふべし、美樹が雨夜のたみことばも秋成序を加へて浪華にて刊行させたるなり、かゝる因縁より本居宣長派よりは未徒孫弟子の如く見なされ、また彼が時めきて我が不遇なるより狷介の質は一倍はげしくなり物争ひも多かりしなるべし、我が詠み歌も時流とは同じかゝるまじとつとめて異躰に出でこれ古躰なりはた創意なり、我は我が歌を詠ずるなり人に倣ふて心の誠をのぶべきかはと我を張けしものなるべし、故に今の

世にも和歌者流としては傳はらず、將た二三の小説は變名なり若きほどのなぐさみなれば小説家として知られず、幽寂の境界に止む事を得ぬ遺問の煎茶の事のみ本事の如くなり、大枝流芳と優劣をわけつらはれて止みたりしは氣の毒の事なりし。

大枝流芳は大阪櫻の宮邊に住み風流好事を以て名あり煎茶の流行は此人を以て始すといふは早く青海茶話の著あればなるべし時はおかれて出たれど秋成の清風瑣言の茶事に深切なるには如かず、故に煎茶家にはたましく上田無腸とて香輜など席へくる事もあるなり、村瀬椿亭の藝苑日添また茶の事を説くこと詳なり、秋成は其逆の友にして其説も略同く、彼これに同じし、これ彼に續りたる互に相參攻しものなるべし

前章に秋成江戸へ來らぬやうあるしたるも其證を擧げざりしゆゑ推量獨斷の嫌なきにあらず今集中を檢するに左の確證あり比枝に傳つれり

眞まらぬの日枝の深雪の曉は富士見の老が思ひ出にして

また佐々木眞足が東行を送るといふ長歌の末に(上畧)田子の浦にゆふ花さけり、みすまるの玉拾はずは涙の穂のゆふ花つみて溜づまに、もて我せに歸りし日は見ぬ老が爲とあり秋成江戸に來らぬこと明かなり、是等の穿鑿無用に似たれど、今の編軍旅行と違ひ京阪よりすれば立歸りなるも一ヶ月は費すべし、まして江戸の風光を見んきて來らば半年三ヶ月短かくも其所にあるべし、江戸の歌人文人に交りなばまた秋成の生涯にいかなる變化を來たしたるや知れざればなり、江戸の歌人にして香輜の往復ありしは只村田春海一人が春海の家集後集中に左の一章あり

上田秋成がもと

春たちへるのどげさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ、今はいはほの中なるすまひをふり拾給ひて、ちまたの花柳に立ま下らひ玉ふらんは、いかに心ゆく御すかかならまし

すこもれる谷の鶯いかなれば都の春の心引かれし

さなん聞えまほしき、されどうき世の塵の、ののれがたかなるも、猶ほ市のうちに隠れけん、古人のためしにならひ給ふべければ、世のさびまらぬ人々さのみ、みやびはし給ふらんは山住のつれくならんよりは、さおし許りまわらすもの、いらいたすらに千里のよそにありて、萬まのあたり聞え承はらぬこそ、あかぬわざなれ、さはいへ雁の翅の行ひだに絶すは、中々に遠くて近きたぐひさや思ひなぐさみ侍らん、柳の糸のくり返しつゝ今年もさだえなく聞えまわらばや思ふな、ゆめ鶯の鳴音、ななしみ玉ひそ

福笑門子千薩の歌集うけらが花に散見したりと云はれしうけらが花を檢するに其中に上田秋成の事更になし、おそらくは此歌後集の誤りなるべし、其誤りの責は予も分かつたざるを得ず、昔て福笑門子の問に答へて秋成の如く來歴分たらぬ人を探らんには其友人の詩文和歌など外側より集め來て借その面貌を認むべきなり、江戸にては千薩、春海京にては蘆庵、蕪溪、椿亭、六如などの集を檢へ玉へよ必らず發明の事あらん、と斯う云しより推測して、うけらが花に散見したりは鶯がされしならん、學びの道の數多にて、心のどけく校へ玉ふ暇なきには無理ならぬ事なり、又予の答へにもぶくとしてよくは聞えざりしならん

事迹あらはなる人だにも其底の心はいかにある、いかに世をば思ふていとなみつゝはあると云ふことは、他人より付度しがたきものなるに此上田の翁は、我より自らの事跡を晦まさんとし、心血を分ちたる著述歌文すらも世にとめむと擽へたる事なれば、今よりして其人柄いかならんと推量することはもつとも難義の事にして、よくせざれば、我が始め思ひたる方だのみ引あて、あらぬ事になり行くべし、翁は自ら出所の陋しきを恥ぢて、我から身を持崩し、才にまかせて世上の人を白眼にのみ見しかとあもふに、長柄の假住にある頃も其妻と世がたりしての果に加茂の眞

淵翁は雲雀を題にて

霞たつ春野の雲雀何しかも思ひあがりて音をや鳴らん

と詠まれしが予もこれに付て

冬の野の枯生に交る草の床にいつ立空と雲雀鳴らん

とよめり翁も思ひありけなり、我もまたしか思ひありとや人の聞やすらんと打笑つゝ嘆息したりといふ、是を思へば放蕩の果の捨ベチに世を嘲弄したる人なりとも定めがたし、福笑門子古學小説と近世叢語によりて、ある日加茂の季鷹尋ね來たりて名刺を通じ直ちに刀を提げて其室に入る秋成勃然として子我を殺さんとするか吾死たりとて徒らに死するものならんやと傲然あたるべからず季鷹よるこばずして去るるいふ一條を出し、秋成の行爲や、もすれば狂に類せりと云はれたれど、此一話予が聞けるは大に差へり、加茂の季鷹もまた狷介不羈の人、嘗て東都に來たりて當時の歌人に交をもとめしが外面は皆な睡まじく歌の會などに呼びよばれまた其よみ歌も互に謙讓するやうなれど其内面は異を立て他を譏り、傍觀苦著しき事のみなれば

此も大人かしこも大人どうしだらけ角突合の江戸の歌人

とひそかに嘲りたるに、これを聞傳へて皆いかると聞きて、また

大人たちが怒り出しては恐しやモウ〜こんな所に居ぬこと

と狂歌して京都へかへりたる程なれば、南禅寺にわびしくある無鴈の翁こそ己が同調の友なるべ

けれど一日その庵の扉を叩き、これは加茂の季鷹にて候が此のあたりを不圖よぎり候まゝ御閑夢を驚し候對面たまはるべくやと云入した、中より聲あらく、事の次手に秋成を訪ふ季鷹のあるべき必定、汝は偽者なるべし疾く去れと呼はるに、季鷹頭をすくめて歩をかへし、翌日また庵を訪ひ、翁に逢ひたてまつらん翁に季鷹わざと参り候と云入れしに、よくこそと轉ぶやうにして秋成立ち出で先づこれへと座に招じ、まめやかに物語りしてありしが珍客の來られしに一種一瓶の儲なきは餘りに荒涼なりとばし待玉へとて、やがてして薄き酒少しと菜のごときもの、味増に和たるを取れたり季鷹それを味ふに何とも知れがたければ是はいかなる珍味にやと問ふに秋成は額を撫で、君が爲にとて今しも摘し垣根草といふものと云ふに季鷹も手を拍て笑ひたりと（此の一話友人川崎千虎翁より聞く）斯くありてこそ、兩人會見のさまでも思はるれ、名刺を通したりとて案内もなく其がまゝに刀を提げて初見參の人の室に入らば季鷹こそ先づ無禮の人といふべけれ、またこれを見て直ちに我を殺すかと惧るゝといふもあらぬ事なり、近世叢語はよき書なれど和文を漢文に書かへたるなれば其語氣大に違ふところあり、同じく秋成の事を云ふに長柄にありしとき其の佗住に盗人の入りたる事あり、壁をこぼちし其まゝにこれを盗と名づけし事も只これのみにては意を悉さず（近世叢語の原文福笑門子引かれたれば畧す）いま原文を家集より左に抄出す

庵を鶴居と名付しは、聖人鶴居飯食の謂にあらず、鶴は常居なしといふによれるなり、此庵に

ある夜ぬす人入りて、いさゝかある物をつぎもていけり、あしたもふ我よりもまづしき人の世にはあればうばらからたぢひまくいるなり

其入し壁のこぼれ窓に作らせて、盗窓と名づけて、風を入る便よしと人にかたりしかば、あな忘れくしとて、あしく云ふとも聞えし

これ他人が瘦我慢の翁よへチた物好よと笑ひしを自からもあざけりしなり、鹿笛を吹きすさぶを里の子等が聞て昨夜は鬼があめきたりと怖れしなど人も、笑へばみづからも笑ひしにて、狂といふほどの事にてはなし、かゝる氣ちがひの翁など自ら云しこと著書中に多し、これ老ぼけたるを卑下したるのみ其等を直ちに漢文にうつし、これを傳へて狂とせんは早からずや

また本居宣長と阿刈霞の事あるより執拗我慢の人とするも、あたれりとは思はれず(阿刈霞のこと福笑門子つまびらかに論じられたれば云はず)此の執念深き論難辨駁は、ほとんど國學者といふもの、特性の如し、また表看板とも云ふべし、秋成の事には要なきやうなれど事の因に予が覺えたるだけを擧ぐるも、先づ本居宣長が「直日盤」といふを著して其が道とするところを説けば市川匡麻呂といふもの「未賀能比連」といふを著してそれを難じ、それを説破するたけ「萬花」の著あり、また其を駁して三芳野檢校といふもの「級戸風」といふを出す、その答を小林文康といふがなして「ますみのかみ」といふ、又本居門人服部中庸「三大考」といふを著せば、本居大平は「三大考辨」といふを出すそを打ちかへして「三大考辨々」といふもあり、又本居宣長

の「玉殿」あれば優婆塞竺愷といふ者の「玉あられ論」あり、それをまた三井高蔭といふ人「辨玉鬘論」といふにて論じたり、「衝口發」あれば「鉗狂人」あり、「天祖都城辨」あれば、そのまた「辨々」あり、村田春海の合義解の講釋を聞て和泉の眞國といふもの其腰りを詰りしに春海これ答をなし、また眞國それを論じたる「答問書」あり、此答に春海はつまりて、其が根にて病死したるなどいまで云ふは、口の達者なが云争に勝つたぐひにて、あながちに答の少なきを以て論の窮したるなりとは定むべからざるなり、前田夏蔭が「木芽説」のうち自の若き折の事を「宇那爲波奈理」とかきしを林國雄といふ人とがめて、うなればなりとは女にこそ云へ童男には云はずと云しに夏蔭答へて「宇奈爲波那理辨」の著あり、其にまた「辨々」ありまた「辨々正論」あり、それにまたまた「大黃根」といふもありといふ、此他もさだめて此類多かるべし、これ國學者の云ふまけじだましひなるべし、かゝれば秋成と宣長の取合も多かりうち事といふべし、まかれども、國學の上におきては元より秋成は宣長の敵にはあらざるは論なきなり、此争ひの一事をもて秋成を執拗我慢とも云さだめがたかるべし

世の忙しさを淋しさも、ともなふ妻にぞ慰むなる、秋成は世をそむき、世の人にもあらぬものにうとまれしが、妻は夫の心も氣もよく知りて、睦ましく楽しく飢寒の中に志をつくしけり、穀は竹の簞子に轉べど、炊きて粥とすべき米はなく、垣にかけたる綿短も被は薄く雪にまた實を見るほどの田舎住にも、温かき眞情に、夫が冷腸を慰めけり、貧苦艱難といふことは、善人の上にあ

りては、同情ますく深く、愛し愛する事も身にしみて固きゆゑか孝貞の行ひ多く顯はる、富貴安樂も悪人の上にありては財を争ひ、勢を嫉み、夫も婦も誠ならぬ行ひ出來て醜聲の隠れぬも多かりけり、秋成夫妻はまことに我邦の孟光伯鸞か、實にうらやましき中にはありけり、秋成みづから妻の没後に其の生涯のあらましを云へり

もさ九條の農家の女、いさなき時に植山の某に養はれ、父母にまたがひて難波にうつり來たる、年二十一、我にがしづき、去年の冬五十八にして世なかり玉ひぬ、常に多病のゆゑに齡五十一といふとし、我母、おのが母をも見づきはて、髪を薙き名をも改む云々

名は玉とよばれしが剃髮して珊瑚尼といへり、和歌和文とも夫のかたはらに學びていと巧なりしかども女々しく物つゝましき本性とてこれを見せひけらかす事はなかりけり、梅津の橘經亮は秋成の歌の友なれば此方へはかくさず贈答もありしか、伴の菅原すら此の妻女の才學をばなきのちにて始めて知りしほどなりとぞ、斯う内氣なる人なれば秋成に嫁したるはじめ秋成は家を出て見かへらぬまで遊びまどへば姑の氣色さだめてよかるまじきをよく事へて家の事も取まかなひ、家を矢ひて諸所をさまよふ中も家計のことに顧みさせずして夫の心のまゝに學問せさせたるは底に雄々しく絶忍ぶ強き性のありしが故なるべし、秋成も四十年來友とも母とも介抱人ともたのみたる此妻に別れては悲歎の涙に眼を病みて四年おくれれてよもつづくに「其あどをひて世を去りぬ、珊瑚尼が艱苦にもなひしさまは、秋成「鶴居」の文中に左の如くあり

前尋刀自の聞さめてよしや釘さしたためし小鏡月も、君いまさぬ夜は、昔は物すさまじかりしを、今の時このひきりれんとわびつゝもあはすは難といふもの、心得さするよ、かう年をわたりて住つき玉はぬにも、めでたしと思ひし家には事しげく、君がせはし知らぬ物うさの侍りしを、此草むらの番にはかうのまじき世も有けるを、わびしにさふるにはよしともあしとも思ひ定むる心ならぬといふ云々

我爲のまもり神にてあはしけりと秋成が識ふれながら手をすりて云ひしも理りなり、此文にても始ははなやかに暮したるは知られたり、また源氏の巻々を題にて歌よみける事書に

冬の夜の長きをわづ老をあはれて、わたはらに在る人の(秋成が珊瑚尼をさして云ふなり)何くれななみか、つるあまりに、光源氏の物たりを、つぶくさよみて聞ゆ、一夜に二巻、或は二まき、長まはふた夜三まきにも、巻々のなはることに、是があたひに歌よむべく云ふ、いなまてよみつるが、其心をたがへつらんも知らず(物語の筋によくかなはぬもあらんとなり)いみじきをこわさなりけらし

とあり、翁姫爐をかこみて一人は讀み、一人はあどがひをもたげ或はかうべを低れて聴く、此人の心しらしひ此君の情しきなど其あひだにわけつるはんはいかにかおもむき深き事ならん、濁富はねがふ所にあらず此の清福こそうらやましけれ

某村曰此の妻女のこゝ井に露がせきつきころさ定めたる京都南禅寺をさほんきて博覽會見物の次手に忍び立て京都には行きたるが、何がさて、如意堂頭のサンライズ、美術館の課業人といふ愛敬者に魂は奪はれて、問ふも忘れぬ、尋ねてもまた答ふる人はなし、なれし東の花にもそむきて、歸ればやびて當世流行の風邪におそはれて文机のたばらへ遣ひよるもかなはず、何も拙者が流行を聞けばきて慌てまごひて病名を片カナで書て通がる脚にはあらす、實に據ない事にて此章大に運くなりの、左れば此にて一段落となし、熱氣も冷めたる其時に再び體語は書出すべし、珊瑚尼の實母の寺は京都二條河原真行寺

なるよし尼の文「露分衣」の中にあり心あらん人、よき折もあれば其俗性などもさひて此雜話によせ玉へし
 上田秋成の文章（歌文よりは俗文小説）を世の人のめでたしと云出しは、太田南畝子がこれを紹介したるなり、蜀山人の推獎ありてより江戸にてもくせものがり妾形氣など愛翫する人は出たるなり、蜀山人、翁の爲に長夜室の銘をつくり、翁また蜀山人が東都へかへるを送りて
 風あらし木曾山櫻此春は君を返して散らばちらん
 とよみぬ、蜀山人が我文界に、偉功ある、此翁を世に知らしたるのみならず、名古屋の也有翁も蜀山の賞鑒を得て後に其文の江戸にもてはやされしなり
 此の終に秋成が其妻を戀ひて夢にみつる事を記したる文のうちを引くべし、此文まことに、晩年の秋成の性情を盡したる自傳といふべし、此記のはじめに、出したる同翁の文と照し合さば、いよく明かならん

昔の人のいへる國を去り、うからやからにうさまれ、家業をせず、あそびてかへらざるは何人ぞや、是を狂蕩の人と云ふ、又才能には、り名をひいて、さん事をのみつとめ、おのれをいかなりともかへり見ぬは何人ぞや、是を智謀の人と云ふ、此ふたつとも道な失ふまや、翁此ふたつをのびれず、さらばみどかき才に苦しまんよりは狂蕩の人と呼ばれて遊ばん云々
 附言秋成には子なし、糊理尼が文の「夏野の露」にあるは隣家の子をあはれみしなり、此事福笑門子の記にあれば誤を正すなり

上田秋成著書（福笑門子查）

『雨月物語』	五卷
『くせものいたり』	二卷
『諸國聞耳世間談』	五卷
『世間妾形氣』	四卷
『雨夜物語』	一巻
『毎月集』	一巻
『藤巻冊子』	一巻
『登語通』	一巻
『冠辭考續』	七卷
『清風談』	二卷
『古今集打藤校補』	二十卷
『伊勢物語古悉校』	一巻
『よしやあしや』	一巻
『漢倭奴國王金印考』	一巻
『萬葉見安補註』	五卷
『大和物語校』	二卷
『落窪物語校』	二卷

池永泰筆記

『麻呂歌集校』
『靜舎歌集校』

正誤 西澤一風傳中『傾城國姓爺』を同人作としたるは事實に違へるを以て正誤す

近世列傳小説史上卷終

近世列傳小説史 下卷

目次

第一章 浮世草子の衰運 江戸小説の發生期	水谷不倒
第二章 江戸作者	水谷不倒
山東京傳	水谷不倒
曲亭馬琴	水谷不倒
式亭三馬	水谷不倒
十返舎一九	水谷不倒
柳亭種彦	水谷不倒
種彦が作の蘭譯につきて	水谷不倒
澳譯『浮世六枚扇風』	水谷不倒
爲永春水	水谷不倒

假名垣魯文……

野崎左文

二

近 世 列 傳 軼 小 説 史 下 卷

水 谷 不 倒 撰
坪 内 逍 遙 閣

第 一 章

浮世草子の衰運
江戸小説の發生期

京都、大坂に行はれたる草子類は、はじめ學者の手すさびになり、次第に戯作者専門の業に推移れり。すなはち寛文時代、假名草子の作者には、鈴木正三の如き佛法の玄理を窺ひたるもあれば、山岡元隣の如き國學に老莊の學をかねたるもあり、淺井了意は和漢古今の學に亘れる博識にして、これらは實に戯作者中得がたき學者なりき。然るに元祿に至りては、都の錦ひとり學問を吹聴すれども、恐らく窮迫の虚勢とすれば、其の都の錦に文盲無學と罵られし井原西鶴の學問もた知るべし。然れども西鶴は俳諧師たるの地位よりして、兎に角國學、和歌の道に暗からざりしこと、未々の作者の能く及ぶところにあらず。されど西鶴の學力は、季吟等が刻苦勵精の功を積み、漸くに古文の義を解したるとは同日にあらず、彼等の手に成りし其の註釋書によりて容易く得たる知識なるべし。團水、一風の徒に至りては註釋書を手にしや否さへ覺束なく、恐らく

は『源氏物語』の如きも、『湖月抄』は通讀なまで、立甫が梗概の『をさな源氏』にて埒明けしこと疑ふべからず。蓋し浮世草子は西鶴の天才に生れて、學問の力に出でざりしところ却て假名草子よりも小説の躰形一層具備せし所以なれど、單に作者の學力よりいへば元祿は寛文の學者揃に比すべくもあらず。降て八文字屋一派の作者となりては、學問の力は殆ど無く、僅に才に任せて雜書（雑書）の知識に腹を拵へ、軍書、假名草子を讀みて古今の成敗を知り、西鶴の好色本、近松の淨瑠璃本を六韜三略に備へて、當世の人情風俗に鹽梅なし、潤色附會、剽竊翻案、勝手次第に著作して、さながら作者は版木師、筆工と同様なる一職業と心得、二三十年間戯作の命脈を繋ぎにき。されど其積去り、自笑失せて後は、遂に意匠盡き詞藻枯れて、浮世草子はこゝに終局の一段落を告げぬ。最初學者に起り、中頃天才に榮え、遂に無學の手に墜ちて滅亡に及ぶ、これ草子類の運命なりき。斯く京坂文學は亡びたれども、これより漸々に東に移りて、また江戸に戯作萌芽したり。而して其の起點は増穂殘口なり。

増穂殘口は國學者にして名は最中、大和と稱す。似切齋の別號あり。豊後の人、京都に出て吉田家に屬する某社の神主となり頻りに神道を唱ふ。然れども純然たる國學者にあらず、むしろ神佛兩部を混交し、戯作に托して専ら無知蒙昧の社會を神道に感化誘導せんと勉めたり。すなはち『殘口七部書』及び『龜道通鑑』等にして正徳享保の初め世に行はる、殘口は諷刺的戯文の祖にして其の文脈は風來山人によりて先づ江戸に傳へられ、滑稽小説の種子となりぬ。

滑稽小説

風來もまた本領は本草學者なり、戯作は眞の遊戯に出でたれども、奇才一世を風靡せり。寶曆十三年に『根なし草』『志道軒傳』を著はし、より、數部の戯作ありて、概ね殘口が作の換骨脱胎なりき。其の七部書に對して、『風來六部集』あるが如く、彼れの衣鉢を襲へりしことは、又まほしく戯文中に見えたり。當時江戸には戯作と稱すべきもの、たゞ草双紙の幼稚なる赤本ありしのみ、而して其の趣向甚だ淺薄、たゞ荒唐無稽の昔し話を繪双紙に綴りて、新しき意匠殆どなく、僅に小兒のもてあそびに供せしに過ぎざりしが、安永に至り草双紙に滑稽の趣味加はり、大人も讀んで樂むものの一變せりき。これ實に風來の戯文が間接に力を與へたるに因る。これより江戸に滑稽小説の一派起りき。式亭三馬の如きは自ら風來を先師と仰ぐ作者なり。

なほ滑稽小説に著き影響を與へたるは、淺井了意が『東海道名所記』なり。これは十返舎一九が『膝栗毛』となりぬ。また寛文以降、京坂に行はれたる輕口ばなしと稱する話し本が頓智、洒落の素となりて大に滑稽小説の發達を助けたり。

歴史小説

歴史小説、俗に稗史（ばいし）と稱する一躰は、おもに支那小説の翻案に胚胎せり。たとへば京傳が『本朝醉菩提』は、支那の『醉菩提』より來れり、其の道濟の事蹟が一休の俗傳に附會せられたるより、京傳は、一休を主人公として、これに鈴木正三が『二人比丘尼』の骸骨のものがたりを補綴し、

一休が諸國のものたりを合せ支那書の題をほのめかし、又『櫻姫全傳』の雌魂病の事も、假名字にまばく見えたる支那譚の翻案なり。然れども京傳のは概ね先輩の翻したる案を更に翻したるものなれど、こゝに又自ら支那小説の翻案をして、風來が滑稽小説に力を與へし如く、江戸作者中に歴史小説の祖と仰がれしは、建部綾足なり、綾足は羅貫仲が『忠義水滸傳』を翻案して『本朝水滸傳』(安永二年)を著はしたること人の知るところなり。これに次ぎ佐々木天元が『日本水滸傳』(安永五年)伊丹椿園が『女水滸傳』(天明三年)等續出、一時水滸傳と稱する小説の外題流行し草双紙にまで其の影響を及ぼしき。綾足に繼ぎて曲亭馬琴支那小説の案を翻し、稗史に一生面を開き所謂唐山の小説は彼れが手中のものとなりぬ。

また近松の淨瑠璃本、八文字屋の傳奇ものを巧みに草双紙の合巻に補綴し、滑稽小説、歴史小説以外に一派を開きしものは、柳亭種彦にして、西鶴、其蹟が好色本の皮想を穿ち、洒落本の躰を奪ひ人情本の一躰をはじめしは爲永春水なり。

近世文化文政に於る小説の發達、其の緣由するところ頗る複雑にしてこゝに盡しがたし、大概是各自の傳に譲れり。以上はたゞ上方に榮えたる文學の江戸文學に影響したる主なる點を指摘して、兩者の關係如何を示したるのみ。

第二章 江戸作者



山東京傳肖像

一休が諸國のものがたりを合せ支那書の題をほめかし、又『櫻姫全傳』の離魂病の事も、假名草子にまば／＼見えたる支那譚の雛案なり。然れども京傳のは概ね先輩の雛したる案を更に雛したるものなれど、こゝに又自ら支那小説の雛案をして、風來が滑稽小説に力を與へし如く、江戸作者中に歴史小説の祖と仰がれしは、建部綾足なり、綾足は羅貫仲が『忠義水滸傳』を雛案して『本朝水滸傳』(安永二年)を著はしたること人の知るところなり。これに次ぎ佐々木天元が『日本水滸傳』(安永五年)伊丹椿園が『女水滸傳』(天明三年)等續出、一時水滸傳と稱する小説の外題流行し草双紙にまで其の影響を及ぼしき。綾足に繼ぎて曲亭馬琴支那小説の案を雛し、稗史に一生面を開き所謂唐山の小説は彼れが手中のものとなりぬ。

また近松の淨瑠璃本、入文字屋の傳奇ものを巧みに草双紙の合巻に補綴し、滑稽小説、歴史小説以外に一派を開きしものは、柳亭種彦にして、西鶴、其積が好色本の皮想を穿ち、洒落本の跡を奪ひ人情本の一跡をはじめは爲永春水なり。

近世文化文政に於る小説の發達、其の緣由するところ頗る複雑にしてこゝに盡しがたし、大概は各自の傳に譲れり。以上はたゞ上方に榮えたる文學の江戸文學に影響したる主なる點を指摘して、兩者の關係如何を示したるのみ。

第二章 江戸作者

山東京傳肖像



山東京傳

緒 言

徳川時代の華文は寛文に京都に發し、元禄中大坂に榮え、享保中二たび京都に榮えたりしが、寶曆の末より明和安永の間たとへ江戸には江戸文學の起原ありとするも、風來山人の媒介せいかんによりて京坂の文學趣味は少からず、江戸に移されき。風來山人より少しく後れて天明を盛時としては、戀川春町、朋誠堂喜三次等の諸才子出で、頗る戯文壇に筆を弄ひしが、未だ江戸華文の花は雪を帯びたる梅蕾の如く、花唇堅く結んで綻びざりき。

さる程に山東京傳、芝全交いで、戯文を弄ぶもの年に月に其の數を加へき。寛政のはじめ春町は故人となり、喜三次はた自ら筆を止めし頃には、唐來三和、櫻川慈慈成、田嶋金魚、鳥亭馬馬、森羅万象、初の振鷺亭など數ふるに遠あらず、此の時に當たりて群を抜き嶄然頭角を現し、は京傳なりき。京傳いで、戯文の風趣一變し、其の門下より曲亭馬琴興り、式亭三馬、十返舎一九も相續いて世に立ち、柳亭種彦、爲永春水等いで、爰に文化文政の華文は盛春に逢へるもの、如く、柳櫻をこきまぜたる都の錦を織りなしにき、而して山東京傳は眞にそが花の兄なり。つらく、惟ふに、山東京傳の生涯は種々の方面を具へたり。彼れは本業と藝術とを兩立せしめたりき。

馬琴が始めて京傳を見し時、京傳のいはく「草双紙の作は、世を渡る家業ありて、うたはらになぐさみにすべきものなり云

彼れは世間人、即ち實際家としても可なりに成功し、戯作者、小説家としても一代に名を轟かし、又畫工としても浮世繪師としても其の名を著せり、蓋し亦本黄表紙の作者には往々にして畫作を兼ねたる人あれども、其の最も聞えたるものは戀川春町、北尾政演(山東京傳の畫名)等三人に過ぎじ。さて又其の行爲に就きていへば、彼れの前半生は放蕩遊逸、後半生は異懼謹慎、前の京傳は宇頂天の人にして後の京傳は悔悟の人なり、即ち彼れの半生は半無意識にして半生は有意識なりき。

壯年の京傳は、當時の戯作者の多數にひとしく、一個の放蕩兒なり。蓋し京傳は一九が一方に於て當時或戯作者等を代表せし如く、他方に於て或通人的戯作者等を代表せりき、すなはち京傳と一九とはともに放蕩の戯作者なれど、其の趣に大差あり、予は一九が遊逸の狀を詳にせざれど、常に遊廊に入りて遊ばざる樓なく面識ならざる妓もなかりきといへば、遊び様自ら淡泊洒落なりしならん、或時は勘定に差支へて行燈部屋におしこめられ、或時は的なしに遊びて附馬を曳き歸り或時は買ひなじみを外にして他の妓と馴れ、悪性露顯して見せしめの爲に衆妓に侮辱せられ、而も恬と面白がりしは一九なるべし。彼れは廊を以て遊樂の別天地となし、此所に一夜の春を買へども百年の契を結ぶの心なし。京傳は然らず、彼れは遊廊を以て別天地と見做す能はず、否、遊廊は京傳が爲にはさながら第二の家の如し、彼れが北里に入るや、金錢を以て春をかはんとにはあ

らず、むしろ氣樂なる交際を求めんとするにありき。彼れが馴染の妓は彼れが妻と一般、おいらんの本間は、自家の奮奮よりも居心よく、其所に小説の方案をも立て得べく、其所に奮奮の求にも應ずべし。新造、かむろ、やり手、茶屋男の差別なく、青樓内の男女すべて彼れが家内の人の如し。豪遊を競ふは彼れが目的にあらず、寧ろ此の廊の内に一種の開日月を見出だすを本意とせしに似たり。『娼妓相簿』に柳嬢とらへる通人の様を寫して

此客へしてほれらるゝ氣もなく又きいたふうの聲にもあらずたゞ口をきいて二つ三つで心やすだてをされ所々のさしきへ遊びにゆくを樂に来る客なり此風の客まゝあるものなり

件の柳嬢は京傳が當時の俤なるべし。されど強ひて惚れらるゝ氣はなくとも、彼れ素より色中の餓鬼、一たび馴染むに至りては膠漆も音ならず、其の情の深き、恐らくは其の文机に對するが如くなりしか。

文化十四年(京傳没後)弟京山、淺草寺中人丸の傍に、京傳が文机の碑を建つ、碑銘は京傳が存命中に作りし「文机の記」なり。其の記に曰く「明和六年さいふ年の二月ばかり齡九歳さいふに師の門に入り立ちていはば文字習ひをめし時親のたまはりし文机なむ此つくみにはありけるさればつくりまもおるそにてみやびたるかたは露なかれどたふらし捨す年頭たのもしくかたはらなさらすひさり愛つゝあり經し年は五十に近く何くれさつくれる冊子は百部をえたり今はおのが心たましひほれくしう眼もかすみゆくにつしこもれたしるきがちにゆがみなどしてはおひに老しられるまなるはあはれいかはせむ

耳もそのれ足もくつけてもるまに世にふる机なれも老たり

山東 鹿 京 傳

蓋し彼の巴山人の印章に於けるが如く

京傳が久しく其の著作に採り来りし巴山人の印章は、嘗て深川に在りし頃、質流れの品きて父傳左衛門が與へしものにて、于時京傳は十九歳なりしが、此の頃より愛敬して晩年に至るも絶えて之れを失はざりき。『伊波傳毛之記』に見えたり。物に熱中して離れざる性は彼れが特有なり。されば、遊女に對するも一時肉の歡樂を買はんとするにはあらで、多少苦樂を共にせんのもことありしか。彼れの遊びは嚴密にいへば磊落ならずして寧ろ眞面目なり。遊廓の世界は凡て虚偽より成立つるも「虚言」からでた眞實」に遊ばんとするは京傳の本意なるべし。落花已に情あり流水豈ひとり心なからん。浮き川竹の流れの身、果敢なき勤めの遊女といふとも、竟には眞實なき能はざるべし。されば京傳が初の妻も妓なり。不幸にして此の婦身まかりしが、後に娶りし妻も亦妓なり。生涯二人の妻を娶りて、二人とも妓なりしは奇といふべし。

『伊波傳毛之記』に曰く

稔性質弱にして一臂の重きに堪えず然れども多病にあらす五十歳に及ぶまで多く二毛を不見眼明かにして歳に似ずなま若き方なり齒は一枚だに脱落せず性好で酒を嗜ます時として芳醇を傾け一盞を以て足れり又眞藥を好み服せず病あるも其自然に治するに任す唯食と淫とは過度せず又夏日白雨降り雷一聲すれば懼れて殆ど人事を断つ故に夏日に他行するも遠きゆかす又水を懼れて舟に乗ることなしこれ其癖のみ云々

『戯作者六歌仙』を披けば、巻頭に一個の畫像を載せたり、純然たる江戸町人の風にして、顯には髯の跡青く、年輩は四十前後、一脛に瘦せたりといはんよりは中肉にして花車なる形なり。冬の服

装どおぼしく、羽織の上よりゆるやかに襟巻を纏ひて、紙草製の烟草入を膝の上に置きたるが、左手を右の袖口へさし込み、右手に持てる煙管の吸口、口邊を僅にはなれ、吸ふでもなく下にゆくでもなくまばし漂泊る様、所謂通人がたのやにさかりたる身のこなし、髪のゆひ襟も時尙の通人がたどおぼしく、意氣に洒落れたり。顔の色はあさぐろく艶ありて鼻高し、口元は温和やかに、ニコリとをめる其の下より、清き齒並の一齊なるが、あざやかにあらはれたる、愛嬌あり。されど浮きくしたる方にはあらで、顔に見ゆる小皺は年の故とも見え、はた疳癬にもあらず、寧ろ陰氣をよせたる證なるべし。眉のいさゝか下りたる、眼の心ばかりくぼみたる、而も圓なるにはあらで稍流れたる、眸子の黒くして下臉のうちへ半ば沈める、悒鬱といふほどにはあらねど快濶ならぬ人と見えたり、これ實に山東京傳が肖像なり。

彼れ或時は宇頂天となりて戯れ遊び

「氣質淨きたるかたならざれども興來れば茶番狂言などして人を笑はすことありし(『伊波傳毛之記』)

又或時は一心不亂に刻苦勵精す

戯作者常に稿本を草する時は物さばがしきは更なり甚敷寒暑を惡み來客の長座をいさふ事は皆然り胸に浮きたる筋を書きめんとするときは甚に打入たる人の如く他念なくして食をも忘れ又用足しに立こをすら惜むことありこは予も覺えあることにて昔人斯の如くなるべし(京傳)平常稿本を綴れるなり食箸をも傍近くより開へなきて時を定めず欲しこおもへる折食し云々(戯作者撰集)』

或は粗放なるが如くにして縝密、或は怠惰に似て勤勉、一方は放蕩、一方は節儉、之れを京傳が爲人とす。要するに彼れは天明以降、文化文政の間に於ける所諸通人の摸型、才子の雛形なり。

第一章 初期

山東京傳は本姓を灰田、(『戯作者撰集』には拜田に作る)後に又岩瀬と稱す、俗稱傳藏、名は醒字は酉星、銀坐に居を構へて烟草入、烟管、家製の讀書丸等を鬻ぎぬ。其の居、愛宕山の東に當たりければ山東と號せしが、後に庵の一字を加へて山東庵と呼びき、蓋し山東とのみ呼ぶは僧上に聞ゆればなりとかや。又京橋の際に於て傳藏と呼ぶが故に京傳と號しき、屋號をも亦京屋といへりき。狂名を身輕の折介、番名を北屋政演といふ、又醒々老人ともいへり。

京傳は寶曆十一年辛巳秋八月十五日、深川木場町の質屋伊勢屋に生まれき。父の名は傳左衛門信明、老後に剃髮して椿壽齋と號しき。傳左衛門はもと伊勢の産にて年九歳の時親と共に江戸に來たり、深川木場町の質商伊勢屋某方へ年季奉公に住込みしが爰に數年精勤せしうち、性來老實なりしかば、主人の氣に入り、遂に擧げられて伊勢屋の養子となり、やがて大森氏の女を娶りて子四人を産ませき。長男甚太郎とは京傳がことなり。

一説には京傳は傳左衛門の實子にあらざりといへども其の確證を得ざればはらく實子とせしむ

次は女子二人姉をきぬといひ、妹を米といへり、姉は後に小傳馬町二丁目の小間物商伊勢屋忠助の妻となりぬ、妹は幼き時より文才ありて狂歌を好み、狂名を紫鷹式部といひきとぞ、惜い哉芳

紀二八、花唇漸く綻びんとせしころ、此の花他界の庭に移されけり、天明の末のことなり。

『柳史年表』によれば天明四年刊行の草双紙『人まらす思ひ染井』(政演齋)は作者黒馬式部とあり又同八年京傳が作の『時代世話二挺鼓』の開巻に京傳及び妹米かきし向ひの口給ありて左の言葉添へたり

「いもくくるさびまきよ此の双紙に女のたしななきを氣の毒に思ひよんごころなくこゝへ道具に兄弟にいんさやうにて毒をあける」さあるを見れば紫馬、黒馬いづれか是ならん但し天明四年頃には未だ十二三歳の年輩なれば作の名はたゞ借物たるに過ぎず而して『時代世話二挺鼓』著述の頃は存命なること明なれば此の後直に身まかりぬせし

末子を相四郎といへり、後に岩瀬百樹京山と呼ばれしは是れなり、(以上は『伊波傳毛之記』によりて大要を摘録す)京山は明和六年の出生にて、京傳より若きことは八歳なり(『蜘蛛の糸巻』の叙言に弘化三年七十八翁京山老人とあるによる)

『文机の記』に「明和六年といふ年の二月ばかり齡九歳といふに師の門に入り立ちているは文字習ひそめとあれば、京傳が寺屋へ上りしははじめは八九歳なるが如し、又『伊波傳毛之記』には京傳が幼少の時手跡指南を受けし禁師は本所伊勢崎町に住みし御家人行方角太夫といふ人」とあり。扱京傳は九歳にていろは文字を習ひ初めきといへど、これは唯儀式上の寺屋上りにて、其の以前より習字を學びしことは京山撰の墓誌にて察するを得べし、曰はく

自幼好文十歳縮寫孟子今尙存家

これを實とせば京傳が才能は割合に早熟のかたにて、既に其の頃より緻密精勤の質をあらはせしを推量し得べし。

安永二年京傳は十三歳、京山は五歳なり『伊波傳毛之記』に曰はく

是の歳父傳左衛門故有て養家を離別し親戚某の家に寓居す大森氏及び京傳外數子俱に共に從へり未だいくばくもあらずして京橋銀坐二丁目に居を移す

此の銀坐に轉居したるは妻大森氏の親戚某の扶助尤も預りて力ありきといふ

是迄は彼等養家に在りて可なりに成長したりしも、今此の不幸にあうて木からあらし猿の如く、漸く親類の世話にて銀座街へ居を下せしも、家計の困難なりしこと勿論にて

明年の春傳左衛門は初て町内を年首の慶賀に廻らざる可らざるに臨み家事不如意なりしかば別に從者をも雇はす京傳京山の兩人をこの從者に替へ兄には挾箱を、ついで弟は盆を擔へて年玉の品物を配れり此の事は京傳も口づから人にはなせし事あり。

と『伊波傳毛之記』に見えたり。時の状況さもありぬべきことなり。

太田南畝が撰にかゝれる、京傳が文机の碑の背面なる銘のうち「翁（京傳をいふ）及び百樹翁少好牌史小説」とあり、兄弟とも後に戯作者となりぬべき好尚は早くより備はりたりきと見ゆ、されど京山と京傳とは自ら性質を異にせり、京傳は才を頼みて放任せしもの、如く、京山は刻苦勉勵せしもの、如し。彼の京山が自撰の碑銘に「百樹自幼嗜文武」とあり、『作者部類』にも京山は

幼弱より漢學を爲して時彦と交り又書を東洲佐野文助に學びたり

とあれど、京傳は然らず、『伊波傳毛之記』は必しも信憑しがたき傳記なれどさすがに此のあたり

の記事は棄つべからず、曰はく

京傳は天稟の奇才ありと雖も讀書を好まず狂歌を嗜み洒落を愛して理屈らしき事は常に避るの風あり尤も弱冠の時なり日々境町に趣て長唄及三絃を松永某に習ひしが其音聲絶妙を缺くをもて遂に止む然れども天性の好事は他の遊藝をたしむに格ならず又北尾重政を師として専ら浮世給を學びしが給も亦得意ならず自ら驚て行はるべからずといふ故に中途にて廢す云々

京傳は多才の性來なりき、されば何を學びても器用にて、遊藝などもいろいろのこと下手を出だしきとあぼし、然れども音聲ばかりは才氣の能くするところにあらず、後々までも辯舌はよき方にあらずりきとあり。書は得意ならずとて廢めたりといふは寛政中頃のことなるべし。兎に角京傳は早熟の才子にて少年の頃より自儘の振舞多く、遂には朋友などに誘はれて次第に放蕩をはじめしも、傳左衛門夫婦はさのみこれを咎めざりしが如し、此のあたりの事實はた『伊波傳毛之記』に據りて差支へなきに似たり。

性洒落なるより聲色を好み吉原に通ひつゝ家に在るは横濱に一月中五六日に過ぎず然れども父母何故にや是を咎めず或日其母物を遺失し捜索するも遂に京傳の筆文庫までを開くに至る豈計らん文庫に吉原の町の引手茶屋某なる者に支拂し遊女扱代の書出し數十通あらんとは母驚き見て又おもへらく音見の遊興に没すもの若干あらん然れども其身の衣裳調度はさなり竊に親の物一品たりとも失しこなく又私に遣ひしこなく渠れ何の才覚何の金銀を儲けうるか奇も又奇其智我子といへども量るべからずと歎賞し京傳が遊里に赴くことを禁せざりき云々

さて其の財源を尋ねるに、天明の頃華奢豪遊を事とするものを大通と唱へしが、此の通人等十八人の一團あり、十八大通と自稱す、其が首領は白銀の針かねを以て元結にかへ、平常髪を結ぶに

も之れを用ひて豪奢華美を誇れりし文魚なり。京傳は此の文魚に殊遇せられ、厚誼兄弟の如き交りあり、渠れ唄へば我れ舞ふ、情愈々伴ふ、此に至つて齋の京傳が遊蕩の金録は明に文魚の資なりしを」と『伊波傳毛之記』には見えたり。或は然ることもありしならんか。當時の京傳は未だ部屋住の身分なり、文魚の如き大盡の巾着となりて其の金穴を利用するにあらずれば、如何ぞ放蕩の資本を得んや、然れども同じ記に兩親が却りて我が子のはたらきを驚歎しきといへるはいか

いあらん、こは恐らく記者の文飾なるべし。
安永八年京傳十九歳、此の年より彼れが齋工の生涯ははじまりぬ、『稗史年表』(漣水散人編輯)によれば、安永八年の條に『花のち江戸三曲の鼎』及び『かへり咲後日の花』(二部共作者未詳)齋工北尾政演と記して其の年の備考に

盛工政演今年より出づ後に作者京傳といふ是なり
とあり、これ京傳が草双紙に着筆のはじめなり。

『稗史年表』はいづ頃編輯せしものなるにや然然とされし『燕石十種』本の『戯作外題鑑』と大同小異なり恐らくは是れよりいでしものか『戯作外題鑑』には安永七年に政演齋作『お花中七開帳利益札遊合』あり備考に「七曲會案に京傳十五歳にて

作□者未詳道可考云々

京傳は此の時十五歳にあらず、考證不確なればしばらく『稗史年表』に従ふ

同九年は草双紙を畫きしこと更に多し、明誠堂喜三次作『龍の都四國うわさ』隣下逸人作『あか

し咄も隣が茶』をはじめとして、作者未詳なる五部の草双紙を畫き、尙自齋自作の草双紙『娘かたき打故郷の錦』を著しき、これ山東京傳が處女作と稱せらるゝものなり。『作者部類』に曰は

天明中初て戯射の草冊子を著す(二冊物、此書名を忘れたり)是其初作なり

爰に天明中とあるは記者が心覺を記したるより間違ひしなるべし『娘かたき打』と同作なること疑ふべからず。『稗史年表』の備考に

山東京傳娘かたき打に初て名を出す或人云おかし咄の隣下逸人も京傳のこゝなり其證は文政間に京傳が書記を抄集せし戯作

問答の頭痛の圖おかし咄と同圖なるを以て知るべし此外『くだ物見立』作者未詳五部の中『三曲の鼎』なども其類なるべしとあり、唯齋工の名のみありて作者の知れざるは皆其の人の作なるべし、但し右の『娘かたき打』にてはじめて其の名を世に出だしきとおぼし。されど此の作にては未だ山東京傳の名は掲げず、北尾政演齋作の名にて世に知られしならん、其の理由は『戯作外題鑑』に政演が畫きしもの此年六部の名を掲げて傍ら

豊并云此六番作者の名不知齋工政演齋作可成
とあればなり。

翌年にいたりて天明と改元せられき、此の年もまた芝全交、風車、喜三次、可笑等の作に挿畫を物せしと七八部なり。かくて天明二年に及び、山東京傳の名はじめて戯文壇に掲げられき、即ち此

の年『御存商賣物』といふ草双紙、京傳作として世にいでた。此の頃戯作者追々世にあらはれ草双紙大に流行しければ、此の前年四方山人草双紙の評判記『菊壽草』を著し「草双紙は大人の見物と成りたりといへり」(『稗史年表』)流行につれて草双紙の次第に發達せしを察するに足る。此の年亦同じ人の評判記いで、山東が作の『御存商賣物』は「總軸卷極上々吉」の名譽を博するに至れり、『稗史年表』に曰はく

今年も四方山人評判記題目八目を著す(中略)京傳が戯作『御存商賣物』には下めて畫作の名を冠し文化の末まで四十餘年の間妙作多し實に稗史作者中の一人と稱すべし

又京山が『蜘蛛の糸卷』には

京傳十九歳の時(天明二年)『御發賣物』(全三册板元龜屋自畫)といふ繪さうしをかくれしに其年四方赤良(蜀山)作にて繪さう紙評判記つたや板出版ありし時京傳繪總軸卷極上々吉にあげられき是道な戯作の花澤へ陥つ落さされしは下めなり

『稗史年表』『戯作外題鑑』二書とも『御存商賣物』とあれば『御發賣物』と京山が記せる恐らく覺え違ひの儘を記しならんか、或は寫字の誤ならんか。世間にて京傳が初筆を『御發賣物』と持て囃すは此の『蜘蛛の糸卷』よりしなるべし、されど京傳はこれより以前に多くの著作ありしこと、上に述べたる如し、蓋し京山が此の作を初作と思ひしは評判記に上りたる事實などにて晩年までよく記憶せしが故なるべし、『蜘蛛の糸卷』は京山が七十八歳に及びてもせしなれば

間違あるも無理ならず。

そもく京傳が専ら學びにし語工とならずして戯作者と變せしには何か仔細のあることならん、これにつき『伊波傳毛之記』は説をなして曰はく

京傳は思へらくおのれ十八大通の人々に睡みたるより分て文魚とは兄弟の思ひあり然して渠が評判を高くしあく迄も大通たる實目の落ちざるやう補助せざるべからず此の補助するにはおのれ戯作をなし渠れをそれとなく褒而より發揚し恰も日本國中文魚の大通なる事をしらすはおのれも交情を盡すまやいはむまかりく心に問ひ心に答へ爰に戯作の筆を弄ぶに至りしなり茲に至て始めて天明の末冊子を著せしに頗る行はれたり然れども喜三次春町全交等が上に立こまを得ざりき依て又紫志の文魚が粹たる所以を世にしらせばやとの意あるより洒落本を著したり

右は記者が例の臆測なるべし、はじめより確乎たる目的ありて著作に従事しきといふことは時勢より推すも、京傳が爲人より推すも、信じがたし。蓋し弱冠の京傳は「洒落を愛して理窟らしき事は常に避くるの風あり」と記者自らも評したるが如く、北里の花に浮れて飯をさへ忘れし程の時なれば確乎たる目的の爲に筆を採るなどいふ思慮浮ぶべしともおもはれず、寧ろかゝる事には無頓着なるが當時の京傳なるべし、よし文魚がこゝを草双紙に物せしにもせよ、そは恩人を敬愛する情誼の自然ならん、又京傳が實に自らかく口外したりきとも、そは京傳が戯作者となりし口實と見て可ならん。原來當時の草双紙は出産ちの赤本を去ること久しからず、未だ口も黄表紙の幼稚そだちなれば、其の趣向も頗る單純なるが多く、只管に小供等の目を悦ばせん爲のもの

なれば繪を専らとして、文の如きは寧ろ繪解たるに過ぎず、されば草双紙の作者には古き人にては清春、吟雪の如き、中頃春町の如き畫工より出でしもの少からず、否全く畫心なき者は草双紙の作者たる能はざるが如き理由もありしならん、一九三馬其他の戯作者が畫に巧なりしも偶然にはあらざるべし。仍りて思ふに京傳が戯作者となりしも別に深き仔細のありしにはあらで、己れ畫をかくのみならず、性來器用にして頓才ありしゆゑ、且つ畫き且つ作りて漸々戯作者の名揚るほどに、比較的短なるかたを捨て、其長を取りしなるべし。後に掲ぐる京傳が著作の表を見よ、其の初めは著作せしよりも畫きしこと多し、而して次第に畫のみのものは減じて著作の數は増し、遂に自作自畫をも廢めて全く戯作のみに従事せし事判然たり。京傳が自畫を全く廢めて他人に畫かしむるに至りしは、寛政二年のことなるが、『稗史年表』は同三年の備考に數言を附して

京傳作此頃より大に行はれ其名高し北尾政波が奇本を齎す此年にして止む

とあり。案ずるに山東京傳は寛政のはじめ迄は畫工兼戯作者にして生計は寧ろ畫の力にて立てきといふも不可なるべし、蓋し此の頃までは戯作者にして潤筆料を取りしものなけれど、他人の作に畫きし場合には、相當の禮金ありしなるべし。京傳は草双紙に畫きしのみならず、人物草花なども畫きて世に公にせしことあり。『伊波傳毛之記』に曰はく

(前略) 天明の末年繪きたるもの世に發行せり人物又ひ草花などもまれにあり且紅繪もありみな政波齎あり今も稀に見る

と、さるほどに天明二年四方山人に知られて草双紙の評判記に「總軸卷上々吉」の名譽を擔ひし青年の京傳はいかに奮發の志氣をふるひ起し、か、今之れを推量るに由なけれど、天明四年頃より續々と山東京傳が名を印したる草双紙の發行せられしを見れば、評判記の一言は多少彼れ舞鼓をせしを察すべきが如し。就中天明五年に出でし『江戸生浮氣蒲燒』は疑ひもなく表紙中名作の一にして其の趣向は百才兩分限と呼ばれたる仇氣屋の一人息子鮎次郎を立物にして世の自惚漢を諷笑したるにあり。鮎次郎は性來の醜男子にして作者は其の低き獅子鼻を木瓜の圓の半片半分の如く畫きたりしに、此の冊子いたく流行して鮎次郎の名世間に響き、爾來自惚子を鮎次郎と綽號し、低き鼻を京傳鼻と稱したり。而して京傳は如才なき男なれば人氣を取らん爲に世間にて京傳鼻と稱するを機として、爾來草双紙に自家の畫像を挿入するときは、必ず此の低き鮎次郎が鼻を己れが鼻に畫き其の像をも似せけり、然れども作者の眞の鼻は此の著ありて以來ますます高くなりけりぞ。(以上の事實は『戯作者小傳』鈴木得知氏の『大通世界』に依る)

天明六年畫も作も前年に比して劣るところなし、此年別に山東鶏告と名のりて『御富興行會我』『西國信多染』の二部を著しぬ、一は京傳が別號なりといふ。同七年畫作五部のうち『三筋立客の氣上田』はこれ又名作の一なり、同八年此の年の著作甚だ多く十二三部に及べり、別に『雪廊女八朔』は京傳門人山東唐洲作とあり、是れ又自家の變名なるべし。『戯作者小傳』に曰はく

(前略) 翁に近年は門人なし蓋くは門人あり見えたり京傳門人鮎毛に見え文化中には拜田泥牛さいふ名も見えたり又古

き册子に『御宮與行會我』といへるに山東鷄告(シホカセ)といふ名を記し享年二十五の歳に序す政のふさあり山東唐洲といへるも門人なり

活東子云龜毛は三教指歸にも所謂有名無實なり泥牛又鷄告などもいかにあらん其人あるにはあらうなを尋ねべし

と見えたり。いつの世にも小さき文人ありて少し名の知れたる人に乞うて門人となる例、珍しからず、されど京傳には前後に門人としては關亭傳笑(奥の泉侯の家臣なり)唯一人のみなりといへば是等は彼れが假りの名なること疑ふべからず、而して京傳門人などいしたるは、是れ又いつの世にも拙き作には己れが名を出だすを耻ぢ、さればとて出さずにはおけぬ事情あり、誰れの補助、若しくは某氏閑などして一方には其の拙劣をかくし、一方にて門人弟子のいかに大勢あるが如く見せかけ、利益を天秤にかける名家も少からず、京傳も恐らく此の類にはあらざりしか。彼れが世にいづるまでは人氣を得ん爲にあらゆる手段を運らして名に汲々たりしことは『伊波傳毛之記』亦之れを説けり、同書に

京傳はおのれが名をひろむる爲近郷近在江戸各所の神社佛閣へ山東京傳を染抜たる手洗拭を奉納し又狂歌師四方赤良野元木綱等の社中及書畫の諸名家其他高名の先生に交らざることをなし

とあり、果して此の事ありきとすれば、先に蜀山が評判記にて「總軸卷極上々吉」の名譽を興へしも多少おひきたての恩恵ありしかも知れず。

是れよりさき天明九年の頃より洒落本を著して是れ又世評高し、こはおもに次章に述べべければ今はいはず。さて天明九年は寛政と改元せられたり、時に京傳は二十九歳なり。既に戯墨に従事

すること爰に十年、此の間の著作は概して陽氣なり、言々句々輕妙洒落、彼れが眼中の世界凡て陽氣なり、多少猥褻の嫌なきにあらざれど、奔放不羈の處作者の眞を窺ふに足れり。其の特質は滑稽諷刺にして佳作頗る多し。『伊波傳毛之記』に曰はく

京傳は群を出て其作を賞讃する、こは大方ならざりける只全交の作れる草子折々京傳の作を羨む事あつて當れり依て京傳に井びたつ者は全交あるのみ其餘の作者は曉の星の如く有共なきが如し云々

右は天明の末より寛政のはじめに亘れる京傳を評したる詞なるべし。蓋し戯作者中の先輩にして且つ才子の聞こえ高き喜三二は天明八年に自ら筆を絶ち、春町は寛政元年を名残りして世を去りければ、京傳に匹敵すべき作者一人もなく、さながら戯文壇は彼れが獨り舞臺の有様なりき。素より京傳の先輩としては市場通笑あり、又芝全交などいふ才子なきにあらねど、是等は京傳と文壇の椅子を争ふものにあらず、寧ろ彼れの爲に強敵ともいふべきは曲亭馬琴なりしが、馬琴も未だ頭を擡ぐるに至らざりしかば、京傳が文名は恐らく此の時以後二三年間より盛なりしはなかるべし。これ實に京傳時代と稱すべきなり。下りて寛政の半ばに至れば一身上に種々の變動生じ、戯作の趣味も一變し、續いて馬琴起こり京傳の名尙高かりきといへども、寧ろ老功の稱ありしのみにて、此のころの全盛とは同日の談にあらず。天明の末は實に彼れが全盛期と稱すべし。

第二章 中期

本章には寛政元年より享和三年まで、凡そ十五年間の經歷を叙す。そもく天明の末に、戯作者

として世に立てりし京傳は、多少方便を用ひて其名を高めたりし嫌あるにも係らず、流石に虚名のみにはあらざりけり。『稗史年表』によれば、寛政元年中に發市せし草双紙は、都合三十二種にして著者は十四名なり、其のうち山東雜告とあるは京傳が變名なりとすれば、京傳、雜告二名一人の手に述作せられし作、十二番ありて、京傳が作は、實に總數の三分の二以上を占むる割合なり。素より『稗史年表』は、必しも精確といひがたけれど、尙京傳が戯作者中に有せし實力の一斑を示したりといふを得べし。

此の年の主なる作は『地獄一面鏡の淨はり』『艶なる哉女仙人』『三川嶋御不動記』きしも中洲話』等にして、中には此の頃、世上に起こりし事實に擬して作りたるも多しといへり、これ實にその頃の流行なりしが如し。

又同年麴町書林江崎屋が需により『孔子一代記』を著はしぬ、こは草双紙にあらず、畫入の半紙本なりきといふ。『作者部類』に曰はく

天明の季（伊波傳毛之記）には『孔子一代記』寛政元年と明記せり。麴町普國寺なる書賣の需に應じて、孔子一代記（半紙本也、卷數を忘れたり、三冊もの也、）弟京山が相四郎と稱し頃、手傳して孔子國語禮記などより、孔子の事實を抄録して、つがて、和文に綴りたるに、挿畫（北屋重政畫也）を加へたるもの也、當時洒落本をつゞりて名たる作者に、孔子一代記を誦へしは、ふさはしからぬに、嗜好にかなふべきものなれば、いはかりも買れざりけり、是京傳が半紙形なる讀本綴りし初也

此の批評一理窟あり、されど之れを京傳が稗本の權輿とするは唯外形に就ての評なり。後の小説體のよみ本とは、自ら別種ならざるを得ず。

是れより先き、天明中、幕府政を失すること甚しかりしが、將軍家治の薨去と共に、弊政改革の時機到來して、家齊軍職を繼ぎ、松平定信入つて老中となるに及び、昔日の餘弊を一新して、政令漸く嚴肅ならんとしき。これ天明七年のことにして、是れより風俗の取締も隨うて嚴重になりぬ。然れども當時の戯作者は、もと天明中、不取締の治下に生まれいでし自由の見にして、彼の天明の打毀と稱する大暴風のうちにさへ、別天地の太平樂を謳歌せし程の氣樂もの多かりしかば、爾來政令革まり戯文海にいかなる荒浪の騒立たんとする兆あるも、其邊に頓着すべき聲にもあらねば、相變らず放縱洒落の筆を弄びしが、今や彼等の頭上におそろしき鐵槌は墜落し來たりぬ。例へば彼の天明八年に、無類の大當りをなし、朋誠堂喜三三が『文武二道万石通』は、當時營中の秘密に關する事柄を綴れる物『稗史年表』による）の由にて、之を名殘として喜三三が戯作の筆を止めしも、畢竟は或筋より諭旨せられたる結果なりきといへり。次に戀川春町が『鵝返し文武二道』（天明九年正月出版）は、喜三三が『万石通』の後編なれば、これ又當年の秘事に關する作なり。『作者部類』に曰はく

（前巻）就中万石通の後編、鵝返し文武の二道、彌益行れて、これも亦大半紙摺の袋入にして、二三月頃まで市中を賣あるきたり、當時世の風聞に右の草紙のこゝに付て白川侯（松平定信）めされしに、春町病臥に辭して參らず、此は寛政元年己酉、七

月七日没云々(天明九年寛政改元)

かゝる風説實にありとすれば、若し春町存命なりせば恐らく彼れも亦公儀の咎を免るゝ能はざりしならん。當時の状況既に斯くの如し、戯文壇に日の出の作者たりし山東京傳が此の禍を免るゝ能はざりしは異心足らず。彼れは先づ書工として公儀の一打撃を蒙りぬ。『小説史稿』に曰はく

寛政元年の春、石部琴好と戯名する者世直大明神金塚の由来を角書して、黒白水鏡といふ、所謂黄表紙の冊子を著し、北尾政演之に畫けり、琴好は本所龜井町に住める、用達町人松崎仙右衛門といふ者にて、政演は即ち山東庵京傳の亦なり、然るに此冊子は佐野田沼騒動を書き綴りし者なる故に、怒ら絶板を命ぜられ作者琴好の仙右衛門は、手館の後江戸拂となり、政演の京傳も、過料申付られたり、

案ずるに右『世直大明神』は天明八年の出版にして、其の翌年寛政元年に、作者の琴好、書工の政演等處分せられしもの歟。『稗史年表』には此の作を掲げざれど、それは多分表中より省きたるものなるべし、同書天明八年の條、備考に、曰ふ

此の頃の稗史に管中の遺事に擬して作れるもの多しといふ、按ずるに「万石をなし」(中略)世直大明神」など

寛政二年に於ける京傳が草双紙の作は、前年に比して、部数は少なかりしが、名作と稱すべきもの多し。即ち『京傳浮世の酔醒』山郭公けころの水上『心學早染草』等是れなり。『京傳浮世の酔醒』は予未だ之れを見ざれど、作者の小傳(寧ろ戯作の魂膽を替きあらはしたるものか)に擬して作りたるものにして、戀川春町が『其返報怪談』にはじまり、『龜山人が家の化物』芝全交が智惠の程『万象亭戯作濫觴』一九戯作の種本』など、皆同種の書なりといへり。爰に注意すべきは

『山郭公』と『早染草』との二作なり。前者は從來の脈を帯びたる佳作にして、後者は新に生面を開きたる名作なり。前者は滑稽を主眼とし、後者は教訓を本意とせり。『早染草』は此の頃、世上にいたく心學の流行せりしによりて思ひ付き、矢張時好に投ぜし作なりきといへど、作者が平素の心掛、流石に精細周到の實あればにや、他の戯作者等が、徒に心學の文字のみを利用して、世俗を瞞着せんとするとは同じからず、作者先づ心學の一斑を研究し、其力の能ふ限りとはいへ、それを深切に、草双紙によりて説明し、世の婦女童蒙を教へ導かんと努めたり。蓋し京傳が、後來一轉して勸懲主義に至るべき最初の歩武は已に此の時に定まりたりといふべく、此の二作こそ彼れの生涯を分界すべき二箇の目標ともいふべけれ。

『早染草』は人皆の知れる善玉、悪玉を主材としたる趣向にて、情を悪玉にたどへ、心を善玉にたどへて、人間が悪事を働くは皆情の作用なれば、心を確固として情に翻れざるやうに心掛くべし、といふ意味を寓したるに似たり。素より心の有様を説明したりといはゞ心學的としても淺薄平凡の見解なること論を俟たざれど、尙人の心の作用を幾分か戯作の上に具象的に現はしたるは寛文頃の假名草子中心學ものと稱する戯作に胚胎し、江戸にては新しき思ひ付といふべし。されば此の新趣向いたく世人の喝采を博して二編三編と續作し、善玉、悪玉の評判いよ／＼高く、遂に人の非行を働くをば、彼れは悪玉なりなど、一般にいひ囃すに至りきといふ。『稗史年表』當年の條に

早染草に善玉悪玉といふ事を行つて書出し京傳が妙作殊に教訓の意深く大に行はれて二編三編にいたる後世に善玉悪玉といふことの業は此時におこる歟

と見えたり。されば是れ亦京傳が名をいよく高からしめし縁なるべし。

此の年慶事あり、京傳は此の年三十歳に達しながら、未だ配偶を得ざりしに春二月はじめて妻を娶りぬ。『伊波傳毛之記』に曰はく

寛政二年の春二月吉原江戸町扇屋花扇が番頭新造菊園京傳が元に行き、菊園は京傳が熱妓なり去年の冬勤の年期満ちて出陣すべきを尙止て扇屋にあり主人宇右衛門俳名墨河は京傳の友たりよつてひそかに菊園にすゝめ推て其家に遣せしなり京傳は渠れを元より馴染の敵妓なりしが敢て夫婦約束せしにあらざれども情の切なるを以て拒むことを得ず父母も亦これを咎めずして却て京傳に娶せり此婦人顔せ美を以て賞す可きにあらざれ共其質柔順にして素直なり是を以て新水の事能く此の婦人の掌理に理し舅姑につかふるに意にさからはず身も又浮薄に裝す適れ京傳の妻として耻らなき舉動なりし云々

更に珍客あり、此の年の秋曲亭馬琴、はじめて京傳が門人たらんを乞ひけり。京山が『蜘蛛の糸巻』は當時の有様を記して

曲亭馬琴は、寛政の初、家兄の許へ、酒一樽持ちてはじめて來り、門人になりたきよしをいふ、所を聞けば深川仲町の裏屋に獨り住むよしをいふ、家兄曰、草双紙の作は、世を渡る家業ありて、かたはらになぐさみにすべき物なり、今時鳴る作者皆然り、さて又戯作は、弟子として教ふべき事一つもなし、さればおのれをばしめ古今の戯作者、一人も師匠はなし、まづ弟子入はおとわりなり、まがし心安くはなしに來玉へ、また書きたる物あらば、みる事はみてやるべしと示されけるに、まばく來りてものを問へり(中略)

『蜘蛛の糸巻』は「いさ、かも文藝虚談なし」といふ書入れはあれども、その書は皆人の知れる如く『伊波傳毛之記』の後に世に出でし因縁附のものなれば、其の文意の字のまゝには信じがたきこと勿論なり。おもふに當時の事實はほゞ前抄文の如くなりけんも、京傳の馬琴に對する言葉は餘り横柄にして穩かならざるに似たり、京傳の氣質としては、縱令彼れを弟子となすとは断りしにもせよ、其の挨拶は必ずや丁寧なりしならんか、然らざれば馬琴いかに窮したとて彼れ性來の剛愎、いかんぞ一時たりとも京傳が門下に屈せんや。『伊波傳毛之記』に曰はく

寛政二年の秋馬琴はじめて京傳に逢ふ一見して舊知己の如し其好む所同しければなり京傳は寶曆十一年辛巳秋八月十五日深川木場町の實店伊波屋の家に生れたり此年三十歳なり馬琴は明和四年丁亥六月九日深川高松通日蓮宗淨心寺の近傍に住みし武家に生る是年廿四歳京傳よりは六年の弟なり其幼少の日は僅に隔る事三四町互に竹馬の友たるべきに識らずして東西に分れ今二十餘年の後逢見え俱に同好の知己ならむ奇遇も又殆ど妙といふべし(中略)相逢ふにおよびて此日各々故里を告げ互に拍掌して同胞の思ひあり是を以て交誼も疎ならず

『伊波傳毛之記』は京傳が死後の著にして、生前にも既に京傳と馬琴との交誼は昔日の如くならざりきといへり。殊に著者の傲慢(同書は馬琴の著なることいふまでも無し)は、自家不利益の事實を隠して一言其所に及ばざれど、當時の状況を記するに當りては、多少友情を禁ずる能はざる概あり、以て京傳が馬琴に對する舉動、さすがに冷淡ならざりしを想像するに足らん。而して京傳が勸告により、馬琴も自稿を示しきと覺しく、翌三年の新版に、馬琴が初作『用盡二分狂言』(二)

冊物豐國畫)は、京傳門人大榮山人と名乗りて世に出でけり、是は京傳が馬琴に對して好意ありし章標とも見るべし。

寛政三年の作中草双紙に教訓の意を寓し且心學的なるは、『廬生が夢其前日』『人間一生胸算用』『心學早染草』の第二編なり)等の數種あり。京傳は此の年より全く他人の作に畫くことを止め、己れが作といへども、多くは専門の畫工に委ねて、自畫作のもの纔に一二部に過ぎず、即ち此の時は京傳が戯作者たるの地位確定せしのみならず、まことに名譽の頂上に達したる時にして、前章に

京傳の作此頃より大に行はれ其名高し、北尾政演が資本を盡く、此年にして止むと『釋史年表』を引きしは正に此の年の事なり。

こゝに予は聊か前に遡りて、彼れが洒落本に就きて一言せざるべからず。京傳は洒落本を何時頃より著しよかといふに、其の作に記したる年號に就て考ふれば、多分天明五六年の頃なるべし。今其の二三を擧ぐれば、天明六年『客衆肝膽鏡』をはじめとして同七年『通言總羅』同八年『吉原楊子』夜半の茶漬』等あり。寛政元年には『通氣粹語傳』『新造圖彙』同二年には『傾城買四十八手』『繁々千話』『田舎談議』『京傳予誌』等あり。京傳が洒落本を最も多く著しよは寛政に入りて後二三年の間なり當時洒落本を作りて世に行はれしこと草双紙に譲らず。『伊波傳毛之記』に洒落本には息子部屋、夜半の茶漬、傾城四十八手、京傳餘師、其他數種あり皆雅俗をなく賞讃せざるはなかりき、これらの洒

洒落本にて其名高し、高し當時年々草冊子洒落本多しといへども世人京傳が作本ならざればすまめざりけりといへるは記者の過賞にあらず、洒落本は京傳が獨得の妙技なりしこと、後世に至りても異論なかるべし、まかるに此の得意の長技は却りて彼れが一身の上に厄難を招致すべき媒とはなりけり。そは寛政三年耕書堂葛屋重三郎の勸誘によりて、禁を犯し竊に洒落本を作りしに原因す。『作者部類』曰はく

寛政二年、官命ありて洒落本を禁せられたしに、葛屋重三郎其利を思ふの故に、京傳をそのつして、又洒落本二種を誂らしめ云々

又同じ事に關し『戯作者撰集』はいへり
京傳が作る洒落本も従前は潤筆を收めざりしかば當り振舞ひ稱して馳走し或は反物などを贈りたるが、或は戯作を依頼するに付廻妓補ぶるひより初て看代金壹兩を贈り其後一部一分又は二分位づゝ潤筆を收むる事になりしが、任憑文庫は無類の大當りなりし故に潤筆三分を收め一夜玉樓に招待して饗應せりといふ

而して此の年作りし洒落本は『仕掛文庫』『錦の裏』等二三種なりき。此の頃は未だ著作の潤筆料といふものなし、京傳が作の草双紙前の如く行はれたりきといへども作料として金錢を拂ふことなく、唯反物其の他の物品を遣るのみなりしに是等の洒落本に限り作料ありしなれば、葛屋の勸誘にうかど乗りしも利欲の手傳ひし間違なり。

『仕掛文庫』は「子共のきがへを入れてもたせて來るぶんこなり大いそ(深川のか(名)にてきものをまかけといふ事人のまる所なり尤もまかけぶんこを持せる事は細丁に限る」とかや、而して其の

細丁の世界を寫せるが故に此の名あり、時代を鎌倉に擬して標客を朝比奈、及び曾我兄弟の名としたれど、其の實は深川岡場所の穿ちなり。又『錦迺裏』は攝州河邊郡神崎の廓の景にして夕霧、伊左衛間の情事に擬したれど、是れ又吉原の状況たるに外ならず。そもく遊里の趣は夜を以て日にかふる仙境なれば、燦爛たる不夜城の光景こそ真に廓中の表面なれ、然るに此の書は「青樓畫の世界夜の景色の花美とはうつて變た案じの小冊」にして一切の有様、昨夜見しとは異なり杯盤狼藉即ち「昨夜の西施は今朝の無鹽」なる、美しき錦の裏の醜き様を寫したる一種の思ひ付なり。尙外に「娼妓緋節」も同年の作にして以上三部なり。索より禁制中のことなれば、外題には教訓讀本と記して發賣しけるが、書肆はもとより作者もまた更に禁制には介意せず酒々落々たる有様、左の文によりても知らるべし。『仕掛文庫』の跋に云はく

河豚羹を不食鳥圍ありく、疑果ありくはの愚味は美味を不知、くふ素痴は有毒を知らず毒あるを知らずして食ふ人は論ずるに不足、美味を知らずしてはざる人は一概にして危し不佞京傳好色淫蕩を著述すといへども實は前に美味あるを述べて後に毒あることを示し戒を垂るがためなり不知美味を知り毒をまつて恐慎んには河豚はくひたし命は惜しきは豈此境を悟したる君子の言といはんや孔夫子衛國の者一賢家を過りて曰くさあり吾未だ徳を好者吹肚魚を好が如くあるものなからずと嘆夫れホニ傾國傾城買ふものは此鐵砲汁の勢ひにあらずして何ぞや自ら後にまゐるす

まことに平氣なるものならずや、而して讀者よりも作者が先きに自製のふぐじるに中毒したるは自業自得とはいへ寧ろ笑止の至なり。此の洒落本を作りしにより、公儀より咎を蒙り、制禁を犯して洒落本を開板し、且之れに號くるに教訓讀本と題せしは、上を蔑にしたる段不埒至極とて、ま

ばく公儀の吟味を受けしが、一同は唯射利の目當のみに拘り、公の下知を忘却せし趣長入る旨を申上げて伏罪しければ、やがて一同を召出されて各々罰あり。作者京傳は手鎖五十日、板元重三郎は身上半減の罰所申付られ、行司兩人は商賣搦の上所追放申付られ、『錦の裏』仕掛文庫『娼妓緋節』及び古板の洒落本悉皆絶板となりけり。これは此の年の夏のことなり。『伊波傳毛之記』に「此一件は寛政三年の夏八月頃に起り全年冬落着」と豊芥子が言を引きて證せり。

さるほどに板元萬屋重三郎は元來大腹ものなれば、かばかりのこと畏るゝ様子もなかりしが、京傳はいたく恐懼して前非を悔い、再び法を犯すまじと、これより京傳は謹慎の人となりけりとぞ、喜多村信節が『聞之任』に左の一節あり、當時京傳が謹慎の有様を窺ふに足れり。

當春(寛政三年)劇作者京傳御告にて手鎖にて町内預となる(中略)京傳子に語りて曰封印改めに出る度腰懸より人の往來を見るに淡しく身にとなくばのどけかるべき春の日をさおもへり手鎖に逢ひし者のひそかにはづすやう有なき教けるがおそろしくおぼえて憤み居たりさいひしは實情なるべし

右『聞之任』當春とあるはいかゞあらんか、尙考ふべし。今は『伊波傳毛之記』の證言によりて「夏六月」のこととせり。

依りて思ふに曲亭馬琴は此の一件の時江戸にあらざりしか、其の理由は京傳と馬琴とは當時交際日尙淺くして、情誼もまた他日の如く疎遠にはあらず、馬琴もし江戸にありしならばさばく京傳を見舞ひ不幸を慰めしや明なり。然るに此の一件の年月を證せるに、他人の言を以てするを見

れば、己れ目前、此の場合に接せざりしこと疑ひなし。彼れは恐らく他行中にて此の一件をまらざりしならん。『蜘蛛の糸巻』に曰はく

(馬琴は)まばら来てりてものを問へり其後すこしばかりト筈をまりしゆふ、うらなひにて錢をもちんと、まるへありてかな川宿を心あてに錢次第にて永くも足を止めんとていさまごひに來りしが、其後六七日首づれを聞かざりし故、馬琴は狼にや喰はれつらんなど、家兄戯れいはれしが、ある日、今歸りしとて來り旅寐のはなしするうち、物なき調子でくはせ、さて立ち歸りしが、或日又來りていふやう、旅の留守に出水の(是寛政三年の洪水)ために、疊残らずくまり、壁も落ち、勝手の物流れうせしも多し、旅の稼ぎもはかしくしからざりし故、今我足なき疊の如しいかゞせんといふ、家兄曰、まからば當分我所に食客せられよ陽きて、馬琴大によろこび内弟子の心にて居し故、衣服までも心つけ給へり、かくてありしこと年ばかり、ある日、地本間屋高屋重三郎來り家兄にいふやう、此節見世の番頭引負にていさまかやり、帳場あきて見世付あし、みれば居候の男年比もよし、帳場に付ければよし、かへたき物なり、いかゞあらんといふ、家兄曰、酒はのます、手も書き、文字もよめ、作氣もあり、てうごよらん、まがし實體きたしかに請合申されぬ、何れ當人に咄して見ん、高屋販りて此事を咄しければ、戯作者になりたく家兄をうらやむ馬琴なれば、大に喜び家兄世話にて別に請人ありて、證文をなし、高屋が家僕となりしは、己目前知りたる事なり、さて奉公中、花の春風の道行、全二冊春期備にて、高屋出板、馬琴自序に京傳門人となり、此双紙大に行はれてより、年々作ありて高名になりぬ

とあり。京山が記する所日附判然せざれど、確に馬琴が神奈川宿へ出稼中に一件あり、馬琴が失敗して京傳方の食客となりしころは、一件落着後のことなるべし。されど京傳は此の一件にて其の名ますく世間へ廣がりしかば、本屋等はいよく彼れを慕ひ、強ひて翌年の新版を求めたれど、京傳は此の度の事件に深く恐怖したりけん、まばらくは著作もはかしくしからず、幸ひ馬

琴が家に寄留せれば、いくらか彼れをして代作せしめ、漸く己れが責任を免がれたりきといふ。『伊波傳毛之記』に曰はく

京傳は深く恐縮して是より諸直儀殿の人となりぬ而して此事世上一般に聞えしより京傳の名聲いよく高く牛打童うしほたる、盤が軒端に迄も京傳の作本を知ざるなき迄に至りけるかくて立日は早く初冬の頃にもなりしかば手鎖御免の日もきて後例の高屋鶴屋泉市等板元より明春開板の草冊子の題本を頼りに求めてやますこは年來の間柄の義理もあれば絶て推辭むことあたはず然れども茲に其求めに應ぜんには最も時は冬のはじめ故幾部の著作をもなしざるいさまなく且つ彼の疲勞もいまだ調はず現地にあさる心なし茲において馬琴ひそかに代り京傳の越向を取りて専ら著作すまかも數種日子四十日はかりにして稿しおぼりぬ依之諸板元は明春開板することを得たり板元は不識が都て草双紙悉く馬琴の代作なりし此作の著述草双子は實語教雅雜體體韻餘の木なんご或は教訓物或は昔はなしを直せしものによりける

『伊波傳毛之記』は馬琴が寄食のことには及ばず、二人が相反目して事實の幾分を抹殺せるは惜むべし。然れども彼此對照すれば當時の状況はい明なり。馬琴が京傳方に食客せし證は『鼠婚禮塵功記』(馬琴作)の序にも京傳が「曲亭某嚮に予隠れ里に寓居しひと皿の油を嘗て友とし善し」といひしにても蔽ふべからず、又『稗史年表』を見るに、馬琴は寛政三年に『用盡二分狂言』一種を出だし、後、其の翌年は上梓せしもの一種もなくして、寛政五年より續々出版ありしを見れば、寛政四年は京傳が代作をなして、自家の名を出ださざりしこと事實なるが如し。かくて此の不吉なる年も暮れて、寛政四年とはなりぬ。京傳は最早再び洒落本に手を焼かさざりし

のみならず、草双紙とても其の部数僅に七八部に過ぎず。悉く馬琴が代作といふ言は受取りがたきも其の中いから馬琴の代作ありとすれば、京傳の自作は極めて僅少なり。されど此の年記すべきは『梁山一奇談』とて『水滸傳』を草双紙に譚案したるものなり、此の作綴に六冊十回に過ぎざれど、後の『水滸傳』の草双紙は、京傳が此の作に倣ひしものなりと『戯作外題鑑』に見えたり。これも實際は新趣向の浮ばざりし窮策に相違なきも、却りて時好に投ぜしは運のよかりしなり。

此夏京傳は思ふところやありけん、柳橋なる方八樓上に於て書畫會を開きけり。

是より先京傳吉原に於て素顔さいふ小唄めりやすを逸作し狭江露友に三絃の手をつけさせ中の町にて件めりやすをひるめたり、こは心に考ふる所あつてなり京傳は今尙ほ恒産なきをもて業を立て以て生涯の謀を爲んと欲す是を欲せば苟も財を納めざるべからず寛政四年五月、五日雨の垂れる空に定めなき世の人心如何はせんか隣隣せしむいで思ひ立ちぬるこ果さぬも又男にあらずと兩國柳橋なる萬八樓上に於て書畫會を興行せしに來會するもの百七八十人盛なりといひ難きも先づ中位の會なりし故收納は三十金に近し尤も此會上の酒食及び席費は地本問屋鶴屋馬泉市等にて取附たり茲に至て先回より貯たる金今回の収入金を合せ尙ほ不足は借財し寛政五年の春京橋銀座一丁目なる東側橋の方の木戸際に借屋し(此家間口僅に九尺なり)紙烟草入全煙管店を開きしに大に繁昌して月毎に八九十金の商をしたり然れども京傳は店頭の事を顧みず只烟草烟管包の形なきを工夫して製作させ而して是を賣らするのみ云々(伊波傳毛之記)

當時京傳は卅二歳にして妻をも娶り、加之去年の一件より深く考ふるところありて身後の謀を畫したるはさもあるべきことなり。銀座二丁目より一丁目に轉居し、さうさの商賣をはじめし

此の年なりきとほぼし。

寛政五年先きに娶りし妻、きく血塊といへる病に罹りて身まかりぬ。『伊波傳毛之記』は當時京傳が病婦に對する仕打を記して左の如くいへり

妻きく血塊といへる患に罹り病尤も危篤なり予時京傳は、この苦痛になやむ叫聲を聞くに忍びずさて日夜吉原の妓樓に在て會て家に還らず此頃より先に京傳は江戸町綱八玉屋の抱姫妓玉の井(『作者部類』には白玉とありいづれも同人をいふなるべし)といへるに深く契りなこみ雨の夜雪や風の夜も通ひ麻に居つけの口舌のはてのそら兼入れむり覺よと吹かくる煙草も蒸る床の中家をば願ざりけり斯くつれなき夫を菊は更に恨もせて死去したることばかなければ扱死去せし言京傳にしらせければ次の日家に還り葬式形の如く執り行ひぬ念きては後妻も迎へず兩三年を過しけり

此の記事たるや例の筆癖、容易に實情としては耳を傾くべからざるも、尙京傳が前妻きくに深切ならざりし事は多少其の實あるべし。原來此の菊は前にも見えたる如く、樓主宇右衛門の計らひにて、強ひて京傳が許へ乗込ませたる事情もあり、當時京傳が情の切なるがために拒む能はざりきといふ語のうちには、好んで此の女を娶らんとする意のなかりしことを示したるに似たり。蓋し京傳の如きは弱年の頃より花柳の巷に入り込みて通人粹子をもて任せしもの、且や當時の習慣が習慣なれば此の種の人に對しては、あまり嚴格に夫婦の關係を論じがたし、さすれば此の頃既に玉の井(京傳が後妻)が許へ通ひしことなかりきともいひがたし。但し玉の井が後京傳に嫁せしは『伊波傳毛之記』によれば寛政十二年にして其の時二十四歳なりきとあれば、今寛政五年は其れより七年前にして玉の井は十六歳なり。十六歳にして妓となるは珍らしからざるも、此の以前

より彼れが許(足)を運べりきといふ同書の説に従へば、殆ど十年間の馴染ともはざるべからず、かゝる長き間の狎妓なればこそ後に其の妻とはなりけれといはれ、それまでなれど、多少の疑なき能はず、されば此の事に關しては予は兎角の批評を下さず、唯記して後の考を俟つ。戯作の潤筆を定めしは山東京傳にはじまること人の知るところなり、こはいつごろのとなるかど問ふに、年月は定かならず。

寛政中京傳馬琴の兩作の草冊子大に行はるゝに及て書肆耕書堂仙鶴堂相謀り始めて兩作の潤筆を定め件の書肆の外他の板本のために作することなからしむ京傳馬琴是を許すこと六七歳爾來すく行はれて他の書林も是を拒むことを得ず廣く著編を興へ刻すことになりけり、又其潤筆も漸く騰りにき皆これ書林等が所に従ふのみ後に出來つる戯作者は例を推して潤筆を得るものあれどよく京傳馬琴が潤筆に及ぶものあることなし(『伊波傳毛之記』)

こは馬琴が京傳と並び稱せられしをほのめかさんとて故意にかくいへるならん。されど京傳馬琴が寛政中同時に潤筆料を得るとなりきと云ふは受取がたし、其理由は京傳は既に十餘年來文壇の經歷ありて當時第一流の名家なれども、馬琴は未だ京傳の如く名を爲す能はず、殊に『稗史年表』によれば馬琴は其はじめ寛政二年より文化三年まで鶴屋萬屋以外の書肆にては一部も發行せず(但し草紙のみをいふ)京傳は寛政四年より文化三年までの間に一度『化物やまと本草』を山口より出版せしのみ、依りて考ふるに寛政中に京、馬二家の手を書肆が縛りたる形跡見えず、こは寧ろ文化の頃にはあらざる歟、されど潤筆を取りはじめしは京傳なること洒落本の條に審な

り、馬琴は恐らくなほ後のことなるべし。

京傳は性來旅行を好まざりしにや、或時父傳左衛門強ひて勤めて京坂は遊ばしめんとせしが果さず、然るに寛政八年遂に心を決して家を出でしが京坂には至らずして三島より沼津邊を百有餘日漫遊し、此の間書指の求めに應じて潤筆二十餘金を得て家に歸れり。然るに此の時併に召迎れたる從僕翌日其の金十餘兩を竊み去る京傳自ら追て品川に至るも捕ること能はずしに後此の賊捕へられ十兩以上なれば罰死に當るべき所を京傳父子間を垂れて九兩三分を申立て賊が一命を救ひし是等は仇に報ゆるに恩を以てするものなるべし、此の外に日光社參一度、京傳が旅行生涯に都合二度なりきといふ(『伊波傳毛之記』)

寛政五六年よりは作はかくしからず、唯年々六七部の著ありしのみ。寛政九年中に上梓せしものは僅に四部、即ち『三才圖會とさな講釋』和莊兵衛後日ばなし『正月故事談』嘘からでた實ばなし』等にしていづれも教訓の意を含み、以前の輕妙洒落は始と其の姿をかくしぬ、これ一件以來京傳の心に著き變化を來たえ、證にして是れより戯作の趣向次第に面白からず、最早昔日の京傳にあらず。

寛政十年京傳『忠臣水滸傳』前後十卷、北尾重政(著)を著す。『作者部類』に曰はく

「文化のはじめの頃(こは唯心覺を記したるに過ぎず)忠臣水滸傳の作あり(前後十卷にて北尾重政の書)此冊子はかな手本忠臣藏の世界に、水滸傳を撮合して、おかしく作り設けたり、是京傳が國字の神史を綴る初筆也、且水滸傳を劇稿擬せし者、是より先に、曲亭が高尾船字文ありと雖も、そは中本也亦擬意亭が伊呂波水滸傳の如きは、醉語と題して相似る也、いれれば綾足が本朝水滸傳ありて以來、かゝる新奇の物を見ること世評高かりしかば、多く賣れたり、此頃よりして、體本

漸く流行して、遂に甚しくなるに、京傳の稿本を乞ふて板せんと欲する書買師あり云々

思ふに綾足が『本朝水滸傳』は初編十卷安永二年の板にしてこれ『水滸傳』醜案の嚆矢なるべし然れども後篇十五卷は稿本ども上梓に至らずして止み、第三編は總目錄のみにして未稿なりと聞けば規模の大なるとは知れたれど完結のものにあらず、殊に古言をもて綴りたるものなれば文學的趣味も京傳の作とは異なるや必せり、又振鷲が『いろは醉語傳』(一冊)は當時相撲取九紋龍が日本橋のほとりにて巾着切を取拉きたる風聞によりて作りし作なれば馬琴の作と同じく中本にして是れ亦同日に論べき書にあらず、されば『水滸傳』の醜案としては京傳が『忠臣水滸傳』普通一般の讀者に讀まるゝ點にても、其の後完結せる點にても、尠くとも當時に冠たり。原來水滸の大作を忠臣藏の世界へ適應せしこと始めより無理なる趣向なれば木に竹をつぐといふ諺のごとくけなきにあらぬと、大跡の思ひ附は頗る面白し。まづ宋の高休を高師直に擬し、名香薫る義貞の兜を地中に埋めて其の靈魂を慰めんとするに當り、鹽谷高貞、高師直司りて穴を掘らしむるに地中に一個の石櫃あり、師直は貪欲の心より中に黄金の埋めあらんなど考へてさぐり見るに、青石の蓋に「遇高而開」の文字あり、高貞の諷むるをも聞かで之れを發掘すれば、何ぞ圖らん石櫃にはあらで方丈深き地坑なり、忽ち百雷の如き音して其うちより一道の白氣天に登り空に散じて四十餘座の妖星を現出す、これを四十七士世に生るべき兆として水滸傳の百八星に擬し其の頭の名に大星とあるさへごちつけ甲斐あると妙なり。さて兜あらためめの場にてかほよ御前を出ださず、鶴岡の

社參に師直がみそめてかほよを挑むは水滸の林冲が妻の件に擬したりと作者自身の序にもあり、この條は『忠臣藏』大序の不自然なる詭書にも優して穩當なる趣向といふべし。寺岡平右衛門の足輕といふことが神行早道の法にかなひて二日半に鎌倉に達すとしたるは落語に似てをかし、天川屋の九紋龍俠客にはつかはし、されど第十回に至りて大星由良が琵琶湖上石山に藝薙へをなして鎌倉に出發する一條は彼の梁山泊に宋高が義を集むる趣意に擬したるものなれど、是等はごちつけ中の苦しき點ならん。要するに全編妙といはんよりは寧ろをかし巧に作られたりといふべし。

此の年又『四季交加』を著しき、此の書は京傳が畫稿に従ひ北尾重政が畫きたる江戸の名所、男女の風俗などに假名がきの詞書を加へたる畫本なりといふ『作者部類』に曰はく、

寛政の初の頃、四季の交加と云種本を著す(半紙本二冊物也)畫は北尾重政也(作者の畫稿にしたがふ)此書は江戸の名所男女の風俗を旨として、是を發するに假名書の文を以てす

されど此の書は纔四五十部賣れしのみにて世に行はれざりきと同書に評あり、但し寛政の初とあるは恐らく間違ならん、其の理由は『戯作者撰集』に「四季交加」二冊あり、寛政十年印行京傳の印ならびに詞書ありと記したるに明なり。

寛政十一年京傳の父傳左衛門病死す、傳左衛門は是迄京傳が家事一切を擔當したれば、こゝに於て京傳はじめて家事を取りき、時に三十九歳なり。かくて親類などよりまば／＼媒介して妻を娶

らしめんとせしかど、京傳は聞かざりけり、蓋し京傳の聞かざるは別に仔細あるにあらず、深きなじみの玉の井あればなり。老母は内々兩人の關係を知れりしかば親戚にはかりて玉の井を受出し京傳が後妻となしぬ、これ寛政十二年二月のとなりと『伊波傳毛之記』に見えたり。同書に此の婦を娶らざる以前の奇話を掲げたり、以て兩人の關係を知るに足る。

此里はるり浮世ぞ思ふも君が待ゆまの内を外なる京傳は玉の井が止宿して家にあるとまれくなるより父も心ないため京傳に意見すれども元より肯すべきにもあらず朋友知己の人々も京傳に用事ありて遠くならば吉原の彌八玉屋に行くこそよけれと迄いひはやしける如斯様を宿し標客の名を得ると雖も自己は彼の京傳流にて儉約を旨とし一晝夜扱代を除く外金分より上を費さず玉の井もまた打つけに明ていはれどわけの有る胸の思は此人を夫と頼まん心故費を吝き衣裳をいとひ手づから草履縫製までにはする心配り娘にはまためづらしき婦人なり然れども京傳がこゝに數年玉の井の爲に消費せし金は六百兩ばかりに及びしなりされど此金は京傳が著作料の外書籍の潤筆或は不時の収入金より仕掛恒産の利益よりは毫も浮投せし事なし京傳は久しき標客の名たる先生なれども其中尤も似けなきは性落して美衣を着ざるは既に述べたれど又髪を結び髻を剃るを好まず浴するとは夏秋の間は一ヶ月に兩三度位冬春に及びては皆無といふも可なりわけ奇談なるは或る日居敷二十日斗に及びし時歸宅せんと玉の井にいふ玉の井みれば亂髪長髯殆ど鬚にかきし唐人の如く顔色黒き事朝日奈島物語にあるくるん坊の如し是日か累日晝夜原風を立廻し籠り居し故さはいへ此儘にて晝日中、など往來の歩行るべきせめて髪を結せ髻をもそりたらんには少しは見よからんさ勤るにいなみて應ぜず、しからば髻結が剃てまいらせむといふに、よしと答ふ尙ほ起ざりければ玉の井手づから髪盥に湯を汲みもてきて臥したる髻耶の髻を剃り又月顔剃るに慈母の愛兒を扱ふが如しやがて剃果しに京傳もやむことを得ず身を起して髪を結せしとぞ

此の玉の井は尙年季一年あまりありけるが、主人彌八も京傳が玉の井に入れ揚げし金の莫大なる

を知るのみならず、玉の井が京傳を慕ふ心の切なるをも酌み、且は京傳は高名なる人にて己れが方に勤めし娼妓が婚姻したりといはんは櫻の面目ともなりぬべしと思ひ、何や彼やにて京傳が求めに應じ、身代金貳拾兩にて京傳が許へ遣すに至りぬ。此の時玉の井は二十四歳、貌容美にして世才も大かたならず、其の名を百合と改めて呼びき、而して其後に京傳はまた遊廓に入らざりしといふ。寛政十三年享和と改元あり、享和は永く續かず、三年にしてまた文化と改元せられき。此間草双紙は年々二三部づゝの著述ありしのみ。享和二年珍しくも五六種の著あり、其中『通氣智之錢光記』『吞込多靈寶縁起』『賢愚淺湯新話』『枯樹花大悲利益』以上四部を春夏秋冬に別かし、四季になぞらへて出版しき、これ合巻のはじめなりといふ。『稗史年表』に曰はく

京傳の作錢光記より大悲利益まで四部を四季に名けて出版す最初に上紙摺三冊合巻にして表紙の上の黄表紙に犬を黒摺にしたりこれ合巻の權輿とも云べき歟此時より外題を横に長き形をす年々同じ

最早此の年間の記すべき事殆ど絶えたり、唯此年間に附記すべき一事は年月は詳ならずされど、松平定信職を去りて閑地に在りしところか、定信或る時『職人盡書詞』といふ古き書卷に擬らへて、新に當世の『職人盡書詞』三卷を作り、繪を鋳形蕙齋(北尾政美)に畫しめ、其詞書を當時の名家三人に書かしめき、即ち此の詞書の上巻は四方赤良、中巻は手柄岡持下巻は山東京傳承りて各々得意の妙文句を附せりといふ。此の時の様子を京傳後に『聞之任』の著者に語りきとて、同書に

又曰(京傳なり)白川侯退後の後吉原深川などの遊所のさまを北尾政美に寫さしめその詞を京傳に命ぜられしは障る事な

くそこゝの事穿ちて得りといへり、この巻物手が友人堀田侯にて拜見せしにいきよくも御出来たりといへり
京傳が詞書したる第三巻は遊里の状況を畫けるものと見ゆ。

以上、京傳が一身上の俗事過半を充たし、記事頗る複雑したれど、彼れが文學的生涯は初期に比すれば寧ろ寂寞の觀あり。案ずるに草双紙の性質寛政三年までは初期の面白き分子失せて讀者を引く力は緩に順智のみ、趣向も一昧に淺薄となりて教訓的となりたり、是れ京傳が一件以來放蕩變じて謹慎の人となりし結果にして、人物の上よりいへば進歩ならめど、戯作者としては寧ろ退歩なり。翻りて他方を見れば馬琴も既に地歩を文壇に占めたり、又寛政六年には式亭三馬、同七年には十返舎一九などいでも、戯文壇漸く賑かならんとせり、されば此の謹慎なる寧ろ臆病なる老将は最早戯墨の戰場を若手の大將に譲らざるを得ず、是れ此の期に於ける京傳が戯作者の地位なり。『作者部類』に曰はく

(前略)是よりして京傳はいたくおそれて(手鏡一件をいふ)五六年の間は草双紙の趣向も勲意を旨とし淺はかなる事を綴りし
は、世の看客はその所以を得しらず、京傳は冊子の趣向場たりけん、近頃の新作はおかしからず云ふもの多かり、云々
こは強ちに酷評といふべからず。『稗史年表』も亦寛政九年の條に

京傳の作今年四部いづれも教訓を專にして戯作の体にあらず是より年々勲意をこころす
とあり。兎に角彼れが作者たる價值衰へたり、再び文壇の覇權を握らんと欲せば更に一機軸を出
ださざるべからず、彼れ果して如何なる機軸をいだししか。

第三章 後期

京傳が後期の生涯は中期に劣らず複雑なり、殊に此の間には京傳と馬琴との交際、及び其の衝突の理由を明すに數言を費さ
ざるを得ず。此の故に本章をば更に二分し、其の一は重に著述の來歴を主とし、其の二は京傳の關係を中心として俗事を專
とすべし。

(一) 著作

京傳が最後の舞臺は讀本なりき。前章にも述べたる如く、京傳が讀本の初筆は『忠臣水滸傳』なれ
ども、彼れは翻案なり、創作にては敵討ものをはじめとするか、即ち『復仇奇談安積沼』(五冊北
尾重政畫)は(今發刊の年號を詳にせざれど)恐らく創作讀本の初筆なるべし。蓋し畫工重政を
して讀本に畫かしめたるは、これより以前には『忠臣水滸傳』一部あるのみにて、文化元年以後の
作には重政が畫けるものなきによりて考ふれば、『忠臣水滸傳』の時代に屬し、寧ろ中期に加ふべ
き作なるべし。思ふに此の書は寛政の末、享和の間の作にして、恐らく文化の作にはあらざるべ
し。『作者部類』は『忠臣水滸傳』の好評を博せし由をいへる次に曰はく

此頃よりして、讀本漸く流行して、遂に甚しくなるまゝに、京傳の稿本を乞ふて板せんと欲する書賣師がらす、是によりて、
又安積沼五巻をつくる(畫は重政)俳優小幡小平治が兎の怪談を旨として作れり、いよく時好になひし、
事數百部に及びしと云ふ昔つるや喜右衛門が板也

文化元年『優曇華物語』(七冊唐畫師喜多村武清畫)を著しき、此の物語の筋は

鍛冶橋内、其の妻小翠といふ夫婦のものあり、兩人とも實直の性質なれば、一人の親まがも盲目の老母に仕へて至りて孝行なり。小翠はもと後妻にて家には先妻が生みし一人の娘ありて、四歳になりぬ、小翠は實の子同様慈み育てけるが、或日大鷲青空より舞ひ下りて小兒を掴み行方しれずなりけり。かくて幾年月を経しが、こゝに又四國に望月兵衛といふ武士あり其の子を同名倭二郎と呼べり、此の若者心はへやましく容貌も亦うるはしく、文武修業の爲に京都へ登りける跡すがら、母見といふ旅の美人に出會ひて互に戀着の情禁する能はずされ相見しのみにて右と左に別れ、其の後はいづくの誰なりしかといふことも知らずうち過ぎける。然るに倭二郎が父母は彼れが不在中には大木郎左衛門といふ悪人の爲に殺されき。語しかばつて彼の母見は、美濃國温美左衛門といふ郷士の養女にして倭二郎と途中にて出會せしはそが上方見物の折なりき。この母見こそ先きに驚にさらはれし鍛冶橋内の女にて、温美左衛門に拾ひ上げられ養女となり成長して母見といへりけり。此の温美左衛門も亦賊の手に横死を遂げしが、これも支海の所業にて、後倭二郎と母見と再會し持合の敵を討ち、先きに別れし橋内夫婦にも出會し、母見と倭二郎とは無論夫婦になりてめでたく肩を結べり。此の作はあまり評判よからざりしにや『作者部類』に「趣向の拙きにあらざれども、さし箇の唐様なるをもて俗客婦幼を樂まするに足らず、此故當時評判不の字なりき」と見えたり、全跡よりいへば母見と倭二郎との境遇同一轍にして遠薄なり、然れども當時の讀者は未だ趣向の功拙を判別する明なければ、唯箇の唐様にて遊きに失したる爲め、喝采を博せざりしならん。

『浮牡丹』（四冊歌川豊廣畫）は、板行の年月を詳にせざれど、按ずるに寛政の末までは京傳が作の挿畫、多く北尾重政筆を執り、文化二年以後の讀本はあはかた歌川豊國の筆なれば豊廣が畫きしは、此の中間四五年なるべし。『作者部類』に曰ふ

文化三年の頃、四ッ谷鹽町なる貸本屋住吉屋政五郎といふ者、曲亭に乞ふて其稿本益石皿山の記（中本）を刊行して、其明年括頭巾縮緬紙表（半紙本）を印行せしに、時好にかなひて二書俱に九百部賣る事を得たり、其折政五郎思ふやう、曲亭の

しの作を印行してすら、利あることかくの如し、今亦山東ぬしに乞ふて、かの人のよみ本を印行するを得ば、市利三倍疑ひなしと、一日山東が許に赴きて來意を告て云々乞しかば、京傳異議なく是を諾して、此稿を起さん云けり、是より後、政五郎は折々京傳が許に赴きて、其稿本を催促し、物を贈る事もしばしば也、さかくする程に、此年は暮て、次の年も稿本未だならず、京傳は素より遅吟遅筆なるに、當時は吉原なる彌八玉屋の藝妓白玉（玉の井のこまならん）がり、ひたと通ふ毎に、逗留せし折なれば、次の年に至りても、政五郎の資を盡くによしなれば、さすがに胸苦しくありけん、趣向は未だ首尾せざれども、先出像より稿本を始めて、一二張づ、政五郎に渡し出像は豊廣に畫せたまへ、此板下の寫本を畫き終る頃には稿本をわたすべしと云、政五郎欣びて、たの如くにしたり、かくて豊廣が畫寫本出來ても、作者の稿本未だならず（中略）月には幾回か京傳が許に赴きて稿本の成をうかひふの外他事もなく、思はず三歳を経て四年といふ春の頃稿本發行することを得たる其書は浮牡丹是なり、本の形なども作者の好みに任せて、半紙本ながら唐本の如く横幅を狭くしたれば、紙に裁落の費多かり、表紙も唐本の帙のこましくしたり、出像も細密なりければ、木鏤を容れたる勢からずなれども此書を印行せば三歳費用を取返さん事易かるべしと思ひしかば、先九百部製本して發兌せしに板元の命縁願隨すべし折にやありけん、例より賈して貸本屋等致て買す、纒五十部ばかり賣て其餘八百五十部は一部も出す成しかば

これが爲め政五郎は遂に分散しき云々。眞偽は例の覺束なけれど玉の井が京傳に嫁せしは寛政十二年にて其の後遊里へ足陷みせざりしこと前に述べたる如くなれば、玉の井が通ひしが爲に著述延引しきとせば、そはいづれ寛政中の上ならざるを得じ、あもふに此の作は『安積沼』の次に著述せしものにて享和中の作ならんか。所詮『安積沼』と此の作とは文化中の作にあらざるべけれど、さばらく讀本のはじめに列記す。

『近世奇跡考』（五卷、隨筆）は文化元年の著なり。但し『作者部類』に

享和年間、近世奇跡考(五卷)印行の頃雅俗俱に賞鑒して、多く賣るべき勢なりしに、英一蝶の土手ぶしなどいふ小歌の事
を載せたるを、英一蝶怒りまがめて、むづかしく云し。京傳驚きて異議もなきよしを、板元大和田安兵衛に告知せて、其
板を撤けり、京傳は寛政の初め、洒落本の管ありしより、なまなく隨筆を旨としたれば、當時冊子の稿本を町年寄へ呈閱し
て、免許を乞ひし折なれば、故ありて奇跡考を板元自ら絶板すといふよしを、大和田安兵衛書林行事と俱に役所へ訴へたり
と云ふ惜むべし

とあるを見れば此の書の世に出でしは尙後年のことなるべし。

此の年草双紙四部の著あり『作者胎内十月圖』『五人切西瓜のたち賣』『江戸砂子娘かたき打』『七
いろ合點まめ』此の頃世上に敵討もの大に流行しければ、京傳も時流につきて敵討の草双紙を作
りしなり。『稗史年表』に曰はく

かたき打の本いよく行はれ京傳馬場此年より始て敵打の作あり今年の新刻かたき打三分の二にして其餘わづかに敵作あり

又『蜘蛛の糸巻』にも

享和のは下ら南仙笑楚滿人云ふ者敵討三組盃云ふ前後六冊物を出版して大に流行し翌年京傳敵討千鳥の玉川前後六冊
大に行はる、是より敵作變下て實録のす物となりぬ。

とあり。但し『稗史年表』によれば楚滿人が『かたき打三組盃』は文化二年の作とありて『敵討
千鳥の玉川』は『三組盃』に倣ひたるかも知るべからざれど、實録の讀本は既に其の以前にあ
りしこと上に述べたるが如し。但し京傳の讀本は敵討にはじまり、而して敵討流行の備を作りし

は楚滿人なること疑ふべからざる事實なり。

『作者胎内十月圖』は作者を産婦にたとへ、敵作を胎兒にたとへ、創作の苦しみを出産の苦みに比
したる、面白し、其の發端に曰ふ

草双紙といふものは子供だましのたはひもなきものなれどもこれにも當り外れありて當れば板元の仕合、はたけば作者はへ
らまのやうに安くされるよにつらひものは草双紙の作者も、今年も亦本やから彼の作を頼まれたる所、彼の眞砂さはいひな
がら年々のことなれば頼向につきはてせん方なきにより

因果地蔵に願をかけ申し子を祈りければ、作者の胎内に敵作の種子を宿し、月重なるに隨ひて敵
作の形次第に備はり、滿十月にして漸く産み落せば即ち草双紙上中下の三人兄弟なり。之を全篇
の大意とす。文化二年には『櫻姫全傳曙草紙』(五冊、一陽齋豊國畫)の著あり。其の梗概は

丹波國桑田部に由緒ある武士あり、名を鷲尾十郎左衛門義治といふ義治妻野分の方に子なきを憂ひ、京都より玉琴といふ美
婦を呼びて妾となし、家來某の宅に養はしめ寵愛大方ならず。既にして妾玉琴、義治が種を宿せり。野分の方に附従ふ侍女
等此の由を聞きて快がらず思ひ、野分の方に告げて暗に玉琴を除かしめんと煽動す、野分の方表に妾女を粧ひ侍女等が心得
違ひを戒めける。されど内心には嫉妬の念燃るが如く、竊に之れを亡きものにせん案下ける家中に篠村兵衛太といふ無賴
の士あり、野分の方兵衛太を竊に招き術はすに利をもつてし、妾玉琴を某が宅より奪ひ來たらしめ、おのが面前にて兵衛太
に命下てなぶり殺にす。さて兵衛太は玉琴が死骸がある谷川に沈めしが、此の死體より男子分婉して通行の修行者に拾はれ
き。野分の方は其の後問もなく粧身して女子一人を奪ぐこれ櫻姫なり。櫻姫二八さもありし頃は容顏うるはしきのみならず、
氣質も母親には似ず、心ばへ優にして管絃和歌の道にも長下たる絶世の美人なりければ、同國の住人信田平太夫勝岡之を見
て心ななやましいかにもして我が手に入れんと謀介を以て婚姻を申入るれど、平太夫はまた醜男なるが上に心も奸曲の徒な

れば櫻姫はいふも更なり義治も承継すべき要なし。勝岡は深く鷲尾一家を怨み機会もあらば仇を報せんぞ待ちける、さるほどに櫻姫は性來櫻を愛しけるにより、父母の許を受け耶等侍女等にかしつゝ、都の花見に旅立ち、ある日清水に詣でけるが其頃當山に住する年若き僧に清玄といふ者あり。聰明にして學に志厚くいと殊勝に行ひますし、不圖此の日櫻姫を見て戀々の情に堪へず。こゝに又同く花見のうちに狼藉者ありて櫻姫を奪ひ逃げ去らんぞす、耶等某の働きによりて漸く姫を取りかへしたれども、追ひくる大勢の敵を防ぎつゝ、姫をば山吹といふ侍女に托しておさしやりぬ、櫻姫遊るゝと數町に迷ひて路を失し、宇治の川邊にいでしが櫻姫はおもひけなき今日の危難にいたくおどろき病を發し、こゝに至りて一歩も進むこと能はず、山吹はいかにせん途方にくれたる折しも、一艘の小船を漕ぎて其處を通りかゝれる風流男あり、其の名を三水之助伴宗雄とぞ呼びける。宗雄は姫が急病の様子を見て早速船を岸に近づけ、船に移し印籠の藥など姫にのませて介抱しければやがて病氣も治りけるが、こゝに櫻姫と宗雄と赤繩はまつはりは下めき。さて清玄は櫻姫を一眼見てより恍惚として魂天外に飛び、又昔日の道心あらす、いくたびか懺悔して正覺に歸らんことを祈るさいへども護摩壇上の不動明王姫のうつくしき姿に變つて、煩惱は夏の蠅の如く逐へども去らず。櫻姫はまた伴宗雄に別れてより只管に其の備をしたひ、遂に病の床に臥しければ父母の驚き大方ならず、醫藥卜筮手を盡すさいへども更に効驗なし、されども姫の病少しく愈りければ又親喜びて宮脇村の下館へ保養に遣はしけるが、こゝに又伴宗雄は悪妾の謀害によりて父の家を逐はれ當國にさすらひ四五日前より此の下館の近隣に寓居し、はからずも再び姫を見て二人の喜び暫へんにもなし。姫は忽ち病氣全快し、二人のな事を起りけれ。そはかかれて鷲尾家に怨を抱けるものあり、先きに櫻姫を得んとして望を遂げざりし信田平太夫と謀合せて、義治一家を攻め滅しければ、姫は虎口を逃れて一先づ片田舎に落ちのび、こゝ方ゆく末を案すこゝして淨世の果敢なきをいこち再び病に臥して、遂にこゝへらぬ人の數に入り鳥部野の茶屋所におくられけるが清玄はその後清水を去りて此處の御坊に墮落し今姫の死體を見て且つ驚き且つ喜び介抱に手を盡くし、に姫は不思議にも蘇生して清玄が妾執に苦しめられ既に

かうよき見えしころに先きの修験者、通りかゝりて姫の危難を救ひ其の場を清玄を殺す。此の修験者ほもと鷲尾家の臣なりしが故ありて佛門に入り諸國を遍歴するうち曾て玉琴が胎兒を拾ひしものなり。然るに清玄は此の修験者に救はれたる玉琴が子にして櫻姫とは異母兄弟たること後に知られたり。これより忠義の武士と伴宗雄と力を協せ義治の敵を討ち亡ぼし伴宗雄を櫻姫に配して鷲尾家再び興りければ玉琴が怨靈櫻姫に執着して三たび病に臥し離魂病とて一身にして兩眸を現する奇病に罹はれて遂に十八歳を一期として得脱成佛し、宗雄も亦發心して姫が菩提を弔ひ正妻野分の方は行惡かきなり遂に雷死して因果應報の理こゝに明なり

是れまでの作にも勸懲の意を寫し、佛教的因果を示さるにあらねど『優曇華物語』の如きは、専ら復讐を主としたれば其の筋隨つて單純なり。然るに此の編は野分の方が嫉妬深きより玉琴を殺し、さて玉琴の怨魂が鷲尾家にとるといふ纏綿たる因果の理を骨子として雑多の事件を結びつけたれば、全局自ら複雑にして首尾貫徹の趣致あり。もとより人物の性格は例の漢としたる者なり、櫻姫は主人公なれど著者が漠然たる理想的美人の化現たるに過ぎず、而してそが正反對なる野分の方は殘忍酷薄の化物に似たり、されど人物としての貫目は重く、寧ろ主人公は野分の方かと思はるゝ位なり。案するに『櫻姫全傳』は京傳が讀本の才能を代表せりともいふべく、筋のよく通りたる點よりいへば、前に相匹すべき作なく、後にも(精巧熟練は或は勝りたるものあらん、然れども)人物、脚色、主義、事件等の組織配合宜しきを得たる點よりいへば此の編の如きは稀なり。兎に角に此時はじめて彼れが讀本は其の成熟に達したりといふを得べし。

此の書は讀みて面白きのみか、はじめて出像を豊國に畫かせたれば、豊國の妙筆京傳が意匠と相

照して一層の光彩を添へしかば世評頗る高く前年の『優曇華物語』の失敗を回復して餘ありき。
 『作者部類』に『櫻煙全傳（五卷）』を綴るに及びて、出像を歌川豊國に畫かしむ、此書いたく時好に稱ひて雅俗ともに妙とせり」とある、證とすべし。此大當り一ツは豊國の畫に於てしかば爾來讀本は豊國にのみ畫かせきとぞ。同年草双紙の作四部あれども特に記すべきほどの價はなし。文化三年には『梅花氷裂』（三冊豊國畫）ありき。

此の書は唐守油右衛門といふ武士、妻、棧との間に子なりしは、夫婦相談にて蕪の花さいふ妾を入れしに、始めの程は中隠まりしが、夫の旅行中妻の棧、ある浪人を密通して、妾蕪の花を殺し手に手をまきりて出奔す、これ話の發端なり。扱又油右衛門は其の浪人の爲に討果され、いろ／＼の困難ありて梅の與四兵衛其の妻小梅との話に移り、こゝに一場の懸念あり。結局悪人亡び、善人榮ゆといふ筋にて『櫻煙全傳』と大同小異なれば尋しぬ。此の作は別に續編四冊あり都合七冊、増加の四冊は南仙笑遊滿人（爲永春水のこまなり）の作文政九年の板なり。

此の作評判よからざりき。『作者部類』に「此書又評判妙ならず、思ふに冊子に載する所の小断長言は幸也、さるにより井を汲て七十金を得たりしは天感の致す所成べし、然るに、長言は其金故に由兵衛の害に遭て、命を殞すに至るが如き、勤懇正しからずといふべし」と不評の理由を専ら例の主義にこちつけたるもをかし。

同年『昔語稻妻表紙』（五冊豊國畫）の著あり。此の書は前二作とは聊か趣を異にせり。即ち不破、名古屋を善悪主人としたる舊めかしき芝居仕立の趣向なり。されど時好に叶ひきとほぼしく『戯作者小傳』に

文化三丙寅年發行せし讀本『昔語稻妻表紙』（五冊）は香賈文藝堂伊賀屋が藏板なり又同年印行の『善知鳥安方忠義傳』（六冊）は香林仙鶴堂隠居が藏板にして二書とも世に行はれたる事其頃知らざるものなれ然るにその翌年文化五戊辰の春浪花の芝居兩座において『稻妻表紙』の旨趣を狂言に仕組ませしが大に流行たるよし也（下略）

といへり。後年馬琴等の小説もまた間々演劇とせられしが其の嚆矢は『稻妻表紙』なりといへり。爰に一奇話あり、『作者部類』に「

『不破名隠屋稻妻表紙』を著はす、其冊子佳ならず、板元伊賀屋勘右衛門は前の勘右衛門が養嗣也、當年父子不熱の口舌あり、とくする程に、彼の勘右衛門が妻身故りぬ、京傳藏におもへらく、稻妻表紙の書名は、昔蔵市川才牛が初て不破伴左衛門に打合せし折、雲に稻妻の縁落したる、外蓋を被たりければ、今に至りて伴左衛門に扮する俳優は、必さる外蓋を被ぬる事世の人の知る所なるに、百年ばかり已前の物の本に、稻妻の形ある標紙多ければ、これづれをとりいで、云々を命ぜし、今さら思へば不祥に似たり、そをいかにぞさならば、不破名隠屋は不和な子やにかよひ、稻妻表紙は否妻病死に、つゝへり、物の不都合にて思ひかけぬ事な、世俗いな事といへば、否妻病死に至るまで、悉皆板元の上に當れり、心づきな事悔しきこと、この頃所親にさしやきけり

と。『作者部類』往々京傳が作に難をつける僻あれど、ことを事實とせば、作者の神経質もまた甚しとらざるべし。

此の年は讀本二部、外に草双紙三部の著述あり、草双紙は即ち『敵討兩輪車』『敵討と大河原』『敵討孫太郎蟲』等なり、爰に注目すべきは三部とも敵討ものなる事なり、蓋しこは作者京傳が著書の変化にはあらずして時の好尚の然らしむる所なり。『稗史年表』當年の條に曰ふ

今年の開版する所すべて敵打となりたり、作者の名を記すに戯作の戯の字を省きて只作とのみ番す抑も此戯作の戯の字は實
曆の丈阿に始り安永の春町喜三二に傳はり四十年用ひ來りし戯の字此時に至りて絶えたり是も時運といふべき歟
と、滑稽洒落を生命とせし赤本の系統は全く此の時に及びて亡びきといふも不可なし。

文化四年には『善知鳥安方忠義傳』(六冊豊國齋)いでき。

此の書は平親王將門が後日譚にして其の子良門、瀧夜又姫の兩人、父將門が滅亡せしを遺憾におもひ遂に兵を擧げて父が遺
志をつぎ再び相馬の内裏を回復せんとするにあり。編中の主なる人物善知鳥安方は善良なる士なれば兄弟の讒謀を諫めて良
門の手に命を殞す、然れども彼れが忠義の魂は深くて去らず、其の後も良門を諫むるとまばく良門怒りて刀を抜いて之れ
を斬れば怒り化して鳥となり空中に飛び去るなると結局せり。

此の書は荒唐無稽のものがたりにして全編悉く妖怪談なり、されど奇を好む時尙には叶ひて流行
しきとぞ。

又うき安方忠義傳をつりて、印行せしに、いよく其新奇に愛て是を看るものは只三都會のみならず田舎も亦此佳作
あることを知れり、京傳が作のよみ本、多かる中に、此二種(櫻姫全傳)と云ふ尤きなりと云々(作者部類)

後天保年間市村座にて此の書を劇に演ぜし由。『戯作者撰集』に曰はく

近年江戸堺町中村座にても右稻妻表紙の趣を狂言に仕組たり、又善知鳥安方忠義傳は近年天保七丙申年又狂言に市村座にて
せり名題は『世に善知鳥相馬義殿』といへり二番目は世話狂言にてお房五郎等を入れ六月七月初日にて興行す作者は中村
重助賣田壽助三升四郎等なり此狂言見ざらんは残念とて七月廿九日見物するに役割の瀧夜又姫後如月尼二役善知鳥安方三や
く十太丸四やく藤浪五やく九郎兵衛六やく藤内七やく福兵衛八やく純友(右市川九藏)も良門二役賴信三役二の瀧源吾四役
綱五郎五やく大宅太郎右市村羽左衛門動む越六郎二役かげら三役佐五郎右市川三郎動む小蝶の前二やく錦水三やくお

房四やく小原右坂東玉三郎なり荒猪丸二役老熊三やく佐七右大谷藤右衛門也大當りにはあられども此狂言評判有しなり斯の
如く彼物語の趣向を今に至るまで狂言に仕組む者の目を悦ばする事案が繁れといふべし
げに京傳が死後の名譽なるべし。されば其の後編を増作するものありて十八冊の大部となれり、
今増作者の名を忘れたり、南仙笑の春水にや松亭金水にやありけん。

文化五年『本朝醉菩提』前後十冊豊國齋)を著す、此の書は『稻妻表紙』の後編なり。一休の事
を中心として其が俗傳の逸事を綴合せるものなり。そもく一休の俗傳は支那小説の『醉菩提』
を翻譯したるものなれば、作者はそをほのめかしたるものにして、鈴木正三が『二人比丘尼』の
大意を取りたるものなれば、首尾貫徹せずして寄木細工の如し。されど流石に老練の筆の跡賞
すべき節無きにもあらざり。

此の書につきて京傳と豊國との間に、『作者部類』に面白き一話あり、京傳の爲人を知る足にもな
るべければ左に掲げん。

本朝醉菩提六卷、後篇四卷、共に十卷、亦是伊賀屋板にて、出筆は豊國齋きたり、當時是等の畫工、例として未だ齋ざる已
前に、其酒筆を受ながら、技に誇りて齋くに通り、醉菩提を板するに及て、伊賀助しばくをへども、豊國事に托して敢
て齋がす板元に祝願めて、羽二重の給半折二領を製らしめ、これを作者と畫工に贈らしむ(其折に京傳と豊國の花紙を付た
りける事は、歌舞妓の當場作者に、此例あればいへり、只此事のみならず、或は酒肉珍菓を贈り、京傳と豊國を伴ひ
て、雜劇を觀せ、或は酒樓に登りしげなりき、かくても豊國はなほ多く齋がす、齋は頼りなるに及びて、又板元にいふ
やう、曰く家に在ては、雜客もたえず、且齋の板元に賣られて、よみ本のさし齋は筆を把(把の下脱文あるべし)送

屋二軒を借りて、此處に豊國を請待し、日毎に酒飯を饒りて置くに折から三月の頃なりければ、豊國が又いふやう、時に今咲く花の三月なるに、折垂籠てのみ有りては、氣鬱して病ひを生せんぞ、いかに豊田川邊に徜徉して、保養せまきていふ様、花を見まく欲したまは、遠く豊田川に赴くに及ばず、吾取よせて参らせんぞとて、大なる枝に花みちたる欄干許多買りて、そな花瓶にも樽などへも活けて、豊國の几邊に置ならべ、其活花甚ふれば、取替へ見せしかば、豊國宛にせん方無くて、日毎に、件の出像を置くほごに、伊賀屋はさら也、京傳折々此假宅に來訪して、うちうたらひつゝ慰めけり、此等の事は京傳の本意にあらざれど、さきに優曇華物語の出像を、唐畫師に眺へて後悔せしに、櫻姫全傳の作よりして豊國に畫かして、特に時好にかなひしかば、是より豊國を親しく交りて、功を願ふと大かたならず、夫に今淨瑠璃をもて譽ふるに、畫工は大夫の如く作者は三味線ひきに似たり、合巻の奥双紙はさら也、讀本と云ふも畫工の筆精妙ならざれば賣がたしといふにより、豊國も亦自ら許して其功我に在りとおもひしかば、是より合巻の奥中張に畫工の名を上にして、豊國畫京傳作を置したり既にかくの如く、畫工に權をつけしかば、豊國の恣なるをにくしく思ひながら竟に諫むる事あたはず、其好に従ひつゝ、二とせばかり稍印行することを得たれども、思ふにも似ず冊子は世評、妙ならず、損するほごにあられども初に畫工作者をもてなしたる諸難我のいさ多かりければ、竟に板元の算帳あはず、加藤此板元に不知意さへ打撃さしければ、活樂既におさるへて他町へ轉居したりけり云々

思ふにこの話は文化五年以前のことか、然るに同七年出版の式亭三馬が『阿古義物語』の挿畫のことにつき、三馬と豊國との間にも一條の問着ありき、『戯作者撰集』に曰ふ。

大人(三馬を指す)が罷たる阿古義物語といへる五巻あり編成て(文化六年頃と知るべし)故一陽齋豊國が許に稿本を渡せしころ一陽齋いかなる故ありて、細給中にして夏後を經るに畫れずややく閑滞に及しかば(其故が半より未圖員が筆な

り)式存憤を發しひころ顔頭の交けり厚きをかく迄に已を蔑如にするその心根こそ惡けれとて自ら一陽齋にいたりまのあたりにこのことをなして罵りその忿慢を責しかば、豊國の口を盡して語たれども、式亭が怒解けずこれより何きなくなつたがひに兩心いできて此方にては吾作意する冊子には向後彼をして畫しめつまいへば彼方にては彼が作たる冊子には吾ふつに畫くまとなし罵りあひしが

後には和解するものありて、又舊の如く畫くこととなりき云々。蓋し三馬は比較的に我の強き男なれども、京傳は弱き人なり、一は己れを立てんとするが故に他人の我儘を許さず、一は強ひて自己を立てん意なし、否、意なきにあらざるも立通す勇氣なし、とはいへ堪忍強きは京傳の美德なり、殊に晩年には他人と争はず、成るべく堪忍して一生を送らんとせりき、そは英一蝶が故障によりて『奇跡考』の板木を毀ちしにも明なり。

此の年草双紙『万福長者榮花譚』『紋染五郎剛勢談』等の著あり。『紋染五郎剛勢談』に就ては珍談あり。そは此の作に辻君の姿を種々をかしく畫きたるを彼等誹譏せられたりと怒り、作者京傳を路に擁して苦しみきといふ一話なり。此の事件より京傳が名更に高くなれりといへどいかにや。此の事を記せる『戯作者撰集』の著者自らも眞偽を疑ひて曰はく

又一説にこの辻君を多く畫きたる冊子は寛政の初年の著述なりといふ然れ共予は其頃の冊子に辻君を多く畫きたるものを見ず後の既に從ふときは(文化五年の作とするときは)草紙の裏題あきらかならず寛政の初といへば強勢談より迄に前の事にして年に甚難かり何れを何れと定がたく又話の虛實をも辨へがたし

と。案ずると同著者は京傳と時を同じくえたれば、昔は知らざるも文化の頃は知己の間柄なり、若

しかる事件ありきとすれば、目前其を聞かざる譯なきに、かく唯漠然と風聞のみを記したるをみれば、此の事恐らく虚談ならん歟。寛政十年『雙蝶記』(六冊豊國書)の著あり、是れ京傳が讀本の絶筆なりといふ、

腹稿大抵なるに及で、馬喰町なる書買四村屋興八報るに其腹稿を詰すこと首尾極めて精細也、京傳は能辯には非ざれども、其腹稿を人に脱示すに、其趣を盡せしむば、俗子は其稿本を讀せて聞よりすちよくわづるまで感賞せざるはなし(京傳嘗て云様、其讀本の腹稿なる時は、先づ妻に脱示すなり、しむせれば、吾忘れたる折、是を求る所なし、近頃は記聞うすくなりて、折々忘るゝ事多かり、其折妻に問へば預け置たる物を出すが如く、勞せずして便りいよよしといへり、されば腹稿成毎にその印行せん云書買に、其趣向は云々を精細に記し示せしむば、板元早く欣び受てたのもしく思はざるはなかりき)其折、京傳亦言やう近頃曲亭などの讀本、雅俗を混交しゆるを以て林蔵なき者也、己れ此度の雙蝶記は香葉興五郎の事を旨としたる世界にて、世話狂言と云者に似たれば、おさく、劇の趣きに倣ふて、詞は今の俚語をもてすべし、しむ綴る時は、婦女の俗耳に入らざる事なし、其樂一しほに倍すべし、此書一度世に行はれば後の讀本の面目を改むべけれと云、やき示したりければ四村屋興八感佩して、いよく頼母しく思ひしむば、雙蝶記を彫刻しむ云々

かゝる考ありて此の書を著し、や否は知るべからざるも、二つ蝶々といふ傀儡の戯曲にもどつきてつくればなり」と自らもいへれば、これはた芝居仕立の趣向なり、次にもいふべけれど此の頃は京傳馬琴不和の後なれば京傳も多少馬琴の學者風を嫌ひて向ふを張る量見なかりきともいふべからず、そは此の序を通俗文脈にもして殊更に漢文を用ひざるを斷り、又「素より童をなぐさむのみなれば、俗耳にとほき雅言を好まず、無下にいやしき言をもてあるしつ」などいへる、意

味ありげに聞こゆればなり。あまりにくたくしければ梗概は擧げざれど、此の書は彼れが最も丹精を凝らしたる緻密の作なり。

文化五年に『醉菩提』の著ありしより五年目に唯此の一著のみなるはいと少きに似たれど、尙別に草双紙の作はあまたあり。例へば讀本の小なるもの、及び従前の頓智脈を受けたる作等これなり。而して最も多く歲月を要したるならんと思はるゝは『骨董集』の著なり、京傳は晩年戯作の世に益する少なきを悔いて、文化のはじめ『奇跡考』を著し、今また此の著ありきといふ。太田南畝撰、京傳が文机の碑の背面に刻せる銘に「京傳者晚悔少作無益於世改勵刻苦搜奇秘著近世奇考及骨董集二百年來奇談逸事考據精確可以補小史矣」とあるを合せ見るべし。但し「悔少作無益於世」とあるはいかにぞや、こは恐らく口實に過ぎざるべし、寧ろ當時の戯作者の學者と比肩する能はざる地位にあるを慨して學者の看板ともいふべき隨筆を著し、名を後に傳へんとしたるにはあらざるか。作者『胎内十月圖』にある序文にも聊か其の述懐とあもはるゝ節あり、

戯作者はかり羨しからぬものはあらざり、人には絲瓜の皮のやうに思はるゝよ、詩歌連併、古事來歴何でもよりミリ十九文と、ならべたてて一は見すべし、つひあやまりてはり弱く、實學者に出あひては一言も、流しにいづるゝ風のごとく、尻尾をまいて逃つべし、予此稿を悟らざるにはあらざり、越國屋の番頭范兵衛が、あそなを甚ひ、編綴羽織で身退き、上田統の四節をまなひ、油壺に棹さして齊陶の出店に隠居せんを欲すれども、板元の越王あつてゆるさざれば、誠なく作者の腹のくらやみの耻をあらるゝみへ出して、此草帯を作る、かくては遂に絲瓜の皮となりて、生涯人の眼をあらふべし、嗚呼是非もなき哉

これ素より一編の戯文に過ぎざれど、一口に戯作者と呼ばれて朽果てんこと何ぼう口惜くもひしならん。彼れちのが像に賛して「櫻木にのぼるすがたは山王の猿に三本たらぬ戯作者」と謙遜せしなど、いづれか其の述懐の言ならざる。されば京傳が是等の著述ある所以は戯作の世に益なきを悔いてといはんよりは寧ろ戯作者の地位以上に名をなさんとせしなりといふべし。吾人は此の事に就ては南畝よりも『作者部類』に従はざるを得ず。同書に曰ふ

文化の年に至りて、又骨董集の著述あり、嘗て云、吾は素より経書史傳を讀ざりければ、儒になるべくもあらず、亦國學なもて更に名を成さんと思へども、國學にも名哲前輩多ければ、企及ぶべからず、只二百年前後、民間の風俗、古蹟の事などよく考察してざる吾を後世に貽さば、戯作の足を洗ふに足らんきて、其考察に苦心する事、一朝の技ならざりき

京傳にして真に戯作の世に益なきことを覺らば、當時既に財産あれば、断然と戯墨を放擲せざるべからざるに、其事なくして言行の一致せざるは其意なかりし證據なり。ともあれ『奇跡考』及び『骨董集』は隨筆めけども、彼のいかなることと録しおくといふ覺帳的隨筆の類にはあらず、整頓せざる風俗史のたぐひなり。此の著いで、弟京山が『歴世女粧考』柳亭種彦が『用捨箱』『還魂紙料』等いで風俗史の素材ますく豊富なるに至りぬ。『骨董集』のちほむれがきに曰ふ

およそ正史實錄のふみは、おほやけこまをぬれきて、わたくしさまのいさげきこまには、おほむものなれば、ふるき代のための手ぶりのうがへんたよりなるべきはすくなく、ものたりさうしたぐひは、それこそつくりでたるものからにふれしありさまいへるは、まのあたりそのころのこまごもうちみるはかりにあつたすべきが、おほし、またいそぎの世のこまごにいたりては、舞踏のこまごは、連歌俳諧のふみはさらなりむげにはひなきたはぶれがきたるさうし

へつうがのたよりになふべきをばひきこつ

と、蓋し著者の本意は風俗の變遷を調べ正史を補はんとするに在りき。『骨董集』前帙(二冊)文化十年、後帙(二冊)は同十二年に出板せられき。これ京傳が名残の著なり。之れを要するに京傳が後期の主なる著述は讀本にして、風俗史的隨筆之れにつき、草艸紙に至りては微々たり。若し夫れ中期の教訓主義は明に勸善懲惡の主義となりて此の期には最早猥雜の分子を止めず、然れども荒唐無稽、殘忍酷薄の事柄を寫して専ら俗客の注意を引きしは、前期の殆ど無意にして猥褻に陥りたるよりも、有意識だけに罪重しといふべきか。總じて此の期の作は、隨筆は勿論、小説といへども、一々出所を明にして事實正確、用意周到、文章平易、而も卑俗ならず、又重に悲哀の筋を主としたり。されは是等は必竟老熟の結果にして彼れが詩才は後期に至りて發達しきとも見え、縦令京傳の文名は晩年の讀本に至りますく揚がりしにもせよ、眞の名譽は寛政三年以後にあらで、寧ろ其の前の草艸紙、洒落本の上にありしに似たり。

(二) 京傳と馬琴との關係——馬琴との絶交——京傳の末期

前章に述べたる如く、京、馬二家がはじめて會合せしは、寛政二年の秋なり、是れより十有餘年間彼等の交際は依然として親密なりしが如し。然るに何時のことか、又如何なる理由ありてか、さしも久しき水魚の交りも、一朝にして破壊せらるゝに至りき。二家絶交の事に關しては予は未だ眞因を發見せず、只曲亭が手に成れる『伊波傳毛之記』によりて、其の大概を知るに過ぎず。

そも「伊波傳毛之記」は何の爲に著はされたる傳記なる歟、先聲とも稱すべき京傳が徳を頌せん爲か否、「伊波傳毛之記」の卷首にいはく

香友なる京師の某生は盤瀬京傳は文の交り篤かりき故に京傳の物故を聞て哀悼尤も深し曰く孤獨是より絶て竟として其面を見ざりしを遺憾とす因て余に就て其人となりを詳に知らむと欲す余其交遊の情誼を感して書集めて遺れり然れども其家に於ては必ず秘するにあり密するにあらんを一覽の後は焚火に附せよ明りに毀弄することあらば、余が筆はた大ならん穴賢

なき人のむかし思へばいざるひの

いは傳もの言いふぞわひしき

是編己卯冬十二月十二日起草至十五日今夜三更卒業卒之間聊又加校正焉此其稿本也唯以筆事矣故曲筆飾文也自趙氏之賢蓋狐不能免矣宣秘藏者

即ち「伊波傳毛之記」は京師の某の爲に京傳が爲人を録したるに外ならず、然れどもつくづく其の詞を翫味すれば疑ふべき點多し、蓋し「書集めて遺れり」といひ、「此其稿本也」といふからには、此の稿は京師の某生へ贈りし別本なること疑なし、又「一覽の後は速に焚火に附せよ」といへるを見れば、其の後或人に見せたる趣あり。既に京師へ一本を贈りながら、なほ家に秘したる其の稿をば他人に見するに當たり、之れを火にせよと命ずともいかで此の稿の世に傳はらざるなきを保せんや、文意の曖昧にして實を欠くこと斯のごとし。思ふに記者のいふところは口實たるに過ぎざるべし、此の著の眞の目的は別にあらん。予は以爲らくは京傳と馬琴と絶交せし件に

就きての説明書なりと、即ち「伊波傳毛之記」は京、馬二家絶交の是非を公衆に訴へたる告訴状なり、而して著者は曲亭の辯護士たること勿論なり、其の要旨を摘すれば

- 一 京傳は香齋なり、否、少くも彼れは俗物なり
- 二 京傳は放蕩遊逸なり、前後二人まで姐妓を身受して妻したり
- 三 京傳は理に暗く情に濁る
- 四 以上の理由により京傳の人物を評すれば君子人にあらず、故に馬琴既に孔孟の道を以てすれば彼れ頑冥にして悟らず、却りて馬琴を驕慢さなし己れを輕蔑せりと思ひ疑ふべし
- 五 京傳と馬琴とは意見斯の如く相合はずして遂に絶交す、而も其の罪孰れにあるか、請ふ世間有識の入理非の辨するを、ろを明断せよ

此五條の外に出でじ。而して何故にかゝる告訴状を呈出すべき必要ありしか。蓋し當時京、馬二家絶交のことは文人社會の一問題たりしこと論を俟たず、而して京傳が弟京山と馬琴との不和は多少の流言を此の件に關して醸出せしなるべし。それやこれやにて剛愎なる曲亭は黙して止む能はざりしならん。此に於てや京傳が死後三年、即ち文政二己卯の年、此の匿名の回護的傳記竟に世に出でき。本意已に曲亭を回護するにあり、悉く信憑すべからざる勿論也。

案ずるに文化元年京傳が母大森氏没し、同三年丙寅府下に大火ありき、此の際京傳が銀坐の家も類焼の不幸を蒙りしが

幸にして土蔵は火中に存して恙なきにより是を元としてさし掛の假普請をなし少し計の造作をなして其當分の住居さはなし

の門は板扉を廻らし屋上には輦壳を敷置す因てまづ普請は出来なれり京傳心計に新宅開の祝をなし所親を寄て飲む、時に話ていふ吾に子なく且つ妻は若し加之近日の出世少にあらず然るに商賈不如意にして今回の災運實に迷惑なりし、然れども不幸中の幸讀本は流行して注文も絶されば作料は初に倍したり、又書櫃には已れ至て拙けれども人好んで之れを求むる故に其求むるに應ずれば潤筆を贈らる是らの金額を以て家を遣らば又相應に其美を盡すを得べしと雖もしかば財を失ふに急にして利を得るに緩し因て以て今假の屋宅を遣り竣功に至るを以て君たちを招き一杯を喫して此事ないふ響る此家を足れりとし暫くかくてあらんとすといへり意志遠財に汲々たるを見るにたれり、此頃より自置費の扇又短冊管俣を定めて是を賣る遠近買求るもの多し薬も讀香丸はよく賣れゆけども烟香烟包は初如く販賣なし因て京傳を人呼て富さいひ又射利家といへり(『伊波傳毛之記』)

是れ曲亭が彼れを吝なりとする第一理由なり。げにや『戯作者撰集』にも「舖上にて自置費の扇短冊など鬻きねれば自詠の發句のたぐひは多く世の至るところ」云々といへり、此のことは實なるべし、『伊波傳毛之記』は又曰はく

京傳は文墨を採て讀奇才あつて世俗を籠絡するに決して人の及ばぬ所之にそゆるに天稟の愛敬他人を制服する事も又天資さいはん(中略)此人の缺たる所は算術には疎にして九々よせ算だに知らず然れども心算の敏利なるに於ては商賈練練の人さいへども及ぶものなし射利の才あます所なし又儉約を旨として衣裳なんどは縮紳家より賜はり物或は有福なる町家用途并より惠まれし物の外に自己の金錢を費して買求むる稀なりまして家にある日の不斷者には吉原妓樓或は引手茶屋娼妓又は俳優などより贈り来る仕合せせし唱る木綿反物を服せし一ツ着物を丁零に二三年は必ず着用することす著作に引用の書籍は藏書家より借覽し文房具は好まず唯此中に古書畫に至て愛敬せり對等の人と交際するにも或は散步して神社佛閣に詣る日も費用は幾て多少なき割出し我に損なく渠に又損なきやうにして貸さず借りず自任して京傳流さいふ、たま〜馬學、眞

類、對山など京傳と俱に近在に遊歩せし時喫飯すれば其厨にて割出し茶屋に休みては茶代を銘々に經入文づゝ出させて此處を去る實に一癖とすべし然れども薬も食る意なし淡白にして洒落なり新くの如き舉動あるかと思見れば又知己朋友の窮々するも致て救助するの念なし然らば吝なるかと思へば鄙吝さいふにあらず之を要するに天資貨殖の人さいはむも過當にはあらざり、いひまはし婉曲なれど、こも又京傳が特質の俗情にあるを暗刺せるにやあらん。さばれ「商人七分文人三分」(『枯樹花大悲利生』)と自白せる京傳にとりては、錢儲に着目せしことも、到來物の反物にて夏冬の衣類を埒明けしことも、更に彼れを賤するに足らざるべし、否、ひとり京傳に限らぬ當代の戯作者風必しも各むるに足らざらんか。京傳が志の遺財にありしは或は然らん、然れども射利といひ吝者といふは酷に過ぎたり、これ曲亭を回護せんとてのいひ過ぎなるべし。同じ記者も虚平なる際には左の如くいへり

京傳の實は前にも述る如く無益を省く風尤も嚴格なりし其の一二事を例せば或時百合夫に向ひ帯一筋を求めたしといへば京傳直ちに金三分を與へ然していひけらく今其許が求むる帯此金だにあらば即時に調へらる、也今其許帯なきに非ず有て猶望むは奢を好むなり然れども求むるを與へざる時は我も亦吝なるをまねがれず因て其の價を取らず今用る所の帯きたらん時買ふべしそれまでは金にて貯へ置べしと説諭す其後又百合瑠璃の櫛一枚欲しく買給はれさいふ此時も又價即座に還し既得前日の如し百合又其理に伏し欲望を制節するに至りし故に家に器の餘有なく服は寒暑を凌ぐに足る淡白洒落の境なりしこゝらが公平の評に近かるべし。彼れもと通人、吝儉の差を辨せざるものならんや。『夜半の茶漬』かけ合の序にいはく

金をいかにしてつづふといへば儉約する事のみ心得たるもあれど、此處に入つて儉約といふことなし、吾輩の人は必ず此里

要するに『伊波傳毛之記』は京傳が俗臭あるを笑へども、善後の計畫をなすまで妻子を路頭に迷はせ耻を子孫に残すは憂むべき文人にあらず、京傳が遺財に汲々たりきとて咎むるは偏頗なりといふべし。

さて京傳が放蕩は辯護するの要もなきことなれど、これとても彼れが壯時の過失なり、一生の環失とするは酷なるべし。

案るに京馬疎遠になりそめしは文化六年と云はし。『伊波傳毛之記』によれば京傳が生涯に一度商賣にて損したりといふ彼の長野善光寺の出開帳の時、京傳が全所並木町へ糕店を開業なしは、享和三年にして京傳の母が身まかりしは翌文化元年のことなり。此の間の記事中に左の一節あり。

百合子なし京傳は我弟京山の兒を養子せんが又百合が弟を養はんが考慮躊躇する中百合が弟は病にかかりて早逝せしかば追て京山の次男を養子するに決意し百合にも此事を相談したり百合も其願なるを答へ肯て後いうやう妾の妹今九歳なり知らるゝ如く最も極貧の者に養はる是を取戻し給らんや京傳聞てそはよき考也(中略)養女として鶴と名づけ三絃書讀活花なんぞ稽古させ夫婦共愛み育てけり

右は京傳が玉の井の百合に對する溺愛の一斑を示して隱然弟京山と面白からぬ關係あることをほのめかしたり。蓋し京傳が一たび弟の子を養はんと決心しながらそを百合の妹に見かへしは、人

情として京山が悦ばざりし所なるべし。而して此の際京馬の間には異状なし。

文化三年の秋、趣町なる書肆舟丸屋甚助、判木師米助に彫刻金、前借運漕の出入ありて、角丸屋は遂に米助を町奉行小田切土佐守に訴へ、且この儀につき故障をなす者は作者馬琴なりと申立しに付、曲亭馬琴召喚せられて吟味に逢ふ、もこより事の間違なりしかば馬琴の中聞きたら、やがて和談に及び米助は賞金三兩を甚助へ返し、其餘は十二月晦日限りに返済すべしといふに、甚助も今更企圖外れて、せん方なければ其の儀をうけひき、遺恨なきよし證文を入させ只一吟味にて事平さしが、此の折京傳、鶴屋など多く奉行所の腰掛へ來會して、甚助が所作を惡むものから此のよしを聞き、心地よしとて祝はぬはなかりき。

かくて甚助は曲亭にわびければ曲亭は「甚助理不盡に連累したる恨、生涯忘るべからず」とて其の後は種本も遣はさず、甚助殆ど困却して京傳に頼みしに、此の後久しくなるまで京傳が乞はるゝ種本わたさずとて、甚助催促せしに、京傳怒りて、著編は問屋より買出す物と同トかられば、運達はかれて料りがたしめてはれつけしかば、甚助も腹立ちて其の後は來らざりき(作者部類)

これ些細のことながら、京傳の馬琴に對して冷淡ならざりしを見るに足れり。然るに文化六年京馬の間に、意見の衝突起りたり。『伊波傳毛之記』に従へば是より先き養女鶴が十三歳の頃、京傳は曾て我母の尾州家に奥勤めせし所縁により、鶴も亦尾州家の御守殿へ部屋子に遣はし、今年十六(享和三年九歳とあれば文化六年には十五歳なり)にして竟に早逝しき。百合はもとより京傳の哀悼大方ならず。馬琴は京傳が家に不幸ありし時、訪ひ行きて慰めけるに、

京傳曰く我れ子なきにより荆妻の妹を養女とし生育せしに今回ばかりも遠逝しこの悲みに落たり、然れども弟京山に幸

ひ數子あれば後には又何さかなす事もあらん、なれどもこれ表面祖宗の祭祀をたゞる世上の方法のみ蒲妻の如きは若し我が死せし後は肉身の者もなく又かれを賣ぐものなしと思ひやれば、是が計慮もなし置たしと兼てより心掛やうやく先頭金百五十兩を出し或處に寛頭店の株を購ひ得たり、即ち一ヶ月金三分づゝを入學す因て此所得金を妻のものに定め置けり又多少の貯金もあれば我は變あるも彼れの一生は安く送り得らるべしと、又曰く我が身後彼れ若し零落して困窮せば世人は必ずいはん京傳は死後のたしなみなきかゆる其落ぶれし妻を見よと是我が恥る所のもの也兄如何に考へらるや

と。馬琴は之れを聞きて答へず、談を餘事に移して暫くして去りぬ。其の後逢ふたび毎に京傳は馬琴の意見を叩くに、馬琴も然らば參考までに愚見を述べしとて

我思ふ所は甚だ先生と異れり願子家訓にはすや遺子萬金不薄藤從身と君子は其子にす財を遺すを欲せず況乎其妻の爲めに何ぞ此事あらん先生若し苦心無慮して漸く千金を蓄へ没するの時にあつて妻に之を遺す遺訓嚴ならざるに非ず、妻又遺命を奉ぜざるにあらす然れども世道は輕薄にして事物の度合久しく安全を保たず万一も此場合に遭遇すれば計圖外より醜態の内は能く之を維持保存する力に堪はず、人事止むを得ずして變せん孔子曰其人存則其政存其人亡則其政亡是なり先生茲に考ふる所あらば攝生の法に従ひ身軀を養生し長壽を保つことを計り弟京山子の兒子なり或は他實直の人の兒子なり之を撰み之を養ひ細子の家督を定め万歳の後相續者の異論なき道を立ざる可らざるは理の當然にあらずや世の諺に老少不定といふ妻若し先生に前だつて下せば遺財は元より多年の苦慮空く消散して較圖茫然たらん古人曰愚以謂財と先生余は失禮を願す其意見をいふ斯の如きのみ

京傳は唯默然として言葉なし。馬琴は其の後も京傳を訪ふこと兩三度、談話數回に及べども京傳は馬琴の説を賞賛して毫も隔意なきもの如し。さる程に此の年の暮十二月、馬琴は『夢想兵衛胡蝶物語』を著ししが、編中に『忠臣藏』の如かる勘平がことを論じたる一節あり、即ち夢想兵衛

衛が如かるを叱する條にいふ、

全昧夫の爲なりと既に影の客に身を汚して年季が明たらば又菑の夫さひまつにならふと思ひしは色慾から出た了簡ちがひにて女の心操を正しくする道理をしらぬ誤なり同ト事なら金剛全傳といふ小説に聖徳といふ箱入娘が金氏の息子と夫婦のかりひしたれどもいまだ婚姻はさしつかへすそのうちに親父が身に係た不慮なきことが起つて囚徒となりしかば親を救はん爲に已にこを得ず聖徳が身を賣てその罪を贖ひしが既に影の人に身を汚されしかば結髪したるに恥て後には尼となり妹をもて彼金耶に妻せたるは道理至極の始末なりこれさへ一旦賊首の妻となり我れつらかりしものに冤を報ひし事なきは女子の才覚に過ぎたりこれらによつて論ずるときは探花春を賣つて早野氏が流れて世にありさし恥をしたらば年季あけて後には尼ならんは貞を破て貞を全すといふべし年季あけたらば又菑の如く夫婦にならんと思ひしは色慾の腐がぬけぬ故の惑ひなり二人川の上せせに立て一人溺るゝときは救ふべし二人もろるゝときは救ひがたし一人溺るゝときは一人岸にありこゝをもて救ふに便あり二人ともに溺るゝときは二人水中にありこゝをもて救ひがたしこゝも夫婦御親父迄みな色慾名利に溺れしゆゑに夫は妻を救ふに便なく妻は夫を救ふに道なし云々『胡蝶物語』

『伊波傳毛之記』に従へば右は世に身を花柳の街に沈め「貞操と思ひて此禽獸世界に恬然として耻ともせず勤めするは人の眞といふ道を知らずで婦徳を誤るものなるを反復丁寧に説き去りて後世の輕薄男子が探花春を買ひ柳絮風に舞ふを見て無上の娛樂とし家を顧ず内經綸の亂るゝあるも愧とせずして世に處るは奚ぞと論詰したり」といふにあり。

京傳は此新冊子を見猶疑の情何ぞ堪ふことを得ん大に憤懣し獨思惟らく堪忍を棄て我を暗に誹謗す堪れ高慢字句冒語の上に執て己を賣るの情を以て細中針を入れて他人を刺し紙馬に跨りて我を睨す假裝の辭を遺示して我妻に及ぶ蓋そ詰問せざるを得んや

とて大に怒り、明くる文化七年、年始の嘉禮を機とし、京傳は弟京山と共に馬琴を訪ひ、語次著作のことに及びて遂に一場の争端を開き、京、馬互に誓りぬ、京山傍に在りて中裁せしかば漸く其場はすみしが、是れより二家の感情よろしからず、たまたま所用あるも唯書状のみにてすまし交通は全く絶えき。以上皆曲亭の辯護士がいふ所なり。辯護士また京傳が邪推深き例を擧げて曰はく

は下め万葉亭と交り渡りたりしに寛政のは下め彼れ田舎芝居といふ一冊を著はし、其自序の文中に今の洒落は翠丸を出して笑ふが如しといへり京傳之を見て己れを蹴りてして恨み憤り意に其言を謂すして遂に又万葉亭と交らず一旦馬琴を恨みたりしも又是に似たり

と。嗚呼これ事實か否か。いづれにもせよ、今こゝに二者の是非を判ずるの要を感ぜず。

馬琴は京傳を指して先生といふ馬琴曾て寛政二年京傳を見て戯作の弟子たらんといひ乞求せし時京傳戯作の所以を述べ門人として教ふべき伎に非ざるを脱得し相談者となり而て緊要の所を指示すべし云々師たらん馬琴は恬然人の餘業を繼紹し又他の唾を嘗て世を籠絡する徒にあらずと雖も京傳に依り今茲に至るを以て京傳を指して先生といふ其徳操見る所高し(伊波傳毛之記)

自賛自評して高しといふ、高きか、高からざるか、世間よく之れを判ぜん。

馬琴は京傳が万葉亭と絶交せしを證據として馬琴を怨みしも亦然りといへど、馬琴もまた學問上のことにて山崎英成と絶交せりといふ、而して京傳と万葉亭との話は『伊波傳毛之記』作者部類にて喋々する所あり

文化十二年の頃より京傳は脚氣を煩ひ歩行すれば胸痛すとて家にも閉居せしが、明年の夏に至

りて病少しく癒えければ、より／＼散歩の爲に友人を訪ふこともありき。十三年丙子の秋弟京山書齋を新築して一夜座敷開の宴を張り、眞顔、靜石、京傳等を請待せしが、京傳は快く食事を畢へ眞顔等と平常の如く談笑して三更に至りて辭して家に歸らむとす。眞顔は既に家に飯りしかば京傳は靜石と共に京山が書齋を出て行くこと一町ばかりにして、俄に胸痛甚しく足すゝみがたし。靜石驚いて其の木屐を脱がしめ肩にかけ扶けて家に送る、京山も此の報に接して走せ來たり、妻百合と共に介抱し醫者を招きて診せしむるに軋脚氣(脚氣衝心なるべし)と唱ふる危篤の症なりといふ。百合京山手を盡くししが終に及はず、其の夜四更に至りて全く不起の人となりぬ。時に文化十三年九月七日享年五十六歳なりけり。明日未の刻柩を兩國回向院に葬送す、會するもの、蜀山人、狂歌堂眞顔、靜石、烏亭馬馬、曲亭馬琴、及北庵紅翠齋、歌川豊國、勝川春亭、歌川豊清、同國貞等文人墨客當代の名家百餘人に及び頗る盛弔なりきといふ。法名「辨譽智海京傳」(『伊波傳毛之記』)

山東京傳の末期は要するに悲惨なりき、蓋し京傳が自ら求めし所とはいへ京山も兄に對して冷澹なりきと『作者部類』に見えたり。而して京傳が相談相手とも恃みたりし馬琴は前の如く疎遠となりたり。彼れは其の妻の身の上を苦勞しながら空しく他界の人となりぬ。一言彼れの生涯を評すれば初期の京傳は陽氣にして春の如く中期のは疑感即ち變遷の期なりしが、後期に至りては稗史の特質に現れたるが如く荒涼寂寥ながら秋のものがなしきに似たり、されば戯作者としての

譽は當時已に高かりき。現に

寛政の年、岡崎名古屋の間を遊歴せし者、山東鹿京傳たる由を伴りて、其地の風流士を欺きたるものあり(『作者部類』)
上田秋成の如きだに『くせ物語』の序中に「吾妻の京傳」を稱し、太田錦城の如きも「今は考證の學、北野屋鞠塙、山東京傳に下り及べり」と『梧窓漫筆拾遺』にうめきたり。いづれか彼れの名の一世に高かりし證ならざらん。

因に記す、『蜘蛛の糸巻』には「家兄死去の時馬琴へも知らせやりに、寺へばかり憐宗伯を名代として、自身不來、舊友は野山騎までも來られしが、馬琴が來らざる故、人々宗伯に尋れしに、病氣にはあらざるよし、七日佛事の時に馬琴をも書中にてまねきしが、佛前へ少しの使物のみにて、其後は亡兄のいたまもいひにも來らず、書狀にもたづねず、音信不通なり」とあり、馬琴が會葬せしや否は明ならず
又記す『戲作者撰集』に「後言」の詞をひき、京傳が病を得しは『骨董集』のこゝにつき他人と争ひいたく激昂せし爲なりといひ、なほ之れを疑ひ「然るや否はしらず印書買文齋堂が話に聞おけるはさる類に非ず」と辨せり『後言』に「いふことを記せるは誤れり」

京傳嗣子なかりければ弟京山入りて家を繼ぎ、長子筆吉を傳藏と改めて之れに其の跡を傳へき。
妻百合は京傳の死後悲歎のあまり發狂して文化十五年正月二日没しぬ。弟京山も當時の一名家爰に其の傳を附記すべくもあらず。

山東京傳著作一覽表

此の表を分ちて四類とす、青本之部、洒落本之部、合巻並神史之部及び雜書之部是れなり。青本之部の初に著作と挿畫との二項を設けたるは、京傳が初期の生涯には、寄工と職作者との二職分あることを示さん爲なり。
表中に收めたる書目は『神史年表』『戲作外題鑑』『合巻外題集』『作者部類』『近代著述目録』等を参照して集録せるものなれど素より部數も多く、年代も遠かりたれば、誤謬、遺漏、年號の相違等若干あるべし。今は只大略を世に示すのみ。

山東京傳著作一覽表

年	號	年	號
安永七	青本	安永八	青本
安永七	自安永七年 至文化元年	安永八	自安永八年 至文化元年
<p>●『開帳利益札遊合』(作者未詳北尾政演鑑) ●『戲作者外題鑑』に○印を附し「七曲合案に京傳十五歳にて作、察者未詳」とあり、但し同書△印は大當りの符號、○印は次級の賞點なるべし、又此の書前年に作りし者とすれば京傳が十七歳の作にして草双紙若筆の初なり</p>		<p>●『麻花扇之觀世水』(喜三二作)「寄工政演今年より出る後に作者京傳といふ是也」(『神史年表』) ●『いさちよんく』(未詳) ●『政演鑑風名不出』とあり(『戲作外題鑑』) ●『花のお江戸三曲の冊』 ●『かへり咲後日の花』 ●二種ともに政演鑑、作者未詳、但し『神史年表』に「戲作外題鑑」北尾政演の書作なりとす、以下作者未詳同し。</p>	
<p>●『娘のたき打故郷の錦』(政演鑑作) ●「山東京傳娘のたき打にはトめて名を出す」(『神史年表』)これ京傳の著作、但し京傳の名は未だ出でず。</p>		<p>●『龍の部四國うわさ』(喜三二作) ●『夜野中狐物』(王子風車作) ●『おかしなおしづか茶』(藤下透人作)</p>	

年	天明元年	天明
<ul style="list-style-type: none"> ●「或人云おかし咄の膝下遊人も京傳の事なり」云々(『神史年表』) ●「くだ物見立お世む話」 ●「遊入三幅對」 ●「よれまんちうの始め」(作者) ●「通こは非事」(未詳) ●「やさ模機會我の難形」 	<ul style="list-style-type: none"> 安永十年天明と改元 ●「運ひらく扇の花」(喜三二作) ●「煙くらへそげやの癖」(芝全交作) ●「其後ひよんな物」(風車作) ●「大津名物」(可笑作) ●「七笑親當世すがた」(作者) ●「うんつく太郎左衛門」(未詳) ●「敵討魚名の級」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「御存商賣物」(自畫) ●山東京傳の名此の作よりあらはる『神史年表』に「京傳が戯作御存商賣物には下りて畫作の名を顯し」云々 ●四方山人此の年草双紙評判記
二	天明三年	天明四
<ul style="list-style-type: none"> ●「岡目八目」を著し、此の作に「總巻軸極上々吉」の位を附す(蜘蛛の糸巻) ●「たげこの巻一時」(通笑作) ●「市川三升團」(岸田杜芳作) ●「七福神大通傳」(可笑作) ●「いはひます福壽草」(作者未詳) ●「敵討染分手越」(作者未詳) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「かれは上野歎」(自畫) ●「濕羅武者くしや咄」(芝全交作) ●「通入いろは短歌」(杜芳) ●「通の春盛日開」(杜芳) ●「放蕩報本日本左衛門」(紫蘭作) ●「仇な草伊達を下谷」(紫蘭作) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「天慶和句文」(自畫) ●「不茶配即席料理」(自畫) ●「八たし明の流」(芝全交作) ●「跡目論うその實録」(杜芳作)
年	天明五年	天明六
<ul style="list-style-type: none"> ●「全盛大道記」(作者未詳) ●「人知らず思染井」(黒馬式部作) 黒馬式部は山東京傳の妹よれ女が併名なり 	<ul style="list-style-type: none"> ●「俠中惡骨駁骨」 ●「可富見ほの夢」 ●「句ひん細香」 ●「麻中丁子」 ●「江戸生浮氣の蒲」(自畫) <p>此の作大當り、自惚子を體次郎と呼ぶこと又京傳鼻の由來此の作に基くといへり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●「江戸春一夜千兩」(自畫) ●「あく七變目景清」(自畫) ●「三階開給」 ●「景清塔のれより」(万泉亭作) ●「通丁お江戸の鼻す」(唐來三和作)

年	天明七年	天明
<ul style="list-style-type: none"> ●「釘のおれ二度目の清書」(杜芳作) ●「御富興行會我」(山東京傳告作) ●「兩國したた染」 ●山東京傳は京傳が別名たること前にいへり 	<ul style="list-style-type: none"> ●「三筋立客のきうへ田」 ●「百文二朱むだがるた」 ●「三千年になるてふ蛸鮎」(自畫) ●「是氣儘作種」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「敵討跡のまつり」 ●「まな手本錢士の筆力」 ●「小倉山時雨珍談」 ●「合通自慢のいみ」 ●「名物梅ヶ枝でんぶ」(自畫)
八	天明九年	寛政元年
<ul style="list-style-type: none"> ●「扮接銀烟管」 ●「富士の人穴見物」 ●「今日現金湯起請」 ●「時代世話二丁つゞみ」(行慶畫) ●「狂言末ひろの榮」(歌麿畫) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「酒宴なるいな化物の交」(石山人作) ●「苦は樂の元どり」(作者未詳) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「化物樂屋異帳」 ●「地獄一面鏡の淨はり」 ●「早道節用御守」 ●「三河島御不動記」 ●「孔子結時に藍染」 ●「一百三升いま地獄」 ●「花の東頼朝公御入」 ●「眞實情文櫻」 ●「延壽返魂丹」 ●「神文谷利生の四竹節」 ●「一生入福兵衛の幸」 ●「江戸の花役者ひい」 ●「まごみせ八人」(山東京傳告作) ●「面光不背の笠」(北尾政美畫) <p>此の年政演他人の作に畫かず</p>
寛政二年	寛政三年	寛政三
<ul style="list-style-type: none"> ●「孔子結後編遊通行儀段」 ●「同三編」 ●「花はみよしの犬はうち」 ●「ひやつこい汲立」(政美畫) ●「心學早染草」 ●「玉がく青砥が錢」(歌丸畫) ●「京傳浮世の醉醒」(龜毛畫) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「新作徳政斷」(石山人作) 	<ul style="list-style-type: none"> ●「至無我入真心中」 ●「話染原色搦」 ●「落咄笑の書抜」(自畫) ●「九界十年色地獄」 ●「人間一生胸算用」(早染草後編) ●「八百万兩金神花」 ●「産生々夢其前日」(政美畫) ●「箱入娘而屋人魚」 ●「世の中洒落見繪圖」(菊亭畫) ●「京傳此頃より大に行はれ其名高し北尾政演が青本を畫くこと此年にして止む」(『神史年表』)此の後著作挿畫の項を省く

寛政四年		寛政五年	
●『女將門七人化粧』(菫工不明) ●『天網垂楊柳』(菫工不明) ●『只こゝろ鬼うち豆』(政美菫) ●『化物つれく草』(政美菫) ●『朝比奈異國めぐり』(重政菫) ●『梁山一奇談』(重政菫) ●『梁山一奇談』は水滸傳の繪草紙にして六冊十回、後來繪入水滸傳之れに基くさい(り) ●『桃太郎發端曲』(春期菫) ●『寶器教難講釋』(春期菫) 此の前身京傳手紙一件あり、馬琴の代作さいふは此の二部等なるべし		●『新板管道中助六』(清長菫) ●『貧福兩道中記』(春期菫) ●『福徳果報兵衛傳』(菫) ●『龍宮なまぐさ鉢木』(菫) ●『先開梅の赤木』(菫) ●『さつき下句由虫曾我』(菫) ●『花の笑七福詣』(菫) ●『四人詰南片あやつり』(菫) ●『堪忍袋結めの善玉』(菫) ●『心學早草』(菫)	
寛政六年	寛政七年	寛政八年	寛政九年
●『貧福兩道中之記』(菫工不明) ●『昔則筆の操』(政美菫) ●『小人國こゝめ櫻』(重政)菫 ●『三辨大夫七人化粧』(菫工不明) ●『花之笑七福詣』(不明) ●『百人一首戲講釋』(不明) ●『眉間三人生醉』(重政菫) ●『忠臣蔵即席料』(重政菫)	●『根なし草紙の若は』(重政) ●『金銀先生造化夢』(重政) ●『忠臣蔵前世の暮なし』(重政) ●『落咄百噺』(重政)	●『鬼ころし心の角樽』(重政菫) ●『人心鏡の影繪』(重政菫) ●『謎下司のはなし』(重政菫)	●『三才圖繪雜講釋』(重政菫) ●『和莊兵衛後日咄』(重政菫) ●『正月故事談』(重政菫) ●『嘘から出た實咄』(重政菫) 『京傳の作今年四部いづれも教訓を専らにして戯作の跡にあらす是より年々勤懇をこゝす』(神史年表)
寛政十年	寛政十一年	享和元年	享和二年
●『百化帖準擬本草』(重政菫) ●『人間一生凸凹話』(重政菫) ●『一刻假万兩回春』(清長菫) ●『兒朗かげ給の譬』(清長菫) ●『化物やまこ本草』(可候菫)	●『京傳主十儲利監』(重政菫) ●『兩頭筆善惡日記』(重政菫) ●『五林和合物のたり』(豊國菫) ●『かな手本むれの鏡』(豊國菫)	●『甘い裁名利おろし』(重政菫) ●『平かな鏡神問答』(豊國菫)	●『寛政十三年享和と改元』(重政菫) ●『かな手本忠臣蔵』(重政菫) ●『こは珍ら見せ物語』(重政菫)
享和三年	享和四年	享和五年	享和六年
●『江戶砂子娘敵討』三冊(重政菫) ●『優盛華物語』七冊(武清菫)	●『通氣智之鏡光記』(春) ●『呑込多舞寶珠起』(夏) ●『賢愚潘越湯新話』(秋) ●『枯樹の花大徳の利益』(冬) 右四種を四季に擬へて出版す是れ合巻の權輿なりといふ ●『早わざ七人前』(重政菫) ●『お説染長添小紋』(重政菫)	●『山東奇談机之塵』(重政菫) ●『原本復讐後の祭記三冊添』(合巻外題集)に見えたり ●『敵討煎茶の始』(重政菫)	●『敵討兩輪車』六冊(重政菫) ●『河内の姥々火話』(外題集) ●『敵討奥州狼河原』六冊 ●『同孫太郎』(豊國) ●『茶服紗茶人形氣』(豊國)

享和三年		文元化年	
●『四十八手二編罪之塵』(寛政三年) ●『仕掛又庫』(寛政三年) ●『姉妹絹よる』(寛政三年) ●『錦酒更』(寛政三年) 以下年號不明 ●『傾城買早學問』(寶武根) ●『總排優細見記』(小紋新法) ●『地者八景』(吉原大全) ●『雜談紙屑籠』(松魚智懸袋) ●『獨樂新話』(重政菫) ●『麻の大悪』(背權懸談はたて具) ●『客茶氷面鏡』(熱財ます) ●『令子洞房妓談』(傾城友人の眞粹) ●『白川夜船』(小紋雅話) ●『忠子部屋』(小紋雅話) ●『不祥照房情記』(小紋雅話) などは數多あるべし		●『悟道迷所獨案内』(重政菫) ●『分解道胸中双六』(重政菫) ●『狸家夢見通座敷』(重政菫) ●『怪談模倣夢字彙』(重政菫) ●『人間万事吹矢的』(重政菫)	
文元化年		文元化年	
●『江戶砂子娘敵討』三冊(重政菫) ●『優盛華物語』七冊(武清菫)		●『山東奇談机之塵』(重政菫) ●『原本復讐後の祭記三冊添』(合巻外題集)に見えたり ●『敵討煎茶の始』(重政菫)	
文元化年		文元化年	
●『敵討兩輪車』六冊(重政菫) ●『河内の姥々火話』(外題集) ●『敵討奥州狼河原』六冊 ●『同孫太郎』(豊國) ●『茶服紗茶人形氣』(豊國)		●『梅花水裂』三冊(豊國菫) ●『昔語稻妻表紙』五冊(豊國菫)	
文元化年		文元化年	
●『於杉於玉二見敵討』六冊(菫工不明)		●『敵討岡崎女郎茶』(菫工不明)	

文	年五化文	年四化
●松卜梅竹取物語十五册(國貞畫)	●女達三ヶ月阿仙傳六册 ●万福長者榮花物語三册 ●統築五郎強勢談五册 ●八重殿のくしの仇討七册 ●岩井御衆野仇討七册 ●糸車九尾狐九册 ●俠客双つ蝶々九册 ●敵討白藤源太談七册 ●妬妬仇討話六册 ●敵討天竺徳兵衛六册 ●熊女越路之仇討六册 ●敵討木曾の棧六册	●敵討千鳥の玉川六册(重政畫) ●於六柳木曾仇討六册(豐國畫) ●安積沼後日之仇討六册(豐國畫) ●春知島安方忠義傳六册(豐國畫)
合卷	合卷	合卷
●本朝辭書提十册(豐國畫)	●戲場花牡丹燈籠六册(國貞畫) ●昔繪博多小女郎七册(清榮) ●糸橋本朝文粹十二册(畫) ●親の敵うさぶの傳六册 ●宮士太郎梅屋家八册 ●夜の姉親父形氣八册 ●歌字靈奇柳町八册 ●筆慰反古張團扇(不明)	●志道軒昔講談七册 ●守松超錦之笈摺六册 ●勤香辻談義八册 ●累井筒紅葉打舖八册 ●一日管運理花王十册 此の作前編京傳作、後編京山作 ●岩戸神樂劍威徳六册(春亨) ●風流御三味線十册(畫) ●梅の於由女丹前六册(春廣畫)
化文	年七化文	年六化
●咲替て花之三番目六册 ●女優寛雲之花道五册(國貞畫) ●播州血屋敷物語六册(春廣) ●物草姫昔難形六册(春廣) ●曉傘時雨古手屋(不明)	合卷	合卷
文	年九化文	年八
●今昔八丈揃六册 ●釣狐昔談笠六册 ●株脊山長柄文藝六册 ●二人虚無僧九册 ●勇雲外氣節六册 ●海雲猫之話六册(國貞畫) ●外聚男子鏡 ●龍釣瓶丹前八ッ橋(不明) ●朝茶湯一寸口切	●梅由兵衛紫頭巾六册(豐國) ●男草履打六册(畫) ●娘景清襷襦袢袖七册(不明)	●今昔八丈揃六册 ●釣狐昔談笠六册 ●株脊山長柄文藝六册 ●二人虚無僧九册 ●勇雲外氣節六册 ●海雲猫之話六册(國貞畫) ●外聚男子鏡 ●龍釣瓶丹前八ッ橋(不明) ●朝茶湯一寸口切
十化文	年九化文	年八
●ハムシ入道昔談六册 ●婦禮果草笛五册 ●兄ヶ淵櫻之振袖六册 ●重井筒娘千代能六册(美丸、國丸畫) ●春相摸花之錦畫六册(國貞、國丸畫) ●無間鐘娘縁記六册(豐國畫) ●朝妻舟柳三ヶ月六册(不明) ●安達ヶ原水姿見六册(不明)	●今昔八丈揃六册 ●釣狐昔談笠六册 ●株脊山長柄文藝六册 ●二人虚無僧九册 ●勇雲外氣節六册 ●海雲猫之話六册(國貞畫) ●外聚男子鏡 ●龍釣瓶丹前八ッ橋(不明) ●朝茶湯一寸口切	●梅由兵衛紫頭巾六册(豐國) ●男草履打六册(畫) ●娘景清襷襦袢袖七册(不明)

三十化文	年二十化文	年一十化文	年
●石の枕春宵抄七册(豐國畫) ●穿聲笑入傳六册(柳川東信畫) ●黄金花万寶善書六册(國貞、國直、國芳畫) ●鎌千鳥會我佛六册(國貞、國直、國芳畫)	●繪巻版子持山姥九册(豐丸畫) ●女達磨由来文法語七册 ●浪清芝振袖日記六册(豐國畫) ●撥巻者聞水月談六册(國直畫) ●草履打所縁色揚六册(美丸畫)	●當り升矢筈の筋限六册(豐國畫) ●當り升矢筈の筋限(一)九册	●雙蝶記六册(豐國畫)
合卷	合卷	合卷	合卷
●黄金花男道成寺十册(豐國) ●信田聖音繪草紙六册(畫) ●肥後士出口の編笠六册 ●敵討馬士歌の始七册(不明) ●物草太郎正本所七册 ●腹筋鷲鷲石五册(内一册京山作)	●大磯俄のれり物六册(豐國) ●袖之梅月之土手節(畫) ●氣を替て戲作問答(不明) 以上三部作者の遺稿なるべし	●長髪姿蛇柳六册(國貞畫) 此の年作者京傳物故	●長髪姿蛇柳六册(國貞畫) 此の年作者京傳物故
評未號年	年四十化文	年	年
●孔子一代記三(寛政元年) ●四季交加(寛政は下め) ●近世奇談考五(文化元年) ●骨董集四(前文化十、後同十二年) ●大盛舞考證(不明) 又『近代著述目録』に載せて傳本の存否詳ならざるもの左の如し ●春日話柄五『狂奇譜』五『雜劇好古	●黄金花男道成寺十册(豐國) ●信田聖音繪草紙六册(畫) ●肥後士出口の編笠六册 ●敵討馬士歌の始七册(不明) ●物草太郎正本所七册 ●腹筋鷲鷲石五册(内一册京山作)	●長髪姿蛇柳六册(國貞畫) 此の年作者京傳物故	●長髪姿蛇柳六册(國貞畫) 此の年作者京傳物故
其四 雜書之部	合卷	合卷	合卷
●孔子一代記三(寛政元年) ●四季交加(寛政は下め) ●近世奇談考五(文化元年) ●骨董集四(前文化十、後同十二年) ●大盛舞考證(不明) 又『近代著述目録』に載せて傳本の存否詳ならざるもの左の如し ●春日話柄五『狂奇譜』五『雜劇好古	●黄金花男道成寺十册(豐國) ●信田聖音繪草紙六册(畫) ●肥後士出口の編笠六册 ●敵討馬士歌の始七册(不明) ●物草太郎正本所七册 ●腹筋鷲鷲石五册(内一册京山作)	●長髪姿蛇柳六册(國貞畫) 此の年作者京傳物故	●長髪姿蛇柳六册(國貞畫) 此の年作者京傳物故
挿畫	著作	挿畫	挿畫
●青本 五十種 但し作者未詳二十種は京傳の作に加ふ	●青本 百四十一種 ●酒落本 三十六種 ●合卷 九十二種 ●神史 十種 ●雜書 二十二種 但し不明の書も多し	●青本 五十種 但し作者未詳二十種は京傳の作に加ふ	●青本 五十種 但し作者未詳二十種は京傳の作に加ふ
●總計 著作三百〇一種 ●外に挿畫三十種	●總計 著作三百〇一種 ●外に挿畫三十種	●總計 著作三百〇一種 ●外に挿畫三十種	●總計 著作三百〇一種 ●外に挿畫三十種

曲亭馬琴

第一章 昨夜の夢

違は泥中にいづれども清香に害なく、英才必しも世家にいでず、家門血統によりて人を評價するは識者のせざる所なり。まかりと雖も天性と遺傳との關係の小少ならざるを思はし、祖先來の歴史も、その後裔の傳記中の重なる部分たる事を認むべしむが小説壇の泰斗曲亭馬琴翁の性格の如き翁は源姓瀧澤氏、其の先は世々徳川家の士、長澤氏に仕へて、三河にあり、天正十八年東照公江戸入部の時、主家に從ひて東にうつりぬ。忠直精厲世々をへつればとて冢宰の列にあげられて幾からず時めきけり。爾後世をかふる事二三、年を閱する事四五、瀧澤大右衛門に至りぬ。

長澤氏又二三傳して養嗣大河内右衛門大夫正綱、東照公に近侍して寵あり、松平氏を賜はりぬ。正綱の子伊豆守信綱、才機絶倫にして大猷嚴有の御代に仕へて輔弼最道に叶ひければ、下總古河七萬石より武藏川越七萬五千石にうつされ、智恵伊豆の名譽は天下後世にまばゆきまで輝きたり。信綱の四郎に頼母介堅綱ときこえしは、幼より聰明敏悟、最機敏の性なりしかば、信綱殊の外にめでつくしみて、愍なる他家をつがせんより、むしろ宗家の藩屏たらしめんとて、同國埼玉郡羽生領志多美の郷にて、志多美、明願寺、下の三ヶ村、一千六百石を割きて別家せさせき（正保

曲亭馬琴肖像



曲亭馬琴

第一章 昨夜の夢

遣は泥中にいづれども清香に害なく、英才必しも世家にいでず、家門血統によりて人を評價するは識者のせざる所なり。まかりと雖も天性と遺傳との關係の小少ならざるを思はば、祖先來の歴史も、其の後裔の傳記中の重なる部分たる事を認むべしわが小説壇の泰斗曲亭馬琴翁の性格の如き翁は源姓瀧澤氏、其の先は世々徳川家の士、長澤氏に仕へて、三河にあり、天正十八年東照公江戸入部の時、主家に従ひて東にうつりぬ。忠直精厲世々をへつればとて家宰の列にあげられて淺からず時めきけり。爾後世をかふる事二三、年を閱する事四五十、瀧澤大右衛門に至りぬ。
 長澤氏又二三傳して義嗣大河内右衛門大夫正綱、東照公に近侍して寵あり、松平氏を賜はりぬ。正綱の子伊豆守信綱、才機絶倫にして大猷嚴有の御代に仕へて輔弼最道に叶ひければ、下總古河七萬石より武藏川越七萬五千石にうつされ、智恵伊豆の名譽は天下後世にまばゆきまで輝きたり。信綱の四郎に頼母介堅綱ときこえしは、幼より聰明啟悟、最機敏の性なりしかば、信綱殊の外にめでいつくしみて、愨なる他家をつがせんより、むしろ宗家の藩屏たらしめんとて、同國埼玉郡羽生領志多美の郷にて、志多美、明願寺、下の三ヶ村、一千六百石を割きて別家せさせき（正保



曲亭馬琴肖像



大右衛門

江 戸 作 者

二年。其の時豆州大右衛門を招きて頼母は年若ければ足らぬ事のみ多からんと心元なし、汝は彼れが傅父といひ老功の者たれば。今度新家の家宰となして方を托せむと思ふなり、諫めもし懲らしめてきたに、助け導きてよ、唯秩祿從來の半にも及びがたきが心苦しけれど、汝ならでさる人もなければとありければ、あなかしこ、よしや粟半粒はまらずともいかで若君と別れまつるべき、骨をくだき身を粉にしてもえこそ御過はあらせむとちかひてまかでつ、大右衛門が三郎久米之助といふは、早くより四郡の君（頼堅）の許に召されて、文の席遊の場夜となく日となく侍りて、雨の夕の暗らひ敵、雪の朝の仕合の友と親しく仕りて、互に兄弟の思をさへなしければ、之れも従ひて別家になつりぬ。やがて親は家老となり久米之助は元服して運兵衛與也と名のりて近習となり、内外相助けて、何くれと取りまかなひけり。

堅綱君殿有公に近侍して君寵日を追うて加はりければ、大右衛門も殊の外に喜び居けるが、あはれ浮世は夢の如しといふたとへにもれず、寛文五年六月末つ方、いまだ世繼の男子だにあらぬ廿五歳を一期に、忽ち身を他界の雲に隠しぬ。一家悲歎の涙は晴るべくもあらねど、せむやうもなければ、大右衛門萬に心をつくし、一族大河内久綱の三郎又左衛門儀綱といふを養ひて家督となしけり。やがて所領安堵とはなりぬれど、今年僅に十五歳なる幼君なれば、輔弼の任殊に重く積勞つひに病をなして、事業やうやく其の緒につかんとしたる寛文十年九月十日、大右衛門終にみまかりけり。

享年七十歳位。屍は小石川深光寺に葬る。常光院月山秋園居士。

運兵衛興也やがて家職を襲ぎ、献替する所多かりければ、儀綱棚營の御覺もめでたくて、御徒士頭勤仕布衣にへのぼりしが、此君も又世子なくて、元祿七年七月七日にみまかられき。かなしとは常の悲しき時にいへり、かゝる時何とかいはんと興也をはじめうち嘆きしが、さてもありえねば、之れも一族なる天野長頼の次郎内記信連といふを迎へ立てたり、此君常憲公の覺ありければ一家まばしは涙の袖をほしたりけり。

主家の不幸のみならず、興也も亦家督の幸なくて三十路ばかりにして妻を先て、後妻に二女はありけれど、之れも幼き程にうせて家をつがすべき者なし、こゝに主家采邑のほとり川口といふに真中全直といへるがなり、常にゆきかひて戀に交らひしかば、その三郎を養ひとり、佐仲興吉と名のらして、家職を傳へ、我れは信清軒と號して思を數島の道によせ、世を風流に送りけり。

元祿八年主家の命によりて志多美長昌寺の釋迦堂の縁起を撰び、其の終に和歌九首を附し、南無釋迦牟尼佛の九音を其の頭させり。その第三首

白露に宿ることもなき月影も西に入る社樂しかりけり

第九首

罪咎も今は消なむ出る月いろさは助け玉へ彌陀佛

名歌にはあらず。例として引けるのみ。此の燕石樓中此の詩の歌四五首あり。

興吉又よく祖道にそむかず、深く佛法を信じ、謹慎精勵を圖りしかば、領内普恩澤に浴せりけり。

り。此の人も亦文學の思想あり、詠歌また少からざりき。

謹慎精勵なる證は其の日記の癡情によりて見るべし。曲亭稿編『家網遺墨』中寶曆年間日記

九月六

一朝日クモリ昨日より大にひみ肌付に布子綿入羽織にてもまた寒し。火鉢出してあたる。八月十四日比より蚊帳つらす。

七月十八日の狀大右衛門(興吉の子興藏の事なり)方より今日到來披見

一朝 割 茶汁 一盃 白飯 里芋 せん大根汁 梅干 酒しほ 一夕 粥菜蘇の粉 焼味

附

朝團子あたり大下り小用一度。晝又大下り小用一度。暮小用一度

其の精細なるさま見るべし。佛法の信仰文學の趣味を有せる事も同書に

彌陀頼む人は雨夜の月なれや雲晴れぬ共西へ社ゆけ

分け登る處の道は變れ共同下盤井の月を眺むる

なごあるにて知らるゝなり。無下の俗人にはあらざりけり。

其の子興藏大右衛門と稱す。(後に運兵衛と改む)

文化中出版の『蒸雜の記』には諱を興藏と記しオキノリと訓したり。今墓石其の他諸書による。

よく劍を舞はし、弓を射、殊に一條流の御法に精しく、深く孫吳の奥をきはめて、敢爲率直の風あり少くして劍を負ひ、西に東と經めぐりて、術を磨き、膽を煉り行きくして、奥の棚倉にどまり、まばし小笠原侯に仕へたりしが、父興吉老衰の故をもて江戸にかへり。やがて松平家の家

幸となりぬ。決する事甚速にして、專横のやうにさへ見えければ、出頭をねためる小人輩、吾側に侍りて腐受淫潤の詭口をふるひければ、主君もやう／＼に奥臧をば疎みなしけり。主家は内記信連入りて松平氏を襲ぎしより、舍人内記兵庫頭などと、相傳へて鍋五郎信成の世となりぬ。年壯き者の癖として老臣の諫言立、とにつけかくにつけていまはしきを、同じ年比の近習の日となく夜となきさからし言に、初に左までも思はざりし奥臧の所業の、やう／＼恣なるやうにのみ見えてにくさ限なく、いかで除かんと圖りしが、譜代の家臣といひ、忠勤久しき者なれば、其の口實に苦しみしが、遂に明和の末僅なるとより之れを追ひぬ。

奥臧は罪ならぬ罪に暇賜はり、身は浪々のたつきなけれど、二君に仕へむとの快からず、高松通淨心寺のほとりに佗しく住まひ、賤しき業を營みたり。事の元を知れる人は、なぞて其の身の罪なき由を御本家守の殿（松平伊豆守）にきこえあげて、再び仕へ玉はぬと、勸むる者多けれど、我等輔佐の重任にありて、其の任を盡さねば、君に忌まれ奉れり、其の罪なしと言ふべからず、されど幸にして君御聰明にましまして殊なる御過ちはさぬを、今此等の事を訴へむは、私の爲に君の非を顯すなり、古何某の卿罪なくて勅勘を蒙り、つかさ位を奪はれて草の庵に世を避けたるを、執權の朝臣に知られきとぞ、夫は縉紳雲上の人、我れは凡下の卑賤なれば、た比ぶべくもあらねども、其の志こそまたはしけれ、若し吾が事の世にまられば、君は不明と呼ばれやせん、あなかしこ、ゆめ人には語り玉ふなど、再三度に及びけれど、あへてうけ引く色なかりけり、

言葉にこそかくきはやかにいひつれ、日々に乏しくなりゆけば我れはかくてもは卒りぬべし、いかで子共等には、よき主とらしてたのしき月日を送らせんと、生ひ行く末をぞたのみける。初、奥臧の奥に仕へし程、侯の長臣松澤權右衛門、痛く其の氣概才藻を愛し、兄吉尾門左衛門の孤にて、幼きより我が家に養へりける女の、才氣は男にも劣らず、容貌さへ醜からぬがありしをめあはしたり。

これとの間に子共あまた設けたり、されどたよりとすべきは少くて、二郎と三郎とは生まるゝやがて二ツの指を折りあへでうせぬ、四郎常次郎は父四十二の二ツ子とて、嫡の上より他家をつがせぬれば心ざまさかしけれどせんなし。次の佐五郎は才するどく甲斐ありげなるさまなれど、母の慈餘りに深きになれて、よろづ恣に行へば頼もしからず。次は關といひ、菊といひて、女子なれば語らひがたきともなるべきやうなし。只うひご左馬太郎のみ、年もやう／＼大人び心さまさへまめやかにてよく父母に仕へしかば、之れをぞ末の頼とはまたりけり。

此の草想像に出たる者にあらず、悉く本據あり、然れども記録甚乏しければ他家最著しめりき。今引用の書を列記すれば

『家剛遺稿』元禄以後『武鑑』十数種『座談』『新編武蔵風土記稿』『燕石雜話』『茶雜記』『瀧澤氏墓碑』

因にふるす。萩原乙彦編『神史三大家文集』に翁の祖先を甲斐の人なりとせり、されどいふがし。今諸書を取る

翁た兄弟七人ありしこは仙臺の藩、其の題に答ふる書簡中にあり、また二兄三兄の早逝せしこは深光寺なる瀧澤家累代の墓碑によれり。

第二章 八聲の鶏

第一節 幼き比

紀元二千四百二十七年徳川十一代將軍、俊明院家治公の治世、明和四年丁亥夏六月九日は、文學に志あらん者の記臆すべき日にこそありけれ。わが小説家の泰斗曲亭馬琴翁の産聲は誠に此の曉に深川高松通淨心寺の傍なる武家にきこえそめけり。玉の如き嬰兒の軒端もる旭に射られて微笑めるを見て、あな逞しの子やと叫ぶ父の聲も嬉しげなり。いと男子二人迄失ひつる上、又の子は生れたる年の凶しとて幼き人にとらせて、乳房淋しき年比をかこち暮し、母の喜は如何ばかりなりけむ。

下部炊女のさいめき、さては同僚下官のいひ傳へき、傳へてのほき言に、一家はさながら幸の雲もてみたされたり。やがてちほぢの片名をとり佐五郎と名のらせて月花とていつくしみたり。

依田學海先生の『醒海』には詩の幼字尙蔵とあり、今讀の自記『家廟遺蹟』の書入による。

健かに生ひ立つ兒を見ては、常に涙の種となれる二人の兄の事も何時とはなしに忘れられて、憂きのみの世にもあらざりけりと喜びあへる程に、あはれ又幸のみもあらざりけり。高き枝風に折らるるの譬に漏れず。父與臧は讒者の舌にかゝりて二百年來の主家を追はれぬ。そも當時麾下の小家に仕ふる身は縁輕くして費少からず、僅に妻孥を養ひて餘力なければ、自然其の地位を利用し威福を驅りて、民を虐げ賄賂贈遺の利を謀らぬ者稀なりき。

小川圓道著『歴代』に、寶曆より文化へかけての渡用人の給料六兩二人扶持より七兩三人扶持に至る記せり、而も其の妻を御新道様とよばせ、熨斗目差替大小運用意すべき定なり。其の收入と活計の度とふさはねとかくの如し。こは渡り用人の事なれど時代にても大差はなきなり。

さはれ與臧は性廉潔にして、あへて民庶を侵さねば、餘れる貯もなかりしを、俄に主家の祿に離れぬれば、財源全く枯れて困厄一時にせまりぬ。

凡高尙なる生活は、其の志想を高むると同じく、あはれ貧しく足らぬ浪家の生立は、無垢清淨なる幼き者の心をも狭くひがみたるねたみ深きいと卑しき者とはなしけり。

されど生れ得たる文學の才は困難窮厄一切の障碍の外に生ひたちて遂にこよなき迄に至りぬ。

翁の曾祖父與也の號を信清軒の翁といひ、深く思を敷島の道によせ、春の朝秋の夕、花の席に樂を歌ひ、月の前に愛をのべし事は前にもあるしつ。祖父にも又佛恩をのべし咏歌あり、父與臧も武士の猛き中にも雅の心ありて、弓矢とる暇に俳諧の發句に心をこめ、折にふれ時につけて思を十七文字にのぶる事を好みたり。安永三年初春兵法發會の日に、シメといふを句毎の終にあきてよめるが有り。

新玉のとし／＼わかし老のうめ。〔燕石種詩〕

よし巧拙は言はずもあれ、翁は血脈にちきて已に無下の俗人たるまじきを、庭の效は其の才を助けなしてます／＼あやしきものはなしけり。

初より美しき庭のなでしこの培ツツミのよきに更に美しくなりまさりけり。

母吉尾氏幼きより文よむことを好み、古き冊子物語、今様なる草雙紙淨瑠璃本などよみうかべしが多かりければ、雨の日の徒然ツツミには、裁縫の傍に兄弟を築へて『鉢かつぎ』『鹽屋文正の物語』さては『國性爺合戦』『手習鑑』のちかしき節など物語り、添寝の床の語草には金平の勇力、兎の大手柄、さては鼠の嫁入、桃太郎など種々の昔語をとりいでければ、翁いたく喜び聞きて、やうく冊子物語を好みそめつ。

されば朝に夕に、日に夜に、暇だにあるときは、母の膝につきまつはりて、書をひらきて繪解を請ふ程に、いつか字母四十七字をさとりえて、六、七の比よりして母の部屋に納めたる物の本ども探りいで、拾ひ讀するやうなりたり。人々之れに驚きしが奇才は夫のみにあらざりけり。翁の兄二人

一人は左馬太郎とて八ツの兄、今一人は常三郎とて二ツの兄なり

早くより俳諧の師、師竹庵法橋吾山

武州越ヶ谷の人なり、俳諧に妙を得たるを以て法橋に叙せられきとぞ、『物語稱呼』の著者なり

の門に遊びけるが、翁は傍より之れを見ならひて七歳の春、一句をなせり、

翁の初音にねむる座頭かな (少年文庫)

之にぞ父母は呆れはて、學ばでだにかくの如し、あはれよき師もがなと求めける折、八幡宮

一、鳥居の傍黒江町に三井親和の書風を物する筆の師

三井親和は當時の書家なり、最有名にして世の需用一方ならず、筆録ののりすり字を檀草入女帯などに織り出だし、又浴衣手拭其の他の染めき、親和織『親和染』といひて流行せり。

小柴長雄といふがありと聞きければ、やがて其の人の許にかよはせて生ひ行く先をぞ頼みける。かゝりし程に父興誠、ふと病みつきて打ふしけるが、日をふるまゝに重りゆきて、遂に安永四年彌生廿六日、

深光寺墓所には十六日とあれど、隨香の多きに據る。

さき句ふ花に先ちて、風のまに／＼散りうせぬ、年五十一、法名便譽頓覺成正居士、なきからをば小石川茗荷谷深光寺に葬りぬ。

貧しくは暮しけれど、猶柱ある家の雨にも風にも傾かでありけるを、あるじうせにし後の瀧澤家やいかに。のこれる吉尾氏の苦やいかに。わが身一ツだにあるを、九ツなる男、七ツと五ツとになる女子のつきまつはるに、方となるは老たる叔父松澤氏と年わかきうひご左馬太郎とのみ。興誠の弟二人あれど共に縁かるく家貧しければ、心ばかりにて頼とはならず、どにつけかかくにつけて吉尾氏細ぞわづらひける。並々の者ならむには、涙にくづはれてどかくに慰ひぬべきを、かひ／＼しく取り賄ひし男心こそめでたけれど、人々いひはやしけり。

興誠の弟一人は田原氏、四郎左衛門忠興とて深川邊の武家に仕へき。今一人は兼子氏、新左衛門定興とて御船手組同心なり

まづ傳手をさま〜に求めて、今年十七なる左馬太郎を麾下戸田大學頭に仕へしめ、母子濱町なる邸にうつりぬ。是れより子は直次郎興旨と名のりて、勤仕頗るつとめければ、主君邸内の覺めでたく、やう〜へのぼりて用人となりぬ。母は後々の爲にもと身をいたづきて僅なる賃をえ、

吝をはぶきて之れを貯へしかば、や、朝夕に追はれずなりけり。かゝれば翁も又小柴が許を退き、母の家職を助けてかすかに其の日を送りけるが物の本を好む心はやまず、夙におき夜半にいねて、僅なる暇をもて書買の爲に筆耕し、其の代として書籍を借り、讀みと讀みゆく程に、十一二の比に至りて印行の淨瑠璃本の大方はよみはてたり。なほ和漢古今の軍書實録をよめるも多かりけり

初よりして剛愎のさなりし上、流石に頭抑ふべかりし父もうせ、愛には雄心もゆるみ勝なる母のみなるを、愍に和漢の書を涉獵していさゝか文字を知りければ、心いと高うなりて人を人とも思はず、よろづ恣に行へば、母もつひには見放ちてあなまぶどき子や、えこそは人なみ〜の者とはならじなどつぶやきけり、賊になみなみとはならざりけり。深山の奥に炭たく翁、水を被きて鮑とるあま、牛うつ童、里の賤の男、大凡文字を知れる限、老幼男女きそひた〜へし曲亭馬琴翁とぞなれりける。

第二節、武家奉公

翁や、十二三になりぬ。只もあらせがたしとて、とある武家に仕へさせぬ。

幼けれど卑職に安ずべき翁のさならぬば、主人の慥慢甚しきに忍びがたく、このみ月日の照る事かは、五斗米につながられて徒に腰を庸主に屈むること愚なれ、良禽は木を擇びて巢くふといへるを、なとて庸主の下に齷齪せんやとて、屏の壁に

木枯に思ひたちけり神の旅

とかきつけて夜にまぎれて逃れいでけり。柄杓一本笠一蓋、心安さは之れなりけりと出でたちけるが、直に兄よりの追人に捕へられてけり。之れより兄の推舉にて戸田家の徒士となり、祿を兄と共にうくるやうになりけり。

初よりして文學の方には、才鋭き翁なれば、幼きより人を驚かしたると再三のみならず、みづから字母四十七字を知りえたる、十一二にして讀者數百卷に及びたる、七歳にして俳句を物せる事等は已にいひつ、その十歳の初夏また句あり。

門々のあやめも枯れて蟬の聲

といふ。木枯の句は誠に十四歳のなりけり。戸田家に仕ふるに及びて、いよ、思を俳諧にこらし、俳文の作につとめ、十五歳の時「吊鶯の辭」あり元より圓熟の妙あらずと雖もなほ年少の筆として稱へつべし。

櫻庭萱村先生所藏『俳諧古文庫』にあるを引く。

吊鶴辭

馬琴

九十

殿垣まごへる菖葎たる庭あり。何ッともまられず鶯來て巢をくふ。旭さすなる朝ナクナ東に向たる巢の窓に頭たまのさしい
 たし邊の雛をも守りぬる親鳥以上本マの丹情つもりて形生し時々餌を運び是を養ふも日ありてやがて巢を立その雛こゝの小木
 に舎りて初に渺々たる天地を愛す。かしこに小童の徒集りて之を捕へて籠中の鳥こはなせり其母鳥いたく悲ひて庭前に
 さまよふ時をへて此小鳥遂に死したり。嗚呼あはれむべし。麟の爲には春秋行れ渠か爲には予吊するの辭を作りて曰
 「鶯く汝悲死をなげく。汝此辭をきいてたんのせよ。汝は小鳥の一位にして人其徳を稱す。詩にもいふ細腰たる黃鳥丘
 隅に止る。舞は聖徳を以て天位に止る。虫の舞は紫室の詞汝は鳥の舞なるべし。」
 「鶯く。汝春は四方を眼下に見おろし聲の高きを敬ふ。梅は汝が力にして汝は梅の力なり。」
 「鶯く。讀經して佛法をこまゝす。されば緋衣も着べきないかに茶色の毛衣はまた執行の最中なるか。」
 「鶯く。汝は六藝に通ずるものにして徒童が手に今空しき籠かを見る。彼童子をにくまんや。渠も汝を愛する甚しきによつ
 て終に籠中に汝を亡す。顔回が不幸も豈汝といはむや。」
 「鶯く。汝が悲死を嘆く。汝此辭をきいてたんのせよ。」

又からうたを以述古風

麻鷲乍入衣

母鳥去如飛

童子將廢繡

慈嘆獨未歸

立つどなしに年はくれて、こゝには二年三年を送りぬ。その間に博く和漢古今の書を繕き、聖經
 諸子百家の書より源氏狹衣諸隨筆等をも涉獵したり、その中に心にかなる文字を擇ひ、諱を
 興邦、字を子翼とつけ、鳥水と號し、亭々亭々といひ、馬琴といひ狂名をば山梁貫淵といひけり。

曲亭といふ號は此の後寛政の比に至りてつけしなるべし、其の故は翁は精細なる性として苟もわが名號を定めたる者は必ず記
 録にのせざるとなし。天明七年三月書寫、翁の編『俳諧古文庫』列傳の内にて

撰者馬琴者武州江戸産也昔號亭々亭名興邦字子翼又號鳥水好風雅而著俳諧古文庫

とあり。寛政三年出版『二分狂言』の發端にて

茲にてうくわ坊馬琴といふ者あり云々

とあるにても、曲亭と馬琴と其の成立の時を異にせざるや明けし。又こゝにてうくわさあるは後年國史舊雜奇文諸雜書を繕く時
 に用ひたる離宮さく字なり。

或人曰はく翁狂名を曲輪の馬琴といひしが、之れを改めて曲亭馬琴とはなせるなりと。

又或人は「曲馬に乗下て琴を彈す」といふにされりといへり。されど曲亭といひ、馬琴といふ、互に出所を異にして、名け
 し折も異なり。翁は自ら其の名の出所を説きて曰はく、「曲亭は『漢書』陳鴻傳及『大明一統志』に見えたる山の名なり、「巴
 陵曲亭の陽にたのしむ」といふとあり、馬琴は『十訓抄』野相公の句に「才馬卿に非ずして琴をひくともあたは下」とある
 にされりといへり。

此のころ都には先帝後醍醐天皇崩御あり、新帝光格天皇即位ありて天明と改元あり。おほけなき君の御め
 くみには御世は太平なるべきに世の中穩ならず。其の七月江戸に洪水あり、新大橋永代橋之れが
 爲にくづれ、翌年七月又江戸に大震あり。三年の同じ比には信濃なる淺間山やけて其の灰江戸に
 ふりしきりぬ。猶天變地妖はまばくにして火災風難相つぎて起こりき。

翌くる天明四年三月、大城に變あり、新御番佐野政言若年寄田沼意知を城中に傷けり。其の五
 月天下飢饉にて人々如何がはせんと感へるもありしが、君の祿に衣食せる身は思の外に心安く、

要きにつけ十七文字をのへ、驚くにつけ三十一文字をつらねて、するともなく日をくらしぬ。
 其の年八月興旨は其の主下總守忠誠大學頭の子 甲府勤番の支配頭となりしに從ひてかしてに移るべき
 ととなりぬ。孝心深きものなれば、母の此の比は病勝なるを獨殘しおかんは心元なしとて、高井
 家に仕へたる弟興春によるづ母の事たのみきこえて、いでたちけり。之れより後定便毎に江戸甲
 府の消息たえず。興旨母の徒然徒然を慰めんとして甲府へ赴ける道の記一卷かきついで送りき。なほ
 文書中にもなぐさめの言葉多し。母のかへしにもいと喜べる様多く見ゆ。十月廿七日母よりの書
 中に

もはや朝夕にはこまりなく候ま、何も遣し候には及不申事御申越被成い、許し、安堵致し、私にはたべ物不自由なくたべ
 候やう御申被成存上候云云

などあり。十一月廿七日のには

さて又そもと殿御出立の後道中の空腹になきやうと影膳致し其後もそもと様出生の祝には影膳していはゆる甲子にあげ候
 菓子少々ながら遣し候云云

とあるなど、えいはぬ愛情其の間に見えたり。かゝる和氣緩鬱たる間にありては翁の不平も出づ
 るに所なく、勤仕の暇母を慰め其の暇には専ら和漢の書にふけりて、力を學術の蓄積につくしけ
 り。

されど世の中はかくのみ幸ひゆく者にはあらざりけり。あくる年二月の比より母吉尾氏ふと打ふ

して枕やうく重くなりぬ。折柄興春は高井土州に仕へてありけるが、母病にふしぬときくに心
 安からず思ひ、せめては兄歸宅の折までと主家を辭し、濱町に至り、翁や妹等を勵ましたて看病
 怠らざりければ、たえなむとせし玉の緒もからうじてつなぎとめけり。
 其の四月には興旨甲斐よりかへりぬ。再び逢はじと思ひつるに、母も喜び家の者心強く思ひ
 なし、が病はかくても癒えず、水無月の末つかた、夕暮つぐる鐘に誘はれ男魂甲斐くしかりし
 ふうなも、再びさめぬ眠につきぬ。年四十八歳なり。
 父のみまかり玉ひし程はまだ物心をよくも覺えず母の残りてさへおはせしかば、悲しきうちにも
 慰む方はありしを、せめては反哺の鳥にならひて是れよりは身をくだきと思ひし事はた甲斐な
 くなりぬる、かなしくもかなしかりけりと、兄弟相抱いてなげとすべなし。やがて法名海譽知
 覺慧正大姉とつけからをば源光寺なる興滅が傍に葬りぬ。
 吉尾氏名は門子、細川家の家士、吉尾門左衛門の女なりき。早くより父に後れ、叔父松澤權左衛門
 に養はれて、棚倉の侯の邸にありしが、興門其の藩に遊べる比、之れにとつきつ。夫に江戸に從
 ひてはまめやかに舅姑に仕へ、寡となりてよりも身を慎み貧困窮乏の百難を排して幼き子供を人
 となし、十年が程少しもうまず、すべてのさま男兒も耻すべきばかりなりしが、幾年月の心づか
 ひ積りくつて病をなしをなつれば、礎石遂に其の効を奏せざりけり。
 初やもめとなりぬる比は、浪々四五年の後にして子供さへ數多殘されつれば、朝夕のたつきにも

心置かれし程なりし其の中にありても、子等が爲に身の勞を厭はずして業に勵み、樂を行末に求めて約しき年月を経たりければ、黄金二十餘兩、衣類も身の程には過ぎて貯へもてりけるを、興旨遺言にまかせて人々への記念とはなしけり。

『家訓遺録』によるに直次郎即家督興旨へは金拾兩。清次郎即二男興春へは金三兩。佐七郎即翁(佐五郎)外にあれど、いかに何故か七とあり)へも金三兩、おらんお菊へは金三兩づゝに衣類數點、木挽町伯母權即門子の實姉へは金二分、松井内室さて直次郎同僚の妻へ金一分配分したり。又關へやりたる衣類は花色縮緬襦袢小袖一、木目縮緬袴一、緋縮緬小袖一、花色縮緬小袖むく小袖一、黒紗紗綾紋付小袖一、縮紋付無垢小袖一、飛八丈小袖一、羽二重白無垢一、黒緋子帯一筋、花色モウソ帯一筋、縮紋付袴一、縮茶縮緬紋付單物一。菊へのは緋桔梗襦袢模樣小袖一、縮茶縮緬模樣小袖一、壽色龍紋袴一、緋縮緬一、反裏縮緬共添、小紋縮紋付小袖一、羽二重白無垢一、黒手モウソ帯一筋、丹後縮袴一、等なり。貧家にしては多すぎる程なり。此の他にも懸念なるものなきに送りたるが五六點あり。

兄弟多き中にもわけて掌の珠とめであつた身として、翁の悲はいふばかりなく、氣も心も亂れはてぬるやうなりけり。何時迄生きむとてか斯くはかなき世の業を勉めけん、我れながらいと恐しかりき、いでさらば是れよりは心のまゝに世を経なんど身をもちくづして行を慎しませ、兄の諭にも従はねば遂に主家を逐はれて流浪の身となりぬ。されど母の遺金三兩は永き遊興の費には足らざりけり。なきが意見の總仕舞といふ俚諺にもれで、せん方なしに又山の手なるとある武家に仕へ、樂しからぬ年をすくしたり。

第三節 流浪

天明も六年となり、翁は二十歳となりぬ。

今年干支丙午にして元日さへ同じ干支なりければ、事やあらむと人々思ひし程に、午の時より日蝕あり、未に至りて皆虧となり、あら玉の年たちかへる初より世の中闇となりければ、理を知らぬ人は騒ぎ惑ふ事大方ならず。其の夜より風烈しく、出火日毎に三、四に及び、人々其の堵に安んぜず。又此の比より雷にもあらぬ響天にありて、或は東、或は西、晝夜四方を定めずきこゆるを、こは天鼓とて凶作の兆なりなどいひのゝしる程に、其の三月十五日氣候遽に寒冷にして大雪櫻花の上にふりけり、あるまじき事なれば、今や天地のくつがへるとばかり恐れあへりけり、之れよりして風ふく事ますます烈しく、出火彌々志ばくも也。四月半に至りてや、穩になりぬれば、人々といきつく程に、今度は又五月半より霖雨少しの晴間なく、七月十二日夜より大雨盆を傾くるより烈しく、十四日より十六日に至りて近代稀なる大洪水ありけり。本所深川いへば更なり、下谷淺草外神田まで浸されぬ所まれなり。只呆れにあきれたる心も未だ靜まらぬ八月四日の曉に兄興春みまかりぬ、享年二十二歳なり。

興春諱は廣厚、字は仁藝、幼字常三郎、興城の四郎なり。四十二の二ツ子なりければ幼にして鈴木氏を冒しぬ。

母吉尾氏の姉も木挽町柳生家の巨鈴木三太夫半後に嫁しぬ。興春即此の氏を冒しなり。

十四歳の時高田氏をつぎ、清次郎といひしが、十八才にして摩下詩田家に仕へき。天明四年二十

歳の時故ありて養家を辭し、蒔田家を退き、更に高井土佐守に仕ふ。兄甲府に赴くに及びて母の許に至りて徒然を慰め、病を看どりたり。後水谷信濃守に仕へて赤坂にあり、稱を初右衛門と改めたり。性至孝機才に富めり。狂歌は蜀山の流をくみて縁原近勝といひ、俳諧は師竹庵吾山の門に遊びて、初己克亭好々といひ

好々庵己克といふ其生年西なればなり

後好々を改めて鶏忠といひき。翁とは其の年二歳の差なれば互に相勵ましたる他山の石なりけり。

東岡舎羅文興旨 俳名 亭々亭馬琴 翁當時 俳名の之れをかなしめる俳文のせて『俳諧古文庫』にあり。友愛の情紙面にあふれたり。

打ちつゝく家のなやみに涙せきあへぬのみならず。世の中にも安からぬ事多かりけり。年々の飢饉凶作に天變地妖さへ頻なりければ、世の中やうく騒ぎ立ちなんとせし程、九月八日といふに將軍家薨去あり、やがて一橋治濟の御子の西丸にちはしけるが名は 西丸に入り玉ひぬ。思ひもまうけぬ事とて、人々忙然としてある程に年もくれぬ。

今年こそ將軍宣下、さては萬のめでたき事にあはめと喜びしを、年の始より番頭狼藉の事ありて又もや眉うちひそむるうち、米價やうく貴くなりゆきて、五月大坂に暴民起りて富家米商をかすめ、近國之れが爲に動搖せり。

流石に國遠ければ川向なる火と思ひしに、其の月の末つかた江戸にも起りて狂暴諸國のにも増り、且出沒自在にして官の追捕も空しく騷擾をますのみなれば、市民安き心もなく、慶安の由井正雪再び生れたるらんなどのしりあへり。僅なれども君祿をはむ身は、かゝる中にも飢寒もせずなか／＼に米價貴き爲に利をえければ今更のやうに君のめぐみの思ひまられて、勤仕に心を用ひたりけり。

『夷國小説』第十一集に翁當時の事を記して曰はく

予はこの市中の賑離にあはず。當時某侯に仕へて切米の外月俸わづかに三口をうけたり。其月俸の内三斗の米を月々に售る毎に價のます事漸々にして五六月に至りては虫の巢にてわ／＼りたる陳米をのみわたされしにその芝米三斗の價金壹兩三分になりたり。されば出入さ唱ふる町人毎月俸のわたる日に未明より宿所へ来て御扶持米を拂はせ給はゞ某に給はり候へ。餘人より價よく申受候はんなどいふもの多くて果は是彼せりあひつゝ言すまひを起すもありけり。僅の月俸をすらくの如し。大騒の人々はさぞ有りぬべき事ながらよき夢は又覺むるも早きや。是によりて永く富みたりといふ人をも見ざりき。云々

さて喉元過ぐれば熱を忘るゝの謠は誤らざりけり。學才ありて高慢なる青年のいかで永く此の卑職に安ずべき。よき伯樂もがなと求むれどさる眼あるものなければ、忽仕へ忽去り、こゝに三月かして一月仕へめぐりて志を得ず、遂に思を仕官に絶ち、嘗ていさゝか醫書を讀めりしを以ていざさらば醫藥の奥を極めて濟世の大仁をなすべしとて、當時小川町に住める幕府の御醫師山本宗洪

山本宗洪は小石川養生所御醫師職二百石なり。

といへるに身をよせて、名を宗仙とよばれき。兄興春其の立志を慕して一句をもて祝して曰はく百草の頭かずなりふきのとう

然るに新主人宗洪は痛く俳諧を好みて俳書あまたもてりければ、翁は暇をぬすみて之れをよみ只こなたのみ耽りて心を方技に用ひざれば、幾何もなくてこゝをも追はれき。

之れより東奔西走、或は龜田、鵬齋の従僕となりて儒道を修めんとし、或は石川五老をとひて狂歌を學ばんとつとめ、又は橋千蔭の門を叩きて其の書牒をえんとしたれど自尊にしてみづからはからぬ性なれば一も果たすと能はず。深川は生れたる所とて流石に舊故多ければとて、仲町のほとりにさゝやかなる家をかゝりて書買の爲に筆耕してかすかなる月日を送りけり。

流瀆の間芝の香肆甘泉堂へも寄寓せしものありと只、關根翁はいはれたりき。又柴野彦助の門に遊びたりきとの説「戯作者瑣集」に見えたり。

かく事まげく而も貧しく苦しめる間にありて翁の文學上の最初の事業として『俳諧古文庫』といふ書編せられたり。こは其の師々竹庵を初め兄羅文、難忠其の他同門五七輩と自分との作る俳文をあつめて上下二巻となせるなりけり。當時出版結構ありし如くなれど、資なき爲か果たさず。後に其の文の拙なりしを耻ぢ深く篋底に秘めおきたりけり。是れ明七年春彌生、翁二十一歳の時なり。

資料 彌生先生曰はく此の書又洒落本『猫ぶやらし』を出版す。實に翁著述三百種中の處女巻たり。作者の名は正徳馬鹿輔

とありて、曲亭馬琴門人くわいらいしこの序あれど、翁の作たるや疑なし。後年翁の讀本行はれて曲亭馬琴の名四海のうちに轟き、最真面目なる勸懲作家として知らるゝに及びて深く此の作ありしを悔い、書肆を探りて之れを買入れ題さなして物議をふせきつとぞ、とて翁の著述たる証として

一くわいらいしは翁の題名たる事

二序の書牒と本文のと共に同年翁自書寫せし『俳諧古文庫』の書牒と同一事

三他に馬鹿輔の作なければ題名の作たるべき事

四翁少時には淫靡の所行あり。くわいらいしは翁の著述に彈かぢらぬさまなりし事

五本文の場所等に翁の生地深川(一)なる事

六他人ならば名もなき曲亭馬琴門人くわいらいしに序を頼むべきやうなき事

等を擧げて論せられたり。尙翁の處女作、即天明の作なりとの證としては

一叙に未の初春とある事

次の未は寛正十一年にて樂翁侯執政中にて洒落本の禁厳しき時あれば此時にはあらじとの事

二寛正に京傳聞せられしより翁も恐れて行なつしめれば、寛正後かゝる著書あるべきやうなき事

三天明七年の『俳諧古文庫』の文字と此の書の文字と習熟の度殆ど相若けりとの事

等を擧げられたり。されど疑はしきか多ければとらず。まづ此の書の出版天明七年ならじと思はるゝふしは

一天明七年には翁の名號に曲亭といふ者なし(本誌本傳參照)門人くわいらいしは翁も寛政五年版増補『伊賀越物語』に初めて見ゆ。

二本書の蓋工に子嬰といふあり。寛政十一年版『世談口語屋離形』の蓋をかけるも同人なり蓋を托する事前後僅に二番にし

て其の間十二年を隔てんとあるまじき事なれば此の書も寛政十一年比にはあらず。

三寛政に洒落本禁せられたり雖も尙竊には著作發見せる多かりしやうなり。寛政十三年(改元享和)板の一九作『野真の玉子』といふを見しに、男色の事なける洒落本にして、体裁すべて『猫おやうし』と同一なり。

四其の名いまだ世に知られぬ當時にありては曲亭馬琴の名何にかせん。まして其の門人の序文著書板元にとりて利する所なきなり。こは寛政後緒の名聲轟ける折のなるべし。

五其の讀本は皆勸懲の意を主せられ文化前の草紙類には淫靡なるが多し。寛政後には作あるべくもあらずといはれが。

六『八六傳』『回外刺筆』『物之本江戸作者部類』(こは曲亭詩の編なり)笠村先生といはれ我れもまが思へり、其の他によれば、新の處女作は寛政三年出版の『二分狂言』たりとの事實らしく覺ゆ。

等なり。且や斷じて翁の作なりとするも大早計にはあらじか。寛政の半より曲亭馬琴の名日を追うて高かりければ、營利を計りてひそかに其の名を冒ししもありけり。されば享和四年(改元文化)出版『敵打二人長兵衛』の序の末に正めい簗笠隠居と押印せるあり。かゝれば曲亭馬琴著とあらんとも直には信ずべからぬを、之れを只門人の(よし誠は其の人なりとも)名にて一片の叙を添へしのみなれば、之れを翁の作といふは斷定に急なりとやいはん。

第三章 志のゝめ

第一節 山東庵京傳

元寛假武の後太平二百年の化、著く文學の上にはあらはれ、寛政より天保の世に極めてはやかに

飾りなされたり。そを飾れる文人詞客のうち錚々たりしものは、山東庵京傳なり。

春町去り明誠堂老い歸橋已に筆を收め三和全交も家職にかられて暇あらざりし時に當たり、京傳年紀正に三十、文思やうやく熟し筆硯方に盛なる上、家には賢妻老僕ありて内顧の憂なく且世評彌高きに勝はれて、益々奇趣をこらし妙文を綴りて出版年々にまじゆきければ職作の名譽は殆ど京傳一人に歸しぬ。

是時にあたり曲亭馬琴は流浪幾年志を得ず、深川仲町の裏屋にかくれ居しが、京傳の名聲のかまびすしきをききて思へらく、我れ貧しき家に生れながら自ら標致すること高く人の奴となるを甘ぜざれば官に仕ふる事能はず。一圃の土なく一掃の錢なければ耕すに由なく商ふに資なし。只幼きより心を文學にとりめ書を誦すると幾千百卷、殊に小説野史戯曲俳の書はうかひふ所少からず、玉を秘篋に藏めむこそ可惜しけれ。いでやさる人の許に遊びて高名の下にわが名をなさばやと。

第二節 處女作

寛政二年秋一日翁酒一樽を東脩となし銀座二丁目なる山東庵をあとづれ、切りに門人たらむを請ひぬ。京傳戀に著作の家業とすまじき物なる由をのべ、さていふやう、大凡冊子物語は世の好事の輩、人の作れるをよく讀みてさて己が才もて倣ふべきのみ、師として教へ弟子となり習ふべき事もなし、ましてや學識なく才幹に乏しき身の何を持みてか人の師とは呼ばれん。されば同好の士見る所ありて訪ひ玉ひしをむげに辭みかへさんは禮にもかけ本意にもあらぬを、とかく友と

も見玉ひて暇ある折々は音づれて、もし作れる文などはさば示し玉へ、御志のうれしきに殊に深川よりときけば懐しさの増すを今日一日は身の上などかたりくらし玉へなどいひつゝ酒肴を出してもてなし懸なり。さて互にうちくつろぎて其昔を語らふ程に、あのれは淨心寺の傍なる武家に生れ種々の不幸にあひ濱町芝赤坂の邊にさまよひ、つひに昔こひしくて今の所にかへりぬと翁いふ、さては淨心寺の邊とや、我れは木場町なる商家に生れたれば相距る事僅に一二町、年さへ多くもたがはねば竹馬讀書の友たるべかりしを、知らずくして共に他所にうつり二十餘年を経て相見しこそ、かへすくも奇縁なりけれど京傳いたく喜びて棄てがたき思あり。翁も其の懸なる志に感じまばく山東庵をたゞきて方につきて語らひければ、つひには互に兄弟の思をなしけり。

此の冬深川永代寺にて京都大佛内辨財天の開扉あり、群集を誘ふ興行多き中に、新に京より下れる壬生狂言といふもの専ら行はれて老若男女先を争ひて見ぬを耻づる有様なりければ、いでや此機を誤たず時好に投じて世評を得んと趣を此の狂言によせて『二十日餘 盡用而二分狂言』といふ黄表紙二冊をつくりて閱を京傳にこふ、京傳之れを見ていたく稱し、我れに賜へ、序を書きて書買に與へ、むが怠の責を塞がんとて、戯號を大榮山人と命じつ。こは其の僑居永代寺の傍にありて同寺の山號大榮山といへばなりけり。

心にもあらぬ名號を署せんこと快からず思ひながら、吾が名を揚げんたよりには其の人の名のあ

らではと思へば流石にすげなくもいなみかた、翌春芝神明前和泉屋市兵衛より出版の同書には京傳の序はなかりしが名は京傳門人大榮山人と記したりけり。

ねらひしは幸にもよく中たりけり。虎の尾につく狐ならねど、昇る旭の京傳がをしへごといふに入々まづもてはやし、挿畫の名工豊國なるにさへ世評はよきを、殊に壬生狂言の流行は去年より此の春に引つゞきて衰へず、帮間藝妓の輩争ひ學びて酒席の興とせる程なりければ只管其の時にかなへるをぞめで喜びてたゞへける。

學海依田先生の『眼海』には京傳此書を見て驚き歎て今より二三十年をへば世人また老夫を脱つて云々といへりといふたれまこと左程巧なるものにはあらず。文の生硬なるは更にもいはず。其趣向支離滅裂其筋道紛亂雜痴人の夢さば、る物にやど究しき程。其外題の如き『戀飛脚大和往來』の一句をとりたれまこと之に關せる本文はなく只二分壬生と通はせたるのみ。さる類のよく行はれたるを見れば當時の著作は甚難からざりしなり。

世に此書の署名を匿して翁を京傳の門人とせし京傳已に著書の數ふべからぬを知りて辭したる事はつとめて翁の身分を卑しくせんとしたる京山の『蜘蛛の糸巻』に徴してすら明なり。且翁の性質人の門下に屈して甘するものにあらず。但此署名につきては箕村慶庵先生は一時の戯につけたるなりと説かるれど(雜誌『史海』参照)思ふに高名をかりてわが名をなさんの方便に出でたるならんか。翁晩年の頑直に似ず、當時の行爲には機智にさめる事多し。

世には又後年曲亭馬琴の名聲やうく高くなりしより京傳門人たりし事を人に知られんを耻ぢ廣く書買を扱ひて此書を求め香烟さなしめ傳ふれど甚いぶ。京傳門人の署名あるは『花春風道行』といふ物もある由『蜘蛛の糸巻』にいへり。但此書は大方誤ならん。且此書ありし事は自著『物之本江戸作者部類』『聲傳毛記』『八大傳』『回外剩筆』其他の著作に記せり。又墨川亭壁磨著『戯作者叢書』活東千の『神史六家撰』等に翁の直話なりて記せり。されば左迄苦心して此書を繕く

べき必要を見出でぬなり。

當時書目的は大小説家にはあらで俳諧師たりし如し。此書の開巻まづ筆を芭蕉の句に起して「物言へば辱寒し秋の風」とは實に爾り云云と序文の始に、き本文には

註にて、うぐわ坊馬琴といふ者あり。世は桑の杖折やすきないさひ風の身は竹密に似たる哉と行脚の志願にして芭蕉庵の舊跡を慕ひ深川八幡へ参詣して園女櫻も今は名のみ昔をまのびてそこを眺め歩行き猶俳道な所らむと云云

此の著少しく行はれければ、何とはなしにうちまされて只管文筆にふけらんとするを京傳論していふやう、著述は元好事の業にて昔より今に至るまでもて生業とせしものなし、其の日くを追はれては學識文才も用ふるに所なかるべければ本業を定めさて著述まれ何まれして慰み玉といふと懇なれば、翁もさこそ思ひなりてさて何をか業とはせん、仕官は快からぬ所、農耕商賈はたえうせず聊書をばよみたれど獨學の事なれば人の師となりて經義道徳を説かんも耻かし、只易經は幼きより好み讀みて少しく其の旨を悟り、卜筮占考の方書も軒端をうかへり、中たるも八卦中たらずば其の時職をかへんのみ、是なりとどうなづきて思ふ由を京傳につげ、神奈川にはまゐるべもあればまばしはそこにて世を送らんとて、出でたちたり。

天地乾坤掌中にありと自許せる者も、猶其の身にかゝるとは知り難しとや。たづね來し其の人は他にうつりつとてあらねば、頼む木の雨もりし心地せしが、幸にもこゝは東海道のうまやぢにて人のゆきかひまげく殊に青樓軒をならべたれば迷ふまじきに迷ひ、疑ふまじきに疑ふ嫖客遊女

の輩判断を請ふ者日に多し。思の外の事に止まる事五七十日に及びしが、年わかき者かゝる界に獨くらせば如何なる事の起こりけん、やがてはふくの様に江戸にかへりぬ。

まつ人もなき裏屋なれど、流石にわが宿と思へば道の急がれて晝過ぐる比至りつきぬ。

思ひきや、いぬる九月四日の夜津浪はげしく寄せたりとて家こそは初のままに殘れ、壁落ち席朽ちて僅ありし家財調度は影もなく、隣れる家々も大方は同じさまなりけり。見る目も凄じくて龍の宮よりかへりつる浦島の子の昔覺えて、かゝらんと知らましかばちどの貯は残すべかりしを悔ゆれど甲斐なし。折柄兄臺右衛門（直次郎與旨の後の名なり。主の諱を避けて改む。）は戸田家を辭し、新主君山口勘兵衛直良に従ひて御城代引渡の爲大坂にあれば行きて謀らふべき術もなし。今は全く足なき蟹の如しとて山東庵をどひて嘆きければ、わが方にも圖らぬ珍事ありて慰み兼ねし折なればまばし留まりて雜事を助け玉へといはるゝにいと嬉しく、今年をば京傳の許に暮しぬ。

第三節 出版法

あらしの後の月影さやかに、雪のつとめてひかけ麗なるたさへ、慶元に干戈やみてより東照公専ら心を文教によせ給ひ常憲公はた獎學の政にいそしみ給ひければ、世はやうく文筆を以て太平の餘澤を樂しむ者多く、出版年々に彌まし來ぬるは殊更に言ふべくもあらず。

されば其につきての法令も屢々出で、制禁又嚴なりけれど、志士國を憂ふる餘り筆を走らして忌

諱にふれ、愚夫まらざり、痴態を記して罰せらるゝ者少からず、まして人の利につくは蟻の甘きを加ふが如く、鐵の磁石に従ふに似て、法いづれば法をくわり禁發せらるれば禁をぬけ、或は異説を布きて世を惑はし、或は淫猥を舒べて俗を亂り、以て營利を謀る者多し。

寛文六年兵學家浪士山鹿甚吾左衛門高裕、『聖教要録』を著して痛く朱子派を嘲りたる爲、配流十年に處せられたり。

延寶元年五月には令を板木師書買に下して、官の事は勿論、諸人の妨となるべきこと、其の他奇怪の事を上木せば見付次第吟味の上殿刑に行ふべしといひ、猶都て出板は兩番所兩町等行所也の指圖を請ふべしと定められたり。

其の後天和二年三月浪士筑紫國右衛門といふ者奇怪の流言をなし、無稽の處方を傳へたりとて、江戸中引渡の上斬罪に處せられたり。

此事元祿七年三月十一日の條にもあり。孰是孰非は知らずと雖一方は誤なるべし。耻夏内藤先生『徳川十五代史』による。貞享元年十一月又令して
一町中ニテムサトシタル小歌流行候事勿論當座ノカハリタル事致板行賣候者有之候家主致吟味何方ニテモ左様ノ者一切板行仕間敷候尤辻橋ニテ賣候者有之候ハ、其町ニテ相改捕へ候テ番所へ可申來候穿鑿ノ上賣候者ハ不及申板行致候者急度可申付候近日改ニ相廻シ候間旨相心得ベキ者也此令文も同十五代史に元祿十一一年二月二十二日の條にあり。

といひて異説の流言を禁ぜられたり。されど違法の者はありて元祿七年左の令あり。

- 一書物作り候者 本町一丁目 平 三 郎
 - 一板行仕り候者 通油町 甚 九 郎
 - 一書物賣り候者 通旅籠町 三 左 衛 門
 - 一板木賣り候者 神田鍋町 仁 兵 衛
- 右之者共頃傾城町之噂其外草摺引と申ス書物作り候段不届ニ付四人共半舍被仰付之書物并板木者奉行所へ取上之

元祿七年戊辰月廿三日

かくて同じき十三年新に書物問屋繪雙紙問屋の組合を設け、月行事を定め、新板の書籍類は相互に検査し、猶舊板の院本、番付赤本の類も、檢閱の印をつくべきに定められたり。

同十六年二月又令して當世の事を小歌に作り、又は板行して賣る事を禁じ、又堺町木挽町の芝居にても近代の事をなぞらへ作るを禁ぜられたり。是は此の比亦穂浪士復讐の事あり、人々争ひて此れに關したる流言などしたりし故なり。

さても猶密には法を犯すものありければ、享保九年令あり禁制ますり、嚴になりぬ。

一自今新板書物之儀儒書佛書神書醫書歌書都而書物類其筋一通之事者格別、猥成儀異説等を取交へ作出候儀堅可爲無用事

一只今迄有來候板行之内好色本之類は風俗之爲不宜儀に候間段々相改絶可仕事
 一人々之家系先祖の事などを彼是相違の儀共新作之書物に書顯し世上致流布候儀有之候自今御
 停止に候若右之類有之子孫より出訴候に於ては急度御吟味可有之筈に候事
 一何書物によらず此以後新版之物作者并に板元之實名與書に爲致可申事
 一權現様之御儀者勿論總而御當家之御事版行書本自今無用可仕候無據子細有之者奉行所へ訴出
 差圖を請可申候事

右之趣を以て自今新作之書物出候共遂吟味可致商賣候若右定に背候者有之者奉行所へ訴出候數年
 を經相知候者其版元問屋共急度可申付候依仲間致吟味違犯無之様相心得候已上
 享保七寅年

十一月二十一日

山中出雲守
 大岡越前守

之れより法を犯すもの稍々とだえしが、寶曆八年淺草の講談師馬島文耕、不稽の説を寫本として
 世に布きたるを以て獄門に處せられたり。
 寛政元年石部琴好の著『黑白水鏡』は佐野善左衛門政言宿怨ありて田沼山城守意知を殿中に傷け
 たる趣を記したれば、公邊の内秘を暴露せりとて、著者は江戸拂を命ぜられ、書工政演過料若干
 を科せられたり。

元祿のむかし、京師に西鶴輩あり。遊蕩の書を著して世に用ひられしが、其の風又江戸にうつり

て明和中丹波屋利兵衛洒落本『遊子放言』を綴りて淫猥の筆を弄せしより、其の流行甚しく、蓬萊
 山人、唐來三和相ついで起こり、京傳、萬象亭等に至り、淫風漸く盛なりしが白河侯老中となりて
 より法規大に正しく制禁また嚴しかりければ、是等淫猥の書は漸く將に其の跡を絶たんとせり。
 されば嫖客遊子は竊におきたらぬ思をなして、せめては好著一二編もがなと望みあへり。利にさ
 とき書買萬屋重三郎は此の機あくべからずとて切に京傳をそのかし、遂に『青樓畫の世界錦選
 裏』『仕掛文庫』『娼妓絹飾』の三書を綴らせ、之れに教訓讀本と冠らして寛政三年春三月賣り出
 だしぬ。其の書の趣向姓氏地名等は鎌倉の事としたれど誠は其比の風俗をうつし吉原深川の青樓
 の事を京傳の例の妙筆もて綴りなしたるなれば、粹客通士と稱ふる者よみてめで喜ばぬはなく、
 流石洒落本起りて以來第一たり。

是等の事世に聞こえ渡りければ其六月町奉行初鹿野河内守關係の輩を召いだし種々糾問あり。利
 に迷ひて禁令を犯し剩へ教訓讀本と冠して上を欺き奉れる罪輕からずとて處罰せられたり。
 翁は此事いまだ起らぬ程神奈川に至り、そこにまばしを暮らしければ江戸にかゝる事ありつとは
 まらず、家財を失ひてせん方なきに憐を京傳に求めけるを、よき折柄なりとて其の家にとめられ
 何くれの雜事とりまかなひけり。

初冬に至りてぞかくして此の咎は解かれける。
 京傳性老實なりければ、痛く此の度の過を悔い、書買の求たどへいかに強くとも、我がとる所堅

くして筆を取らずばかゝる事もあらざりけんを、先には人の爲に挿畫を物して罪せられ、今又僅なる利に迷ひて禁を犯し、こそ我れながらちどましかりけれ。いでや今よりは筆硯を洗ひ、几卓を拭ひ、せめては婦幼をだに教へさとして再度の耻を雪がんと思ひ定めたり。

鮎史情話こそ京傳の得意なれど、教訓の書には筆なれず、日比遲筆なる上此比の疲勞もいまだいえず。殊に年内餘す所むづかに七旬のみなれば數多の著述かなふべくもあらず。

書肆等其の苦を知れども、各々利を思ふ心より先を争ひとひ來りて明春出板の稿本を求めて、なりがたき由、再び三度辭めども猶さとりも請ふ事切なり。流石に從來の交誼もありて一家に與へ、一家に辭まんともえせず、竊に翁をかたらひて代作せさせ辛くして其の數に充てけり。

翌春出板京傳が作四種の内『龍宮燈鉢之木』(二冊物葛重板、重政書趣向は京傳、文は馬琴代作)『實語教幼稚講釋』(三冊物同書、趣向書入共馬琴代作なり)など代作なれば馬琴の名を著さず書買へも秘しければ是を知るもの稀なり(當稿は京傳自ら書きたり) (『作者部類』の本文)

初より鄭重懇切なる京傳の性なるをかゝるとありければもてなしいやあつく、是れより食客をもてまらず、萬のかたらしひ敵とはしけり。

翁も此の恩に感じ、其の爲人を慕ひなるにつけ、京傳その放蕩遊逸なりしを悔い、自ら戒むるを見て我れも昨日迄の非を知りぬと之れより行を改めて足を淨きたる里にふまず、心を飽なる花によせず、まめやかに身をもてなしけり。

『曲亭雜記』に載せたる「吾佛記」の一節に、解不肯と雖年二十五の時より志を改めて行狀を慎みつつ云々あり。解とは此の後に定めたる實名なり。

第四節 葛屋重三郎

日本橋通油町に住みし耕書堂葛屋重三郎といふ書買は姓喜多川、名は柯理、本姓丸山氏、狂名を葛の唐丸といへり。初新吉原五十間道とかいふにありて細見といふ小本隠けりしが、天明の比今の所に丸屋といふ地本問屋の見世庫奥庫のあきたるありしを購ひえてうつり住みぬ。頗る世才に富みて俠氣さへありければ文才ある青年の遊のためなどに身を過り進みもかね退きもえせで路の傍に迷はんとせるなど救ひとり、家に養ひて其所を得させたるが多く、その人の世に名高くなりぬるはた少からざりけり。

順才機智古今に比なく狂歌としいへば必ず其名の伴はれて田老賤婦にまで知られたる蜀山人太田南畝も誠は此の葛庵に生ひたちしなりといふ。(?) 卓識時流に阿らず、筆を俳優劇場以外にたて悠に流風俗を寫して浮世繪に一新面目を開きたる歌麿も此の家に人となりて喜多川の氏をさへをかしたり。此の他文人墨客いへば更なり、畫家彫工筆耕等此庇により名をなせる者いと多く耕書堂はた是等の人によりて著名の士に交誼多く其の名いやまじに高くきこえければ従ひて佳作多くこゝより出で、その行はるゝとも他にこえたり。

此の重三郎かの京傳一件にて上にもいへる如く咎を蒙りけれども深くは畏れず、猶稿本を高名の

士に請ひえて出版初にもいやまじければ、店もやうやうに賑ひまじけり。時に重三郎思ふやう、我れ貧しきに起こりて書林も多きにかく迄になれる事、元天運と雖もかつて養へりし人々の今の世にもてはやさるゝが故なめり、されば猶一人二人を得て後の幸となさまほしと志す程に、翁の山東庵にかゝり居る由殊に此の春行はれたる草紙『二分狂言』の作者太榮山人といふ者の由さへ聞こまければ、いかでさる者をこそと暮はしく覺えて、一日山東庵をどひて家のおとな過ありて出だしつれば店の事とかくに付けて足らぬ勝なり、あはれ御家なる若人さる方の才ありときけばまばしだに貸し給ふべくやと請ひ求むると懇なり。京傳やがて由を翁に告げて其の意をどへり。人の奴となりて隨使に従はんは、翁の性として喜ばぬ所なれど、つらくに思ひ見れば、さ、つれなくのみもてなすべくもあらず、京傳とは好む所同じく代作の勞さへとりたれば心もかるべくもあらねど、家の人々にいふせく思はれんも口惜しと思へりし上、萬屋は名たゝる奮買にて、心さまも賤しからずと聞ければとて、いつかは事の便にもなりなんをたのみにて、心を慮うして腰をかゝめ、耳を掩ひて辭をひくうし、商賈萬屋重三郎を主人とはなしけり。是れより佐五郎を改めて佐吉とぞ呼ばれける。翁是まで見る所の小説雜著少なからざりしが流石にこゝには猶めづらしき物あまたあれば、なりはひの暇には之をよみて見ぬ友達とかたらしめて、思はずして笑壺に入るとありけり。

京山著『蜘蛛の糸巻』に(上巻)とて季公中『花の春風道行』全三冊(但一冊五枚つ)春題(後に北窓)並にて萬屋出版

馬琴自序に京傳門人さあり。此双紙大に行はれてより年々作ありて活名になりぬ。つたやに三年ばかり季公して云々とあれど此説甚不帯なり『花の春風道行』は恐らくは寛政十二年山口忠の發兌『花見話風塵談』の誤にや。さらば豊國の畫にて時も書肆も違へり。又春明齋は寛政六年發兌の『福壽海無量品玉』といふ三冊物初なりと死し。京傳門人の署名あるは先にも記し、『二分狂言』の事によ。又季公三年とあるも年期少しあわやうなれどさりとも寛政三年の極冬より五年の早春までと居りたらんが先は之に従へり。猶一考すべし。此書は未だ天淵宮も照覽あれと醫へる程の者なれば大牒におきて寫はなかるべけれと兄京傳の死年をすら誤り記したる程なれば老年時記の先は多かるべし。

寛政五年春初めて曲亭馬琴の名もて草雙紙四種を出だしき。

馬琴の名は已にいひつ。天明の『俳諧古文庫』にも用ひられ、初作『二分狂言』の主人公の名ともせられたり。

曲亭は此種名づけたるにやと覺じ。曲亭は山の名なり『漢書』陳湯傳に巴陵曲亭の陽に築むといへる語あり。又『大明一統志』にもいひたり。

『鼠兒婚禮座劫記』は三冊物、豊國さしをて和泉屋より、『浮世御茶漬十二因縁』は三冊物、春英挿畫にて伊勢屋より、『自花園子食氣物語』は三冊物、『荒山水天狗鼻祖』は一冊物にて共に大和田より發兌したり。此の四書行はれて曲亭といひ馬琴といふ名、やうく世の中にまられたり。同じ春、鶴屋より曲亭馬琴門人傀儡子著の増補『伊賀越物語』といふ書いでたり。是れにぞ驚きたる人もありける。當年初めて世にいでたる曲亭馬琴の早く戯作の門人あるといふおかしき事なりといひあへりけり。

翁平生の高慢に加へて是れまで發兌の二三種思の外に行はれければ抱負自ら大となりて、書買に迫られて心にもあらぬはかなき物を綴る時は、妄に曲亭馬琴の名を用ひず、門人傀儡子（又魁番子に作る。杜甫の句梅齋魁春とあるにどれり。）といふを作りて其の名を署したり。これ其の拙き責を免れ、且は地位の高きを示さんとしてなり。

然るに後に至りては此の名をだに惜みて心にあらぬ文を綴る時は、玉亭光巖、逸竹齋、逸竹齋、逸竹齋などいふ異名を配す事すらありけり。

玉亭といふ由は『作者部類』にあり。又『慶長以來小説家著述目録』に玉亭光巖とあり。著述三四種あり。

こゝにある事三とせ勉むるとまめやかなりければ、萬屋の叔父なる人新吉原にありて引手茶屋をなせるが、痛くめで、いかで吾が家の婿にと誘ふ事まばくなり。初め翁ならましかば辭むまじかりけんを、既に行を改めて淫猥蕪雜を惡みなれる折柄なれば、妓は猶乞丐盜賊の如し、なかさる中に交りて父母の遺跡を汚すべきとて斥けたり。

主家にかゝはるべき事ならぬと流石に恠しからぬ様の見ゆるに心ちかれ且は入夫の約とのひければ由を京傳に告げて萬屋を辭しけり。

或人此事は馬琴を神聖にせんせざる崇拜者が白石の小蛇の故事にならひて作りまうけたるならんといへれど反證なくして一徹に虚偽なりと妄に傳説を煙消せんとするは好ましがらぬわざにも。先是翁四方に流寓せる程一力士あり。翁の林幹肥大なるを見て只管力士たる事すいぬ出給によりてはやがて暮にも入りつべしと説けり。翁答へて角力は人の玩具のみ大丈夫宜しく人を動かすべし。豈人に弄はるゝを甘せんやとて從はざりけり。是事實否確なりとにはあらざりしかる言をなす人

あるにても翁の性行の幾分を察しつべし。

第四章 昇る旭

第一節 いりうと

こゝに九段の下飯田町二丁目の家主に伊勢屋といへるあり、中坂下南側に見にくからぬ見世をかまへて、下駄傘の類を賣りてなりはひとせるが、今の主人はやもめにて會田氏、名は百といひて年若いたる母と二人暮せり。百早くより伊豫大洲侯加藤遠江守殿の母堂に仕へまつり御覺めでたかりけれど、家を繼ぐべき身の何時までかと強ひて暇を申し賜はり、家にかへりて夫を迎へつるは其の廿六七の程なりけり。

父は早くうせてわが手一つにおぼしたてし愛子なれば母のいつくしみは殊に深く、只疾く初孫見せよといひせまりて樂しむ程に、あはれ比翼の契早く破れ連理の誓全からず、幾程もあらずで婿うせにければ家内涙に袖の乾くひまなく泣きあかし泣きくらしして月日を送りぬ。さてもかくてありはつべきにあらず、とく再離して家の内をかためなし又悲をも忘れ玉へと、志る人毎にすゝめけれどせめては一年の喪にだに籠りて亡き人の戀しき跡を吊ひもしつわが心をもやりてんど、いなみ來て今年は早三十路になりぬ。

家の血すぢこそ尊ければ今は早疾かるまじき比なり、まげても從ひ玉へと、母さへ勤めてやまねば猶すげなくは辭みかねて、さらばいかにとも計らひ玉へと僅にうべなひけり。

時に曲亭翁年廿七歳、葛屋にあると三年、著書を行はる。者五六種なりければ何時までか人によりて世をば渡らん、ますらとは荒海も高山も我れとこそ超ゆべけれと思ひなりて、獨立の志切なる折柄なれば此間に煤する人ありて縁直に結ばれ、翁は是れより履商伊勢屋清右衛門の名跡を継ぐ事となりぬ。

依田先生『源海』及是を引用したるらしき諸書には清左衛門とあれど誤なるべし。自記の諸書による。

されどなりはひも多きにいやしきが中に、賤しき此のなりはひこそ誠なりとはしけれと翁の心に快からず人に對してもはぢ言ひけり。

生れ七年四月には家の老母みまかりて憚の關やうくゆるみなりぬれば、元のなりはひをやめ、聊千蔭様を書けば、近きあたりの見を集へて讀書手跡を授け、

當時入門の徒三十四五人より四五十人にも及びたる事ありし由翁の裔孫の直話なり。

又かつて山本氏にかゝり居て宗仙と呼べりし程習ひえつる事とて、ちとばかりの藥を製り醫きて著述の傍に其の日のたつきをぞ助けしる。

此後曲亭著作の草紙に賣藥の廣告あり。家傳神女湯、婦人血之諸病の外藥一包代百圓。精製奇應丸大包代貳朱中包代一匁五。分之は藥種を撰み製方家傳の加減を以てす此故其効恰も神の如し。熊膽丸子くまのお汁を以て丸す多く糊を交へす。一包代五分。婦人つき出妙藥一包六十四文半包三十二文。産後の下り物おりのるにも甚妙なり。

製藥江戸神田明神下同朋町東橋町瀧澤氏

弘所元飯田町中坂下南側四方みそ店向瀧澤氏

取次所大坂心齋橋筋のちもの町河内屋太助

右の如し文は文政中のなれど此比より始めしこ。

さて翁の性として人の後をつがん事つひに快からず思へりければ會田氏をばよき様にいひ計らひて此の程より本姓瀧澤氏とぞ稱へける。

されど淺はかなる女子の心より名分といふ事を知らねば、夫婦主客の地位をかへたると歸るに家なき身となりぬる事、あが氏の配絶をたるとも知らず、放恣初にかはらざりけり。

同じ比より實名をも解と改め、字を瑣吉とつけ著作堂主人、飯臺陳人、其他の號を設け、専ら心を文墨の方に用ひたりけり。

翁の實名は是迄與邦といひしが此種解と改めたり。解は易の雷水解をさるるにや。別に雷水山人の號あり。字或吉は佐吉の文字を改めて瑣吉の事に附會せしならん。其初名けたる時は深き意味なきも後に夫と暗合すべき事實を見出す時は初よりまがくの故をもてかくしたりといふ事誰か上にもある所なり翁の如き自負心高き人には殊にしかありけんかし。

翁文化四年著『三七全傳南柯夢』編後に門人東園冠子の名もて其名號の世所を脱きて馬穿何也。取十訓鈔野相公句、才非馬穿(司馬長卿)彈琴未(能)云云。先生(翁)の事也門人の心にていへば也。管京(蘇)司馬相如才。是以名(解)字(瑣吉)解臺也。郭瑛江風云瑣瑣腹(盤)水母目(眼)。其象(名)於(盤)也。王(吉)所(以)夢(亦)是(長卿)相如(の)事(なり)故(事)也。といへり餘りにさゝのひ過ぎて附會の疑なきにあらねど姑く記す。

第二節 著作

さて世の中ばかり心にまかせぬ物なかりけり。流浪の程は其の日の口に追はれて報なきに著作して好事にふけらんとならず。人の家にありては吾が身にしてわが身ならねば更にいふべくもあらず。翁飯田町にうつりてさて是れよりと思へるはたあだなりけり。肆のなりはひある上、二百戸ばかりの家主たれば、

地主は小林勘平なり。翁の孫女つき現に飯田町貳丁目三十貳番地にありて家主をつとむ。之は當時より引續ける者ぞ。

因にいふ猶伊勢屋には小傳馬町邊に地面二三ヶ所ありきと深光寺僧はいひたり。

思を煉り筆を弄ばんの暇なく、殊に新に入りつる身なれば流石に憚るべきふしもありて、翌くる寛政六年には『福壽海無量品玉』全三冊一種を出だしたるのみ。其のあくる七年の出版も同じく

『昔怪談諷教訓、心學晦莊子』四編摺心學双紙といふも同本なるべし一種のみなり。

是は京傳が當り作なる『心學早染草』の第四編にて

初篇『早染草』京傳作寛政二年發兌にて甚だ行はれたり。其後篇『人間一生胸算用』同作同三年發兌また行はる。其三篇勘

私袋緒の善玉』同作同五年發兌。翁の此作は其四編なり。

二編三編流行の後をうけたれば行はる、事又甚しく其の名忽に高くなりき。

其の名やうく世に知られぬれば、やゝ肩身廣き思ある上、夏の初に姑うせにければ、あつから思ふ事かなひなりて、是れよりつねに賤めりし履商をやめ賣藥と小兒の蒙師との外、専ら著述に従ひけりされば其の翌春發兌の雙紙忽ち五六種の多きに及び、別に中本『高尾船字文』の著

へあるに至れり。

こは是迄の草雙紙は繪組を旨とし文章趣向を次としたれば、むしろ文章に得たる翁には其の力をつくさん所なく、あきたらずのみ覺えたれば、こは讀む事を主と綴りたるなり。されど當時滑稽物流行の折柄といひ挿畫少ければ、婦幼の好にかなはず、僅に江戸にて一百部京坂にて五六十部られたるのみなり。

之れより二三年は筆を中本にとらず。あくる九年春は新作十二種を出だしたり。みな世のもてはやしよき中に『無筆節用似字盡』の如きは翌年京都西陣より金襴純子に書中の文字を織出して多く諸國に出だせるにても其の流行のさま思ひ見るべし、之れよりして翁の名はますますひろく世にきこえて年毎の新作十餘種、行はれずといふもの一つもなし、當時一九三馬いまだ名なく

一九は其生明和二年にして初作は寛政七年なり。其名の知られしは享和中出版の『藤栗毛』よりなり。三馬は其生安永四年にして初作は寛政四年なり。寛政七八年の頃芝全交の名跡をつがみせし程に寛政十年作『俵太平記胸算用』の著ありて火消人足の事ありければ其名忽に世に知られたり。其前はいまだ名なかりしなり。

京傳はた手鎖の事ありて後専ら教訓を旨として淺はかなる物のみ綴りければ、彼れは趣向の盡きにけんと世評初の如くならず、文界は獨翁の物のやうにぞありける。

此の程の著作の殊にとりいでいふべきはた少からず。寛政十年には『似字盡』の後篇『鹿相案文當字揃』三冊を出だせり。之は前編の行はれつる一つの證ともあるべし。十一年間形本アヒガキ(書の種

類につきては後にいふべし）繪本『大江山物語』小冊『鹽梅餘史』をい出す。間形本は此の後三四種の作あり。小冊は是れのみといへり。

此小冊『鹽梅餘史』は落語の書こそきけり。落語の書は別に享和二年草双紙六冊掛懸用双紙のうち「賣切申候落語」といふが有り。なほ發兌の年不詳『花籃』といふ書もある由少年文庫にいへり。但其製本の小本なるは此書のみなり。

同年又『國畫女文章』をつくる。此の類の者は後に『花鳥文素』雅俗要文』新編古狀勘註解』等の著あり。寛政の末『俳諧歳時記』をえらぶ、該博精通せる翁の著なれば俳諧者流いたく之を重じてかゝる書には比なきまで行はれ、再び三度板をかへたり（嘉永中再板明治に至りて又板をうつ）

其の他此の類には『俳諧節用抄』俳諧いろは韻』俳諧早引草』俳諧人物志』古今歌話』等の著あり。

享和元年草双紙『曲亭一風京傳張』の著あり、これは京傳の爲に其の商品をひろめんとて也。なほ別に『山東一風煙管簿』の著ありともいへり。

同年又書買の需辭しがく『繪本復讐録』三冊をつくる、其の著心にあらねば曲亭馬琴の名をあらはすを屑とせず、玉亭と作り名せり。

同じく三年『曲亭傳奇花奴兒』をつくる。からくにの傳奇の趣にならへる中本なり。

同年『簞笠雨談』三冊を出だす。之は去年京攝漫遊の紀行『羈旅漫録』の抜萃なり。

翌文化元年讀本『月水奇縁』五巻を出だす。之よりして翁の妙技特に世にあらはれ、士君子又戯作

の書を玩味するやうになりぬ。小説稗史の書從來は只婦女童幼消閑の具たりしがこゝに至りて一變せりといふべし。

其の所をえつとにはあらねど、其の名多くこゝにいであれば聊當時の書籍の種類をいふべし。

青史經典實學の書は姑く控えていはず、大凡世の弄となるべき文にくさくの類あり。其の名に従ひて形も異なり、形によりて其實も同じからず、今其の一ツ二ツをいへば

横本 初め元祿の比西鶴自笑其碩の輩の作には黒表紙の横本多かりけるが、之をば別に八文字屋物江島屋物など稱へたり、其の後「俳優評判記」など此の形をとり、夫れに擬して作れる種々の評判記など多くは黒表紙の横本なり。

翁の著『八犬傳』巡島記』を殿村篠齋等の評し翁また之に答へたる『大夷評判記』は此種の書なり。

草雙紙（赤本表紙、合巻、青本） 初め享保の比よりしてはかなき雙紙に丹表紙をかけたれば世に之れを赤本といひけり、其の後かふるに黄表紙をもてしければ之れより黄表紙といひけり。折ふしは黒表紙もあれどなほ通じては黄といへり大抵一冊五紙にして大きさは半紙半截の者多し。文化の初より二冊三冊を合本して之れに色摺の表紙をつく、之れより合巻とは稱へけり。是等は皆繪を旨とし文は其の繪解にすぎねば只婦幼を慰むるのみ、正しき雙紙に對して之を草雙紙といひけり。又草といふ文字よりいへりや青本ともよびけり。

讀本 此は草雙紙の繪を旨とせるにむかへて讀むことを主とせればかくいふなり。大方半紙本に

して一冊二十紙より三十紙に至り繪は冊毎に二三紙あるのみ。されば翁の如き奇趣妙文の作者にはかゝる者ならぬば其の筆を恣にする所なきなり。翁の讀本に名を博したるは其の學其の筆の讀本の性質とよく相かなへればなりけり。

讀本と草雙紙との區別は主とする所異なり、外形異なる外、なほ一ツの異なる所あり、それは其の趣向大體におきて一は人情やうの事多く、一は歴史やうの事多し芝居にていふ世話物、時代物とやうの區別あるなり。

小本　こも讀むことを主とせる者なり。半紙半截の製本にて一冊二三十紙、口番といふもの二枚ばかりあり、其のたるす所遊里淫猥の事のみなれば洒落本と稱へて識者は之れを排斥せれど、遊蕩冶郎之を以て無上の樂となせば行はるゝ事他の者にまされり。寛政の初め令ありて嚴禁せられつれどなほ竊には行はれて文化文政の比までもあり。なほこんやく本、油揚本、豆本、等大きさによりて名を異にするあり、共に洒落本なり。

翁の著には只落語『鹽梅餘史』『登册あるのみ。』

中本　半紙本と小本との中なればかくいふ、牀裁すべて半紙本の讀本に似て繪は多し、其の文其の趣凡て讀本草雙紙の間をゆきて讀本の方に近し。

翁の著には『高尾船字文』其他十餘種あるべし。

間形本　其の大きは半紙本と中本との間なり、牀裁は草雙紙に似て其の文其の趣は讀本雙紙の間をゆきて草雙紙の方に近し。

翁の著には『繪本大江山物語』繪本武王軍談『白久屋お妻古手屋八郎兵衛』敵討要入丈』など此種の本なり。

櫻庭蓬村先生のいふ如く『猫下やらし』を翁の作とせば合せて二冊なり。

大本　半紙本より大形なればいふ、大方は隨筆やうの者此の種の製本なり。

翁の著に『流石雜語』『茶雜之記』其他の雜者は大方此の種なり。

大方は右の如くなり。

第三節 家の内の事

流石に入夫の身の常の剛愎のやうにはえあらで、二年三年は心ならずくらしつる事、女兒生れまうとめ失せ、著作年々に行はれゆけば、やうく／＼に身ひろく覺えなりぬる事などは、始に老るしつ。さて其のわくる年寛政八年には二女ゆうといふが生れき。九年發の草紙『無筆節用似字盡』は行はるゝ事大方ならず。只年毎に幸のいやまさりゆくやうにてわが世の中とぞ思ひ樂しみける。然るに同じ年五月六日耕書堂の主人萬の唐丸うせぬ。すぎにし事など志のばれて

思ひきや今日は空しき藥玉も枕の跡に残る物とは

などうちいでし手むけけり。昨日までもわが家に接はれつる身の今は多くの人に知られて人の下にのみはつかぬ程なるを思へば、草の蔭にもなほはえある心地こそまけめかし。ことし十二月廿七日男兒生まるゝに來てより幾年を経ぬに子供二人まで設けつれば、嬉しき事に思ひしものから、共に女子なれば猶わかぬ心地のみせられつるを、あなよくこそ生みつれなうちよろこびて物狂

はしきまきになつてありける。

やがて名を鎮五郎とよび『細の糸巻』に手の中の珠かざしの花もものかはとぞめでいつくしめり。新玉の年を迎ふるめでたさはかほるまじき事なれど、今年ばかりは殊なるやう覺えて、乳房求めて泣く兒の聲も驚の初音と聞きなされ、心そらるに浮き立つ人々のさまも理なり。

幸はこれのみにもあらず。この作『似字盡』の中なる文字を綾錦に織り出だしたるを此の春西陣より賣せめければ、翁の名はいや高き際まで知られわたりぬ。かゝれば年毎に入る潤筆の黄金

潤筆は著作料也。書買より著作料をとりたるは京傳馬等に初まりぬ。翁の著『作者部類』及『藝傳毛の記』等には其前には書買より新板の繪紙紙繪等を贈りて作者に謝したるのみさいへり。

思の外に少からぬと一分は古今の書籍をわがなひ殊に舶載の新著は價の貴きをいとはず

『八犬傳』回外廻轉に(上略)毎に衣食を省き節儉を旨として和漢必用の書籍を購ひ求むる者五十有餘年其書藏めて五六千卷六十餘冊に至りしと(下略)あり。

一分は故舊親戚の貧しきを賑はして樂とせれば

『家廟遺墨』に翁の叔父田原四郎左衛門忠興の書簡數通同叔父兼子新賀定興のが數通あり。其中には金子借用したしこの意の者あり。又金子を興へられ添しこの禮狀あり。翁の賑恤の事實を証すべし。

餘財常に多からず、衣食の費そこばくを省きて豊ならず其の日を送りぬ。此年の八月兄臺右衛門與旨病によりてみまかりぬ年四十歳なり。

與旨幼名左馬太郎、後直次郎、と改め、更に臺右衛門といふ、性篤實温雅にして至孝なり。幼きより

父祖の資を承きて風流の界に遊び、かつて師竹庵越谷吾山の門にあり、東崗舎の主羅文といひ雅藻甚多し。

『家廟遺墨』『飛石雜語』等に其句をのす。一年旅中の吟に

遠近に春をゆくして露の空

寛政の中比病後の吟きて

年きよめ五臓の煤も拂ひけり。

其他翁の著作の口齒の發に此人の句多く見ゆ。

わかくして父におくれ母を助けてよく貧窶のうちにあたり、幼き弟妹をうるも凍えもせぬ程に養ひなし、戸田氏に仕へては忠誠廉直、家宰の任を耻かしめず、甲府勤番の中も配下の指揮よろしきをえつとて賞せられ、事によりて同家を辭し、山口氏に仕へても、重く用ひられ面目古參の聲にもまじたり。

うするに及びて翁いたくなげきて、我れ幼くて父におくれ、其の後母にも仲兄にも別れれば、うきにも樂しきにも只此君一人を頼とは志つるを、今またあへなくも見捨てられぬこそ悲しけれと泣き叫び人心地さへなかりけり。

かくてありはつまじければつとめて雄心引立て、やがて法名を深譽勇遠羅文居士とあり、からをば小石川深光寺にぞさめき。

男子の家をつがす、きもなくて年僅に二つなる女子の名は萬といへるが、残れるをど瀧澤のちす

ぢの流細かれど洒れずしあらば千代もくむべくなど思ひたのみて母もる共に羨ひとりて万かひくしくもてなしけり。

今年九月風雨にされて文字わきがたくなりぬる家の石碑改め立てつ。其の文に。

先考先妣之墓安永乙未春三月家兄所建壽風雨摧割流過過半是自家兄嘗有欲再建之志而不果今茲釋就本解不堪哀悼之至爰三位合墓礎石於先塋之側目送其宿志云

寛政戊午九月

愚弟瀧澤清右衛門解題

とあり翁の父祖にあつき心推しつべしや。

之れより後も筆の暇には小石川に至りておくつきを拂ひ、こがねの餘は香花の料に喜捨して専ら後の營をぞつとめける。

年もくれて寛政も十一年となりぬ。

八月十二日は羅文居士の一周忌とて僧を請じ經をよませなどするにつきて、孤の人なみくく健やかならぬをなげかひつるが、心なき身にもよみぢなる父や戀しかりけん、こえて二日その月十四日といふに此の世を去りぬ。かねて行末はちぼつかなく思へりし者なれど、さて今更のやうにうちなげかれ兄は日比至孝なりしを家督の幸なくて死後に圖らぬ不孝をかもせり、只幸にして我れに三子あり。男子は殊に秘藏なれど宗家の祀をたつべくもあらねば鎮五郎をもて兄の後をうけしめ、わが家は姉に夫を入れて兩家相助けて永く後の榮をはからんと思ひ定めき。今年京傳の父傳

左衛門信明うせぬ。

寛政も十二年となりぬ。今年三女誕生(翁の外孫松野温美正幹氏の生母なり)此の秋豆相漫遊を思ひ立ちて九月十日

江戸をいつ。まづ武州金澤にいにし文庫のあとをたづねて北條顯時が往時をまねび、能見堂に入つのがめにあきて巨勢の金岡が昔を思へり。浦賀に遊べる夜は親しき友と清談して長き秋の夜をわけやすしどかこち、幸ある旅を喜べり。かくて相摸灘三十里の舟路には風にあひて一日岬にかへり、遙に東の空をながめて人知らぬ涙をまぼりつ。下田に遊ぶ事十日ばかり。大島八丈の事まで探りみたる少からず。三腫を家路にめぐらしてかへるさ、又好事の癖にかられて連臺寺のいでゆより天城六里の山中をこえ、狼の聲に送られて鴈を故郷の空に断ち、笥の響に迎へられて獨りゆく足をとめて袂を妻子の上にするほしなどしつ。夫れより修善寺の温泉に旅寝しては源家の末を悲しみ、三島沼津に友をとひては故きを談じ新しきを語りて暮れ易き秋の日をうらめり。繪島鎌倉に至りては北條氏奸賄の謀をにくみ、同じ時に生れて其の肉をかまざりしを惜み、源家覇業のあとを見てはひそかに皇權を亂る備を作れるを憤りて慷慨の涙にくれたり。

かくて十月の半ばかりに家にかへりぬ。大凡此の三十日あまりの旅行間に知りえたるそこはくの事どもは此後皆くさくさのゆゑでたき物語となりて世のもてはやし草とはなれるなり。

十三年辛酉革命の年とて享和と改元あり。

今年尾張の人椒芽田樂

神谷剛甫といふ醫師なり。滑稽を好みて小才あり。戯説を椒芽田樂といふ。其の著『桃灯庫閣七夜扮』を出版せんとて筆削をこひおこせり。文致たゞふべきふしありとにはあらぬと志の程流石に捨てがたくて聊筆を加へ、あくる正月鶴屋より出ださしめつ。馬琴門人とあるに世の覺はやゝありけり。

今年享和二年夏の初翁西の方都浪花に旅す。いぬる年伊豆相模に行きて種々のめづらしき事にあひてはからぬ樂を得、かつ多くの人に知られて著作の行はるゝ事初にもまじゆきつるなどよき事のみありければいかでえはしのいとまをえて京浪花へはゆかんと思へる程に、かねて翁を慕へるふみやどもよりいかで一度は來り遊び玉へとうながさるゝももだしがたくて、五月九日江戸をいでたつ。

旅行大凡百五日、雨天洪水其の爲に逗留日を重ね歸朝早く迫りぬれば、訪ふべきをもとはぬが多く、見るべきをも見ぬが少からず。されど到る所、名勝舊跡は更なり古人の略傳墓誌遺墨珍書古墳等より風俗方言妓院雜劇のさま年中の行事等大凡異日の參考たるべきもの殆もらさず見聞したり。やがて歸江の後『鬪旅漫録』三卷を著はしぬ。自序あり、旅の行方のあらましを示せり。

吳竹の疾き臥せにれざめを聊ちしも、さへの神にや誘れけむ。神風の伊勢の宮居拜まむと、まみたる頃、杖と笠よと立腰きつゝ、駿河路や、不二の峰に頂たる、遠つあふみに旅宿りしてまた夏ながら秋葉の山によちのほれと、ふる郷人に事告げ

むなつかし鳥の啼にまへまのほれ、三河も吉田岡崎や、紫夢の社若、流ひ流せしき月をすぐし、山鳥の尾張の國に、長き旅を黙め、星まつる初より、京にまはし杖をまゝめて、殘るあつさを賀茂河にうち流し、東山の夕つく日、齒さす赤前垂もくかられど、浪花人にまたる、身の心念かれ、伏見の夜舟夢に、おせつ、浦の片葉の足休めして、三の眺もあひなく、潮もの寒き秋風に震りされ、立つこしいへは浪流、堀江の月に袂を分つ、夕は牛の角文字や、伊勢路に入ればつるこ号、竹の都に御社を拜み、山田松坂の踊目に珍らしく、津の町の長き夜すがちをあかしたる、瓢箪屋より走りいで駒のはづなを早めつ、桑名の宿の給も、あへはにくからぬ友人に止められ二日雨ふり風ふきて、宮舟はきれものなればさやへまはりて怪我もせず、よに日につきて急ぐ程に葉月廿日あま四日おの、家路にたゞりつきぬ。旅に遊ぶも百日餘、目に見耳にきけるとまめや、に書い付け見れば遂に物の本となれり。

(下巻)

到る所雅客文人に迎へられ風流韻事を談じ故事野史を聞く。同志の士と相會ふ事少からず知音甚だ多くなりけり。

享和も三年となりぬ。

さてもこの旅ありてより、翁の名京舞にもてはやさるゝ事、初に倍して、文の林の譽は獨り翁の上にあつまりぬ。されば浪花人松好齋の作『滑稽繪本役者演眞砂』

滑稽繪本と題せし可笑的の者にはあらず。當時所謂滑稽は現今謂ふものと意味自違へりやの如し。此書は今の脚本ともいふべきさまのものにて題名甚だ似合はしけりす覺ゆ。

は百四十里を遠しとせし殊に翁の序文ををひとて江戸に送られたり。まして近き江戸の小才あるものゝ其の筆すさみを送りて筆削を請ひ束脩をもたらして門下の者たらんと求むる者、面謁を望

み詩歌を欲する者、日毎にいづくなるを知らず、翁の性として深く世俗に交はるを好まず、殊にもし一々之れとあはれえこそ机に倚らん暇もあらじとて『夫木集』衣笠内府の身の憂きときの隠家にせんとよまれたる心をとり自鏡笠漁隠と號し、常に病と稱し深く門をどさして知音の紹介ある者の外はあへてあはず、詩歌書畫をかねて短冊扇面等に認め書屋フキヤに取らし置きて僅に欲する人々の心をみたせり。

されば許されて門人と稱する者當時僅に五七輩に過ぎざりけり。

翁は曰、我に戯作の門人なし。門人たらんさ賄ふ者あれば理なききて許したり云々。されど後に文化の末より文政へかけての折の事なるべし。但妄に門人を許せば際限なきなもて當時といへども多数の請求者を許分けり少く共門人といふものありし事は事實の如し。

文化三年發兌『勸善常世物語』に門人梅村園門人嶺松亭同校といふ文字あり。

文化五年發兌『三七全傳南柯夢』の終に門人學蘭の名をもて翁著述の廣告あり。

又同文化三四年より七八年に至る諸著に新作を知る歌にて『小野篁歌字盛』風の歌三四首ありその中に

敵討自島の關も自作なり、鈴菜に甚三は門人の作あり。『騷路春鈴菜物語』は節季季、本名島岡權六の作なり。『敵討甚三紅緋』は川岡權學川本名川岡庄助の作なり。

此の年初めて半紙本の讀本『月氷奇縁』五巻をつくる、これは浪花の書買河内屋太助と約しつればなり。あくる春出版するに及びて喜ぶもの當に婦幼のみならず、文士雅客も皆其の奇趣妙文を稱ふる程に賣るゝ一千百部をこえ、なほ年毎の再刷少からず。草雙紙はやう／＼に幼き者の玩具の

やうにぞなりゆきける。

世の中もやう／＼大人びて繪組よりは趣向文章をいふやうなりゆきぬ。そはやがて文章の方にはあやしく妙なる力ある翁の世となりぬるなりけり。

第五章 巳の時すぎ

第一節 著作

享和四年改元ありて文化といふ。まことによくこそ名けられたれと覺ゆるばかりなる此の頃の有様なりけり。

雙紙年々に行はるゝ儘に世の好はたやう／＼高くなりゆきて、口合秀句のはかなき類は既キヤく見かへる人もなくなり、草雙紙にすら敵討やうの理ことわりめきたる者のみぞもてはやされたりける。さればかたへには合巻あらはれ、

合巻とは雙草紙二三冊を合せて繪表紙をつけ後には彩色繪なる上下二巻合せて五六冊をもて一編となせるものなり。

文を稱へ趣を味ふには讀本こそ其物なれど挿給少くは婦幼の愛をひきおたし。さればさて今迄の並表紙にては稍まままり

たる趣を綴りこむに紙數足られば合巻といふもの出でましなりけり。

一方には讀本ヨミホンやう／＼に行はれ來にたり。

かゝる折柄といひかねて知られるる浪花よりといひ『月氷奇縁』の発は思の外にて忽にして千百部を賣り盡しぬ。之れにぞ心をこらに喜ばれてやがて『復讐奇談雜枝鳩』復讐五冊『小夜中山石言

遺書』北馬 五冊 を綴りて今度は江戸と京都との肆よりいたしたり。之れまた大く行はれたり。翌けて二年乙丑、『椿説弓張月』北馬 五冊 『四天王則盜異録』豊國 十冊 『三國一夜譚』豊國 『勸善常世譚』北馬 五冊 等を綴る。(別に中本合卷雜著等あれど讀本の名譽に比べて旭に向ふ星の如くなれば以下は必要な限は零す)

三年、『標注園の雪』北馬 五冊 『隅田川梅柳新書』北馬 六冊 其他數種四年『三七全傳南柯夢』北馬 六冊 『頼家阿闍梨怪鼠傳』前編 九冊 『弓張月』後編 六冊 其他數種五年『弓張月』拾遺 五冊 『俊寛僧都島物語』八冊 『夢想兵衛胡蝶物語』五冊 其の他數種を綴る。

専ら巷談俗説に基きたるはかなき者すら切にめてはやさるゝ翁の名なるを、正史實録を骨となし、博き學もて肉をそへ、飽やかなる筆もて肌をかざりたるなれば、高き低きにわたりて狂へるばかりにたゞへられたり。殊に浪花人は一年壬戌の漫遊の折親しく風采をのぞみ博識妙文に驚けるより、神と尊みひじりとあがめて、只そひにえひたるやうにてたゞ人とは思はざりけり。されば文化二年『稚枝鳩』いづるや、佐川藤太といへる淨瑠璃作者之れを『會稽宮城野錦種』といふ淨瑠璃に作りなして人形座にて興行し、太く行はれたり。三年春『四天王則盜異録』いづるや、其の十月角座にて其の一節を歌舞伎に仕組み之も又行はれたり。五年は殊に夥しくて翁の著の歌舞伎に上る者四座五度なりけり。

八月十一日開場 角座 三國一夜譚
九月十七日開場 中座 舞扇南柯話
十月 新淨瑠璃 人形座 鎮西八郎響弓勢(佐川藤太作)
十一月十三日開場 中座 島巡月之弓張
十一月 大四座 軍法宮士見四行(頼家怪鼠傳)

かゝれば世評は割るゝばかりにて、書肆より稿本を請ふ事矢のやうなれば賤ぬるに机邊を去らず筆に枕し紙を衾となし夜を晝にかへて綴る程に、文化の半に至りて稗史三十餘種、中本、合卷、雜著併せて六十餘種に及びぬ。知らぬ者は馬琴といひ、曲亭とよぶ者、二人も三人もあるらんと思ひ、さらぬはよも只人にはあらじなどいふかしまあへりけり。

翁の讀本其の數甚少からず、まかも悉く新奇妙案なりと雖も殊に『南總里見八犬傳』『椿説弓張月』『三七全傳南柯夢』をとり出で、世に三大奇書とぞ稱へける、そが中に『南柯夢』は文化四年書肆榎本平吉の爲め綴りてとらしたるが、障はる事やありけむ、出版翌くる五年三月末つ方にたりぬ。時の後れたればにや、此の日賣るゝと僅に二百部なり。平吉色を失ひて驚き憂ひけるが、世評漸く聞こえてきて、初秋に至りて、千二百部をうりえたり。殊に浪花の歌舞伎に大入ありてより、我れも〜と求むるもの日にまじゆきてければ、平吉の喜たどふべくもあらず、いかで續編を乞請ふ事志きりなり。翁全編已に終を告げぬれば、書き續くべきふしも残らず、と辭めどきか

ず。よしや事は何にまれ只『南柯夢』の名だにつかばと只管てひけり。よりて『占夢南柯後記』八巻を綴る。其の名にめでし購ふ者多く謀れる事あだならざりけり。さても前編の世にめでられたるさまこそまらるれ。

『權説弓張月』は翁が日比の慷慨をもらさんとて、殊に力をこめ、思をこらして、英士王事につめて志を得ず、遂に難をどつ國に逃れて之れを靡けたる趣を説きたれば心なき女小供さへ大君の爲には火にも入らん御國の爲には水をもかづかんの大和心を起すものありけり。

初文化二年前編六冊を綴り、同四年後編六冊、同五年續編六冊を出だしぬ。同じき十月例の佐川藤太『鎮西八郎魯弓勢』といふ淨瑠璃に作り、十一月には道頓堀、中の座にて『島巡月の弓張』とて狂言に仕組み、いづれも大入ありけり。翁之れを聞きて『弓張月』はわが得意の筆なるを、さもてはやさるゝこそうれしけれとて新曲を作りて喜びたり

梓弓 ひげや歌舞伎の 願見せに 心慰む 爲ともならず、うき事たえて 白紙に 身をば盡して 來ても見よ 曉の七ツ
ミ ハツ代に八町隣のあたると嬉し さいらえにしの つきやちぬ うまの國の 親子草 男島の島に 通ふ神風 臨降
つとひし人の 山雄にも 野風まやけく 磯菜つむ 名にし高間の手どりして 猛き心の 鬼夜叉が 鬼ならなくに 照
る月の わこは九ツ 藤市が 引く馬の鞭に 武藏太か いらす契は 眞骨よし 讃岐の院の 荒御堂 二十八騎の いさ
かしは じんせい揃の 勇ましく 遊べや阿曾の 忠國に冬より開く 花むこの 花のわきをき ふしむいんぐに 九耶
の玉の 春まらえて 梅の浪花津 中々に 中の芝居を守るらむ めでたき時に 大島の 宮居久しき 物語 宮居久し
き 物語

さらぬだにめでたきふみの、かゝる事におぼえいよくまして、春毎の出板をまちつけて、我れ先と争ひ求むれば、つゞともなく編をつぎて、思の外に長くなりぬ。當時讀本の作少なからねど、大方は五六巻を限り、長きも十巻を越ゆるは稀なるを、之は筆を文化二年に起こし、六年が程と渡り、編は五ツ、巻は二十九にぞ及びぬる、まゝと人のわざにはなかりけりなど驚き呆れける。いでさらば此の機を外さず、二ツ三ツの大著して世の肝を冷してん、紫式部一個の女子、陳壽、魯貫中はた何者ぞと、つひに意を定めて『八犬傳』『巡島記』の筆とりそめぬ。

之れよりは多く他の讀本を綴らず。文化八年より十年に至り、僅に『南柯後記』八冊『青砥藤綱摸稜案』前後編十冊『絲櫻春蝶奇縁』八冊『皿々郷談』六冊あるのみ。是の他合巻、中本等も十餘種に過ぎず、専ら力を二書にぞつくしける。

而して此の間の諸書に『小説快事八犬傳』豫告には、『朝夷巡島記』の豫告出でければ、人々只首をのべて待つ程に、文化十一年初冬に至り、『南總里見八犬傳』第一輯五巻は江戸青山堂山崎正入より、『朝夷巡島記』第一編五巻は浪花河内屋太助より出だされたり。

翁五七歳の昔より書を讀む事幾千部、十五六歳より文をついと三十年、筆硯漸くなれ文思又熱せり、まかも且思をぬり筆をこらせる文の、いかで行はれであるべき。之れより他の讀本を綴らず、合巻も二三種のみにて年を隔て、二書をいだしければ、江戸浪花の紙の價上りつべくさへ見えて、京傳文化十年に讀本の筆を收め、つぎて十三年に失せにければ、世は只翁の物とぞなりけ

る。

一方にはかく作者の王にのぼれる外、かたへにはまた學者先生の名もひきからざりけり。

初寛政に京傳の下に世に出で、より其の名旭の上るやうにて、蓋より青しとの評高かりけれど、

猶なみくのえせ作者とひとしなみに見られんがうしとて文化三年小説『園之雪』前編五冊を綴

り、わがかへ名なる門人魁齋子して故事難字等を標注せしめていたしぬ。標注の例むづかしける文字亦

例へば宋 婦幼は煩はしとて見もやらす、職者其の學を街ふを嘲へれど、なま好事家其の高才博學

をめでたふれば、なか／＼に甲斐ある事として翁もふみやも喜びけり。

かくても猶誇り足らず、文化六年隨筆『燕石雜誌』六巻を綴る、但詠童謡方言俗語の考より地理

物産歴史人物の説等博く和漢古今の學にわたり、精く聖經以下稗史までに通ぜる翁の著なれば、

あまりに牽強にすぎこそすれ、誤まれる所多くとも流石に見るべきふしもありけり。ふみやの殊

に喜べるにも世の人のおびえは走られつ。

八年『京雜之記』四巻を綴る、大方は『燕石』をつげりとも見つべし。七年『質屋庫』五巻をつ

ける、夢に事よせて正史を考へて傳のあやまれるを解けり。同じき十四年『玄同放言』三冊をつ

ける。こえて文政二年同續編三冊をつける。是等皆學にまかして筆を走らし道を論じ、史を是非

せる者讀むだに物うかるべきを、なか／＼に巻を措きがたき興あるもあやしき翁の筆つかひにこ

そよりけらし。

第二節 京傳

我れも老かなきてぞ人にこひられしと打ち嘆きたる、誠に人の心ばかり頼みがたきはなかりけり。

さても京傳は寛政三年公の控に觸れてより、深く畏れ慎みて、又淫猥の筆をとらず。専ら心を教

訓に用ひけるが、元其の人にあらねば、行はる事前の日のやうならず、馬琴の作のいたく行はれ

ゆけば、之れにけをされてぞ見をける。さはれよく人を知り己れを知れば、あへて争はず、生涯

の計をせんとて、寛政四年兩國方八樓にて書畫會を開き、三十餘金を得ければ、夫をもて翌く

る五年の春銀座一丁目東側橋の方の木戸際今讀賣新聞社の向角何某といふ砂糖店のあるあたりなり。に間口九尺の家を借り、紙煙

草入煙管等の店を開きぬ。通客粹士など、唱ふるもの争ひて來たり買へば、月毎に八九十金の商

あり。後いくばくもなく父が支配内の醫師の家の明きたるを購ひて移り住みぬ、こゝは間口三

間あり、土藏さへそひたれば世の覺やう／＼ましゆきたり。之れより讀書丸といふ賣藥をも始め

けるが、流石に京傳の名のかげにて行はれけり。

草雙紙は何となくあかしからねば、只僅にふみやの責を塞ぐのみにて、多くつゝらず、寛政十年

稗史『忠臣水滸傳』十冊を綴る。巧に水滸の骨肉をとりえたりとて之れより世評たまましゆきて

稿本をこふふみやも多くなりぬ。享和二年『通氣智之錢光記』以下四種を四季によそへて出版せ

り。之れより合巻といふ者行はれて人々京傳の妙趣を感じあへりけり。

かくて其の名も本にかへりぬべく幸を喜びたる甲斐もなく寛政十一年に父傳左衛門うせ、文化元

年には母さへうせぬ。京傳は此の程まで吉原彌八玉屋の遊女玉の井白木に連れて家にある日少く、こそ身受して妻となしつれど、永く商買になれぬば、家も如何と心づかひする者ありけるが、流石に幼きより商家にそだてる身とて貨殖の道にはかしく、玉の井またさる者に似ず、よくかひくしく家の事をとりまかなへば、思の外に家はやうくさかえゆきたり。かくては行末の運にも頼ありと喜べる程しもある、文化三年三月四日風烈しくすさめる夜出火あり、道へ落ちつればどちあたりしに忽にして燃えひろがりて、思の外の家共皆灰となりぬ。京傳が家も只ぬりごめの残りたるをせめてもの心やりとはしたりけり。

かなしみはこれのみならず、かねてより若い行末をたのめてし養女つるみまかりぬ、年僅に十六也。

初京傳寛政二年の比、吉原の妓菊園を妻となしけるが、居る事三四年子なくしてうせけり。其の後寛政十二年又妓玉の井を妻となしつれど、之れにも子なし、百合とよびかへつる名にも似ずなど職れけるがさてあるべきにあらねば養ひ子せむとするに思ひまどふしありてたゆたふ程に思の外の事いできぬ。

京傳の弟京山も同じく妓女を妻となしけれど、あやしく子五六人生みけり。されば京傳の子となすべきは此の一人なるべけれど、京傳京山もと誠の兄弟ならず。

其確證はなければならずと疑ゆるふしは、すくあるなり。まづ

一 享和中京傳の家に食客たりし儒生關洲といふものいつの序に「おれきつこいへり。」

二 京傳京山の性質いたくはれるもいかに。尤同胞と雖全然同下まにはあられと疑へば疑の種となりかねまき程の事なり。

三 京傳の世時いたく放蕩なりしを論むもせざりしは眞に親子の恩愛なきかのやう見ゆる也。

四 京傳よりも殊に京山を愛つたりし由作者部類にいへり。

五 掃部齋家の縁をば娘さぬの夫にゆづりたり。之にも疑はなきをえす。

故只誠關根齋の談に京傳は某侯の藩臈なり。母大森氏若くして某侯に仕へ京傳を生む。後掃部齋に歸きて二女及京山を生めり云云といへり但其證はきこもらしたり。掃部齋に大森氏わかくして尾州侯の御守殿に仕へたり云云。

互に快からず思へれば、なき後の百合が身を思へば、その親戚ならではと思ひて、よりくにゆかりを求めて、つひに日本橋に甘ばかりなる弟あるを見いで、之を養はんと思ひ定めぬ。只流石に京山へ憚かりて、明日はあさてはとたゆたふ程に、此の子俄にうせけり。まだ手にとらぬ者ながら、持てる玉を奪はれたらん心地して望を失ひつれど、その妹にて九ツなるが幼きより他に養はれ居るをこそとてつひに之れを捜り求めぬ。さるにその養家は時の不幸にあひて貧困甚しく一女を養ふだに便あしき折なりければ、是までの養の代に聊の禮謝をそへてやがてこそ女となしぬ。千歳の命あれかしと名をば鶴と呼び、書畫、三絃、琴、活花、煎茶、香道何くれとなく學ばせ、それが十三になりける折、母大森氏のたよりもあれば、尾張侯の奥に宮仕へせしめぬ。之れによき聲をとりて家をつがせなば、よしやわがなき後なりとも、百合も衣食には安かるべし、と

心ひそかに楽しみて、早年比になれかし、早よきむこもあれかしとぞまぢける。かくしもたのめける身のあはれ勞症の病にて十六といふに失せにけり。うたての風や、かゝる蒼をぞ京傳百合が悲は一方ならず、物狂はしき迄になげきけり。

馬琴此の由をきゝ行きて吊ひければ、京傳涙のひまにいと嬉しくて、こし方の物語など打ちいでたる序、我れ不才なれども幸にして世にめでられ、聊か名を成しぬれば明日の命も惜しからずなん、血筋はた京山が子あれば絶えぬべくはあらねど、此の子のうせぬるにつけても百合が運の末こそ覺束なけれ。たのむべき方もなくなりて路傍にさまよはんも哀れなれば、常に衣食の費を省きて貯へたる百五十金もて寛頭店の株を購ひおけり。此れより六ひら七枚の黄金はうべけれど、其の日を送らんには足るべくもあらず。家のなりはひもやう／＼に衰へゆけば、ましてなき後はと心安からずなん。かねて眞の弟とも思へればこそかくは内々しき事迄かたらふなれ。よき謀あらば懼らず授けてよとこゝと懇なり。されど馬琴は思ふ由やありけん、言を四方山の物語にうつしてそこ／＼にして歸りぬ。

此の後相見る毎にくりかへし／＼といかでなき後の事よくはからひてといはるゝに、今は流石にもだしかねて、こは仰せらるゝとこそ覺えね、顔氏家訓に子に萬金を遺すは一藝の身に從ふに如かずといひて、君子は子にすら財をのこすを欲せず、况して妻にをや。今心をいため思をこがしからくして千金を善へんども、死後のさまはかねて謀る所と同じからじ。されば孔夫子も其

の人存ずれば其の政存じ、其の人亡ぶれば其の政も亡ぶとの玉へり、且財多く世つぎ定らずば、其家必ず營利の親戚にかき亂されんと明なり。先生もし誠にか家と思ひ給はば、よく身を養ひ長壽ならむのみ。而してよくまぢやかなる者を擇びて家をつがしめなば後の患なからんかといひて別れ去りぬ。

京傳之れを喜ばず、我れ年頃のよしみを思へば、人にも告げぬ家のひめ事をさへ語らひつるを、なか／＼にうとまじしとや見けん。少しく和漢の書をうかいへるに誇りて、さかしらだちたるいらへこそ心得ぬ。過ぎつる事いひづべくもあらねど、水の爲にか家を取られ、はふ／＼わが家にあまつれたる時を思はばかうつれなくはあるまじきを、頼もしからぬ人の心なりけり、とかねてよりあまりに時めく様をねたましく思へりければ、之れよりますます快からずなりぬ。さばれ我れをこそ名の敵ども疎まめ、なからん後は流石にあはれと見て力どもなりなんをぞ常に百合に向ひては、さきの日思ふ由を馬琴に語らひつるに、其の言ふ所容易くはえ行はじと見ゆれど、理にはかなへり。只かれ自ら高き居り、人を人ともせぬ事いと惜しけれど、志かもわが友に又さるべき人なし。わがなからん後、思ひ惑ふ事にあはば、彼れにこそとひはからふべけれなどいひきてきて、つねに争を好まぬがとて腹立たしは色にも出でずなほ心地よげにゆきかひ交はりけり。

京傳は其心まめやかにて人と争ふ事好まず。己をひく／＼して人に愛せらるゝ事まことに商人の家にとだちたるさまは見ゆるなり。

京傳文化の初『近世奇跡考』五巻をつゞる。うちに英一蝶が土手節の事あり。一蝶の子一峰(後二代目一蝶一脱には門人といへり)之を惹りてむづかしくおめければやがて絶版しけり。同下比神史『優盛物語』の繪を喜多武清に畫かして行はれず。翌年の神史『櫻姫全傳』は豊國の挿畫にていたく行はれたり、之より豊國己を功として強慢甚しく合巻の署名にも豊國畫を先とし下に京傳作と書きけり。京傳快からずは思ひながら争へば利ならずと忍びて之に従ひけり。又書肆西村屋興八は大書肆麟形屋の子なりければ心ざま人に下るを欲せずふみや作者畫工の名をあぐる者なれば我より稿本を請ふべきにあらずといへりければ文化の頑途京傳馬琴の書はいださざりけり。其後京傳はつひにもごかしくなり我より折れて稿本の印行をこひけり。是等の事曲草紙には到底えすまじき行なりけり。

されど、ある人の又のくせとて猜疑の心は深かりけり。相手の方にてあからさまに名のりいで、腹をいごむ時は心を風して従へどもおほめかしたる言葉の我をそしれると覺ゆるあればいたく折ち腹立ちけり。始万象亭と交遊からざりけるに寛政の初万象亭『田舎芝居』といふ小冊を著し其序中に「今の酒深は翠丸を出して笑はしむるが如し」といへるを見て已を觸りたりとて恨み憤り竟に其事を言はずして交を絶ちたり。後に馬琴畫を恨みたるもひそかにほめせり見つけばなりけり。馬琴はまた性としてまげと魂なる上、此の比の世の覺まばゆき迄なれば、やう／＼に心高ぶるきて、京傳をも竊に學ばしめおめらへれど、流石に過ぎつる事を思へば、口には先生と敬ひ、をしごとへりくだりて、あつく交らひけり。

老かるに文化六年冬に至り、二人が中此事こそ起こりけれ。此の冬十二月馬琴遊谷子の寓言に倣ひて『夢想兵衛胡蝶物語』前編五巻を出だせり。中に「忠臣藏」の戯曲を評せる件に、お輕が加にかくと身の幸なきを論し、よしや夫の爲なりとも身を花街に售りて耻ぢず、而も自から操をゆるせる、をさ／＼禽獸の行なりと詠りたり。京傳之れを見て大に疑ひ、これまさしく百合の身をいひ、我れをさへ穢れるなり、と忍びに忍びたる心も亂れ、あくる七年の初春をまちつけて京山をめて飯田町なる著作堂を訪ひたり。いと早くもどうや／＼しく出迎へてかにかくともてなす程に互に初春の壽四方山のうはさより物語は著作の上になつりぬ。京傳やがて形を正しうして、さても足下が去年の新著『胡蝶物語』にはまほしきふしあり。そはかのお輕が回につきてなり。夫れ遊女にも賢あり貞あり、強に薄情淫奔の者とのみ見んは酷ならずや。まかも身を隠くや、或は親兄の爲にしもしくは主夫の爲ならぬ者稀之。元より清操をば語るまじきも、よく孝節といふに似たらずや。我れは聖人の道にくらけれど、足下は和漢の學に深く、苟も聖經をとき賢者を論ず。もし今聖賢あらば、なほ彼等を不義放逸といはんか足下代りて答へ玉へとて一言に遊女の操をいひけちたるをなじり、年比のよしみを忘れて筆を弄びて友をうりつる志こそ嬉しからぬと憤にたへぬ有様なり。翁驚きて偏に京傳百合が上ならぬ由を述べ「其の世間個人につきて見れば娼妓を妻とし得色驕然たるもの幾万いまだ之を知るべからず、されどかの物語をとり來て我を恨み我を憤る者なし、唯是れ先生のみ、先生少しく誤れるなきか。乞ふ先生かの物語をとりて漫然看過せず、智識を注いで須く熟讀せよ。先生の憤とけて不肖が世を喚起する真意のある所を知らん」(磐傳母記)といひきと、されば遊娼花妓につきて聖人の説をきかんと仰することわりなけれ。「覆載間堂々として天下の眞理を窺知す。道德の事象を痴愚狼醜の娼妓を論ずるものあらん

や、孔子曰はく女子と小人とは養ひがたしと、况や娼妓をや。」(磐傳母記)など人にもあらぬかのやうに言ひ放ちたり。京傳愈々怒りて、あはや事こそ起らんずれと見て、京山傍より之をなだめて、誰れも知る事なれど、昔世蕉翁は門人杜國が目しひたれば、遂に盲目の句なく、朋友杉風が驚たれば、又雙の句をなまじりきとぞ。今馬琴子意を用ふる事こそ、に至らず、誤りてわが兄に思まれたれど、他意あるべくも見えず。之れより互に慎しみて人に怒られぬやうにこそすべけれどいふに、翁もまかしく悔い、京傳も心解けて互に争はぬ初の如く、蓋を更め歎を盡くしてかへりき。

されど心の中はよからざりけん、之れよりは往復年に三四度にすぎず、用事は書簡もてのみ通じけり。さは世の人の思ふる如くはた『蜘蛛の糸巻』に記せる如く、ふつに交を絶ちぬるにはあらず。京傳此比隨筆『骨董集』をあまんの心がまへあり、翁に考を求め藏書を借るとて文通はまばりありけり。

『著作室雜記』文化七年の條に

山東京傳子より著述の骨董集に書加る挑灯の考あれども、またつくさずとも考あはしらす玉へこひ來たりよりて聊感考をういつりてつゝはす事左の如し

(考四五枚ありて終に)

右御約束に任じ愚考をさし上候もし御用立候事もあるべくて一笑

四月十五日

馬琴拜具

山東老兄

右之通またいめつはす

とあり。又同書文化十年五月十五日の條に再挑灯考あり紙數七八枚ばかりあり。

又同此の寄簡を某村先生所藏とて『史海』にのせたり。其間柄親しからぬやうには見えす。

此間の雨天にて少々涼氣相成申候益御座候遊藝存候先達は御感書くさくさ恩借難謝盡存候『昔々物語』一冊右返上仕候御落手被遊可被下候右は好本にて御座候私藏書は寫本にて御座候故校合仕りたく候へ共何くれとせわしく其暇なくアメリ返上週々仕候間先返上仕候追而拜儀校合仕度候其節は又々御借可被下候禮奉希上候日本風土記今日返上仕度存ト候見出付置盆前にさしこり雜用にて番被不申是は今少し御借置被下候禮奉願候何事も雜用多く本館候暇もなく世事にのみつければ候殘暑去り秋色最中に相成候は、一日御同伴遊行仕禮被下候飲白

七月十七日

曲亭先生

京傳

などあり。猶前見聞考案の證既にて骨董集に入りたるもの甚多し。概久寄進大坂本願寺石の手水鉢の墨本近松が墨迹の寫など皆讀より贈りたるものなり。

かくて文化十一年『骨董集』上編四冊世にいでたり。考證精嚴誠に十年の辛苦を償せりとの評高く醒々老人の名は戯作者京傳の名を知るを耻ぢたる上さまにさへ知られ渡りぬ。それにも馬琴の力は興りけり。なほ中編をといそしむ程に積勞つひに病をなして同じき十三年秋九月七日五十六歳にて身まかりにけり。翌くる日、本所回向院に葬る、法名智譽京傳信士。

一本辨書智譽京傳信士とあり。今『磐傳母記』による。追て回向院なる碑につきて精確なる訂正をすべし。

葬を送るもの蜀山人、眞顔、静庵、馬馬、重政、豊國、春亭、豊清、國貞等其の他知名の士壹百餘人、いとめざましきさまなりけり。

馬琴は京山と相見んとの快からず、此の日は子興繼をやりて柩を送らせけり。

さて京傳にいはいはれつる事を思ひ、百合が事も流石に心にかゝれば、ひそかに銀座のさまに心をつくる程に、うたてき事のみぞ日に多かりける。

京傳はつねに方につまやかにして、籠頭店の様さへ持てりける上、從兄弟なる長崎屋何某といふが失せて世嗣なくゆくりなき財をえたれば、少からぬ貯まりけるを、京傳にはかたうせぬやがて京山万を取りしまりて少しも百合が心にまかせず百合はたゞ商を守りてからく其の日を送るのみ、ありし昔を思ひいでいひ出でつゝ涙がちにぞあかしけらしける。

馬琴を初め京傳がありし程往かひ交らひし人々、折ふし毎にどひなきむれど、いつも述懐の涙にうちけられて慰めはえせず、共に京山がつれなきをうらみてかへるのみなり、さて親戚のわざなれば人々せんすべはなかりけり、さても百合はくやしかなしの日に重なりつびには心そはしくなりけり。文化十四年九月には京山漫遊中なれど、かねて豊國して番かせつる夫のにすがた成りければ、美しく表装して床にかざり、かねてめでよるこべりし音響珍器のたぐひをあきならへ知れる人の限を招き心を盡くしてもてなしけるが、京山がつれなきことなどいひいで、或はうらみ或は憤り、忽にしてさめくとなき、忽にしてかやくと笑ひ、人心地なきさま。あはれと

きゝゐたる人々も興さめてせん方もなければ別かれ去りぬ。京山やがて歸りて此の由をきゝまた其のさまを見て一間うちにとさしこめて其の病を養へどもうらみのしる事日にはげしく終に文化十五年（改元文政）寅正月廿二日狂ひ死にぞうせぬ。年はいまだ四十路を多くも超えざりけり。人々京山をにくみ怒れど、さてかゝづらふべき事にもあらねば其がまゝにやみぬ。

京山其のさが兄のまめやかなるに似ず。初め笹山侯に仕へて近習となり、中比佐野東洲が家をつぎて儒林に入りなどしければ、其の心さま高く慢れり。勢利の爲には腰をかゝめて其の女を萩の殿の婢妾となせど、風流の友にあつて禮なく、老いて再び笹山家に仕へたれば、我れは武士なり汝が曹とはひとしなみならずと誇りけり。されば馬琴の時めくをいふせく思ひ我れはかれが師の弟なり、荷も師の恩を知らば我れをもあがめ尊ぶべきを、學才にはこりて我れに下らぬこそこゝろ得ねと讒れり、馬琴はたまけし魂なれば我れはかれが兄の友たれば、猶兄とし敬ぶべきを、往事をのべて悔ふこそありなけれ、と互に譲る事なければ、中らひいよくよからずなりけり。

文政二年馬琴京師の友の爲に『磐傳母記』一卷を稿して京傳が履歴をのぶ。當時は籠中にひめちきつるも如何にしてか世に知られけん京山又うかひ知りて家のひめ事をあらはしたることなくけれ、我もえせでや有るとて、隨筆『蜘蛛の糸巻』にわざとならぬ様に馬琴が若き程の事などかきてひそかに其の怨をかへしたりけり。是は後れての事なれど序なればさるしあくなり。

第三節

さても翁の名日に高きを慕ひよりて效へ子たらんと請ふもの多く、さらぬも詩歌書畫をだに得ん、それもならずばまばしの物語だにきかん、而をだに見んと、音づるゝ者多き由、翁はなかくにうるさがりて、知人のひきつけなきものにはつや／＼あはず、殆ど世を絶ちぬる由など、前の章にはのめかしあきつ。

さる程に讀本文化に行はれそめてより、名はますます／＼高く、訪ふ人は日に多きに、ふみやの需は彌まげれば、門をどさす事もいよ／＼堅くなりぬ。さればかねてよりの我れのみ善しの性はやう／＼に強くなりて、頑しき行のみぞ、殊に多かりける。文化三年の秋思もかけず、町奉行所より召されぬ。こぞは一九歌丸豊國などの事ありければ

文化二年乙巳の春より繪本太閤記の人物を繪給へあらはして是に維ゆるに遊女を以てし或は草冊子に作り設けしかば畫師喜多川歌麿は御吟味中入室其他の畫工歌川豊國事熊右衛門勝川春英喜多川月慶勝川春亭草冊子作者一九事貞一等手銀五十日にして御免あり

それかあらぬかとも覺ゆれど、常に筆を慎める身にはさるべきやうもなしとて、いぶかしみつゝ出づれば、廻町の書買角九屋甚助より板木師米助を訴へたるにつれてなりけり。

米助は牛込御納戸町に住める頭形なり。

物の本の繪なるに景物(人物にも身軀)などはさらわ工人の刀になれど、おもて頭は良工を要するなり。之をば殊にめんぼり、又はかしらぼりといふなり。因にいふ。讀本の繪に微妙の刀を盡すは翁の著水滸橋傳を米助がふりたるよりの事ぞ。

永く角九屋よりのさうしなどゑり來たりけるが、わざと得たるもの、癖とて、どかくに怠りがちなる日を過ぐせば、前借の黄金いくひらかを空しくつかひ果たしぬ。

新なるわざならねば黄金を得がたければ、翁になげきて鶴屋へのひきつけを請ひ、そが讀本『梅柳新書』をゑりそめければ、角九屋の方はます／＼後れゆきぬ。甚助由をきゝていたく憤り、やがて奉行所に訴へ出で、且こそ米助をいひこしらへてかくはせさせつれときこそあけけり。時の町奉行小田切土佐守殿、双方をめしいで、吟味の末、米助が怠をせめ、疾く金子を調へて角九屋へ返すべき旨仰せられけれど、翁はかゝはり知れる事にもあらねば、そがまゝにゆるしかへされぬ。

互に怨を殘すまじき旨は誓ひけれど、翁の志ふぬき性には、甚助がにくきまわざの忘れがたく、我れ素より人の借財の保人たらず、まいて人の責をかりてかへさぬ事なければ、常に後安しと思へりしに思ひきや、理不盡の連訴にあひて、大人氣なくも公を煩はして、白き黒きを争はんとは。此の怨世を終ふまで、えこそ忘れじと憤りけり。

此の年十月、甚助本所森下町の書買、根本平吉『三十五傳』其他の發見書實なりによりて、深く其の罪をわび、『水滸橋傳』『圓の雪』の續稿を請ひ、且『圓の雪』の校訂をせまりこひたり。されどいかでか、にへなく言ひ放ちてつや／＼之が爲に勉めず。平吉困じて、仰はさる事ながら、『圓の雪』の校合をさへ志玉はずば、彫刻の誤多くて、却に先生の面目をや汚し玉はんぞらんに、凡てを甚助が手にかけ

ず、やつがれ往きかひすへければ、と云ふ事懸なるにぞ。さもこそとて之をばゆるしぬ。

あくる春、甚助また平吉及び前川彌兵衛によりて、罪をおぶる事初の如し。彌兵衛のいふやう、『番傳』は甚助とやつがれと合刻なれば、もし彼れを怒り玉は、續稿はやつがれに賜はり、『園の雪』は彼が悴に賜はらなんやといふ。翁はつや／＼うけひかず、よしや御身に與へんとも、甚助が名を除かずは、彼れがためにも緩れるなり、且其の親と絶ちて子と交らんやうやあるべき。ときびしく言ひたしなめて、永く杜絶に及びけり。

さて米助は猶こりずまに飲酒懈怠に其の日を送りければ、冬に入りても『梅柳新書』の刻ならず。翁よしをきいて痛く驚き、此の刻もしも其の期を後れ、發免其の機にあはずもあらば、我れ鶴喜(鶴喜)に向くべき面なきのみならず、甚助にさへ笑はれんと、さば／＼米助をはたれど、いらへみにてはか／＼しからず。かくてありなば、いつかはまはつる日の至らんとて、其の十一月朔日より自米助が訪ひ、其のわざを守りて怠るを防げり。日毎に朝とくゆきて日暮れぬばかへらず、ひるげはつぬに家より割籠をもたらし、さらぬ折は近きほとりのめし屋にて飢を凌ぎ、ひねもす守りゐて一ひら彫りはづれば傍より之れを訂し、直に補はせ、一卷に至りて書買へ送りければ其の間の勞いたく省かりて思の外に成る事とく其の月末に至りて全効をへたり。

鶴喜喜ぶ事大方ならず、次の日、翁をどひ厚く禮をのべて、肴しろそこばくをいたし、いかで納めてと云ふと切なり。翁笑ひて我れ此の日數もてふみつらんには、五ひら六ひらの金はえがた

からじを、もし報をほりせば、なごてかく恐しき事をやすべき。吾れ其の人となりをも知らず、みだりに米助を御身に介したれば、其の實あり、かつ甚助に笑はれんもくちをしければ、身をおたづきて辛くして本意を果たしぬ、報など思もかけぬ事なりとてつひに受けず。此の暮又米助鮭一尾をもたらし、翁をどひ、前には日毎の來臨をいとうるさくもうらめしくも思ひ候ひけるが、今年のみゆたけき暮にあひて、初めて御情の程思ひまりぬ。いかで欣の心ばかりを納め玉へといふに、さる心つきたるこそかひある心地してめでたけれ、とあつくもてなし、後々の事などかひさとして、之をば受け納めけり。

猶さふねくもかたくなしき事こそありけれ。文化の比、浪花に五島一彦といふ者あり。名は惠廻字は文敏もど播磨の儒者にして赤水子とよべり。文化七年そが漢文集『赤水餘稿』一卷をあらはして世に頒てり。中に口を極めて翁をそしれる篇あり。知らずしてふる事十年、文政二年に至り、京の友角鹿比豆流之を見いで、いたく怒りて爲に解嘲の文を作らんといひこしぬ。翁其の文を見て憤りけれど十年の怨をいひいで、世に行はれぬ書をひろめんも愚かしき至りなり、雀をはじくに登隋玉を須ひんや、只打すて、あくべしといひやりけれど、心には深く刻みて何十年の後も忘るゝ事なし。『物之本江戸作者部類』にも『八犬傳』回外剩筆にも、『吾佛の記』の一節にも、わがこし方をいふ度には必かにかくといひいで、胸にみちたる憤をもらせり。

人を人とも思はぬ行、わがあしきをもよしとせる事など、かきつらぬなば、十枚廿枚にも餘りぬ

へし。そもめまりにうるさければとて省くなり。

北條の『三七全傳』にて争へる事跡に『燕石雜話』の誤の忠告けたるに答へたる事。『大夷評判記』の事などあまたあるなり。他日、この類をあつめて『氣質』といふをなす事あるべし。

第六章 日のまさかり

第一節 松前老侯

其の志願なれば人に阿りてめでられんと求めねども、言は仁義勸懲の旨にかなひ、行さへなみくの職作者ばらとは異りければ、桃李物言はねど、其の下に蹊をなすとの理にもれず、際高き方々の或は近習して物とせせ、または自らとひて疑をたし玉ふもあり。いひかひなくどり亂したればと辭み申せど、猶ゆるし玉はず。まばくとひ玉ふとぞ多かりける。

松平冠山侯は

本姓菅原、久松氏、徳川氏より緒深ければ。源姓松平氏を賜はる。侯は縫殿頭定常朝臣といひ、文學を好み、賢君の聞あり。文化中家を世子尙五郎君にゆづり、退隱して冠山と稱す。又尾崎陣人と稱す。

文化の比『武藏名所考』あみたまへる程、つねにとはせ玉ひけり。深川なる舊君も

鍋五郎信成、天明元年家を其子舎人に譲る。舎人は十一番組の御徒歩頭たり。舎人子なくて失せたるにや、享和二年弟信行家をつぐ。更才あり。擧げられて公事方御勘定奉行となり兵庫頭といふ。翁をたづねたるは鍋五郎君にや。

翁の名のいや高きをきして、よそならずゆかしく覺されけれど、流石にそのかみの事を思へばあからさまにも尋ねかねてや、藥求めんとて、ひそかに家のさまなどうかいはれたる事あり。

故貞蘭關根翁の談話にいふ、文化中一日翁基参の留守の間なりけん、身なり賤しからぬ翁の從者具したるが奇麗丸求めんと立よりて夫れをなしに主翁の上をくまなくさひたづね、今日は折あしく家にあらずとの答にいさほいなげにかへりさりぬ。翁はへり来てそがひひつる旨のはしくより年はへの身のこなしなど凡てのさまなきに夫れがあらぬが、よそながら見知れる深川の舊君に似たりけり。夫れよりよく探り見るにまことに其君なりし事知られればさ迄に覺さるゝこそうれしくも添けれと涙にくれて喜びけりぞ。

殊にもぼさるゝ事の深き由は文化の頃噂ありて馬琴こそあへなくも此程みまかりぬれなどいひあへりければ、いと心元なくて、人を深光寺にやりてとはさせたりとの事にては知られけり。

此の事は翁の自記『後の翁の記』にくはしくまるとせり。

又御寄合衆石川左金吾といへる麾下の士も、深く翁を慕ひて、自ら琴籟と號してひそかに門人の思をなせり。

三田古川町に住みて高三千石を賜はれり。『大夷傳』第九輯の第貳卷の初に序詩あるは此の人のなり。序は長ければ尋して詩をのす。曰はく

犬姓後雄都八人、俱備里見股肱臣、乾坤到處會無敵、辟險鏖鋒釋史陳。

そが中に、松前老侯を殊に値遇はあつかりける、侯、御名を美作守道廣朝臣と申し、蝦夷をすべての主におはせり。遠の御祖の此の地をうちなびけ玉ひてよりこゝに幾代を治め來玉ひぬれば、民安く國平けく心づかひのふしはおはさねど、流石による年波に政ものうく寛政四年の冬より世を若殿志摩守 廣朝臣に譲り玉ひぬ。之れより我れは松翁とよび玉ひ、春の朝は、花を霞かくれにめで

て、思を三十一文字にのべ、秋の夕は、月を水のほとりにたゞへて、樂しさを二十八字につらぬ、うき世の外に年比をへ玉ひけり。

草子物語は、殊に好ませ玉へば、翁の著はせるを見玉ふ事も多く、從ひて世にありがたかるべき學の程をうかひひ知り、暮しさに堪へず、つひに親ら飯田町をとひ、贊を捧ぐる心にて、物なと賜ふとまばくなり。

文化十一年『八犬傳』世に出づるや、直に著作堂をとりて其のめでたき由をたゞへてやまず、世の覺の高きをばわが譽のやうにぞ喜こび玉ひける。之れより殊にまばく門を叩きて、和漢の故事をたづねどひ、雨の日、秋の夜長の徒然毎には琴嶺翁の男領五郎の御名なりを召しよせて今昔のかたらしかたきとなし玉ひつ、なほ珍らしき者ある時は分ちて之れを、翁にとらせ、むつかしき事ある時は特に使して翁にとはせ、めでたき事の折ふし毎、歌文を翁に求めてことほがせ、どにつけかくにつけて只翁をいひ出づるなど、恩寵日を追うて深かりけり。

文政二年春の初、殊に寶とし玉ふなる大福米一包を分ちて翁にとらせ玉ひたり。初め寛永十七年春二月廿二日、松前家のおもと八幡崎主殿友廣が家にあやしき米わきいでて、日毎に一升二升と湧かぬ事なく、四月末つ方に至りてやみけり、友廣いぶかしみ且喜びて、之れを大福米と名け、由をいひそへて主君公廣朝臣

松前家第七世の主とあれど詳ならず。此の人より兵高廣、矩廣、邦廣、及び資廣をへて道廣に至る。

に捧げまつりぬ。朝臣いとあやしくもめづらしく覺して、其の内數年を瓶に收め、事の由をさへかいてるして御庫に秘め玉ひぬ。是れより年をふれどもたえて虫ばみ朽つる事なく、且ふと此の瓶の開かるれば必違からぬ程にゆくりなき家の幸ありけり。

さるに當主章廣朝臣の時に至りて松前家にゆゑしき事こそ起こりけれ。朝臣豪邁の質をもて航海の要衝に君たれば、ひそかに外國と交易の風評あり。露西亞との間やう／＼事まげからんとせる程なりければ、幕府にもいと易からず思ひけん、享和元年の春、御小納戸戸川藤十郎安倫大河内善十郎政長して松前の地を巡視せしめつ。此等の復命は如何なりけんか、文化四年春三月にはかに蝦夷の地をめしあげて奥の伊達郡梁川にうつしたり。此の時大福米を見るにさしも百年あまり全かりけるを、此の一年が程に虫ばみくちて粉となりたる者半を過ぎけり。さてもく／＼と怖れあひて、扱朽ちたるを除き、全きをば又瓶に納れて梁川におかせ玉ひけり。

文政元年冬十一月廿一日、御勘定彼交代の時倉の中取り調ぶる打ふと開き見るに半にも及ばざりける米の七八分になりたり。章廣朝臣見そなはして且驚き且喜び、次の年初春、その米幾合かを梁川より齎らして老侯に奉り玉ひぬ。老侯もいと喜ばせ玉ひ、家の幸あらんぞらんと、やがて一包を分かち翁に贈り、つぶさに事の本来を告げ玉ひけり。翁もいたく喜びて、さる大方ならずめでたき物を殊に賜はすることかしくも忝なけれ。さても古もかゝる事ありけりとして、天智帝紀を始め和漢の故事をかきつらねて言ほきをまゐらせけり。老翁もはえありけりといよ、翁を慕ひ

なりけり。
老侯またかつて馬を好ませ玉ひけるが文政元年冬一駿馬を得玉ひぬ。之れを錦帆と名づけてめで玉へりけるが、翌年春二月長臣彌崎左兵衛廣見してこそ試みしめ玉ふに、兩日にして鎌倉往返二度に及べり。此道程六十七里弱 此は未曾有なりとて、老侯殊に喜のあまり翁に其の記を求め玉へり。翁辭みておのれはわきて漢文をよくせず、能文の儒者多かるに此の義はゆるし玉へと申せど、あだし人には望なしと仰するに切なれば、やがて筆をとりて「駿馬錦帆の記」一篇を綴りてまゐらせけり。

此文「冤園小説」五馬、三馬、二馬の中二馬の二にあり。

文政三年秋老侯翁をまぼす除り、琴嶺が宗伯とよびて醫をわざとせるをもてめして月俸三口を與ふ。是れより出仕まぼくにして恩遇いよ／＼深かりけり。

文政四年冬十二月七日、大福米の奇瑞にたがはず、松前家に大吉事あり、かつてめし放たれたる蝦夷地をかへされ玉ひぬ。翌くる五年春立つ比翁ことほぎの心をよみて奉れる歌あり。

こたび舊領にへらせ給ふこほぎの心をよみて奉れる長歌

流澤馬琴

隨興の えみしの國は くさのきぬ 眉連りし なめ人の たけき心に 歌なす 己がまに／＼ 行ひて 親を親とし 慕はれば 君を君とし いやまはす 家しもあらで をらちちに あまりすなごり 朝な夕な ふす馬まつ矢 さらばこり そむきまつるを 朝廷より 軍の帥を またしつゝ 討たし玉へば 従ひつ あがは亂れて 年あまた 眞をたえて ともすれば 青人草を ほふりたる 嘉吉の年に 若狭なる 武田の殿の 白馬写 道々道を ふみわきて かひきかひゆき

討ち治め 敵へ導き まつりこち まりぞ鎮めて 營盤なす 松前の城に 百年を 四ツ重れつゝ いそのがみ 古りにし 事の 彌高き 御代に聞えて いやちちに 遠つ御祖の 歴しき いまをも遂に 生よみの 甲斐なき途に まがつひの 損ひけらし 武士の やな川へきて 月も日も うつればかばる 島つ鳥 うかりける世に 喜の 時は來にけり ゆくりなく 本の境に 本の如く へされ玉へば 冬ながら 春がこそ思ふ 春くれば 東のきたを こころへぐ えぞに傳へて えぞ人の うちもあはぎて たのもしく 思はむのみか おしなべて 知るも知らぬも 離郷の 千歳の後も 龜の子の 万代までも 松竹の 築ゆるまゝに 限なき 北の守は 君ならで 誰やはあるさ かくばかり 言はぎまつる 言の葉に よむ共つぎ 三枝の ささぐありける 事のみにして

反歌

陵奥のえぞの高濱荒れぬ共立かへる涙の花ぞめでたき

四月十五日章廣朝臣父子世子千之助君任官あり 世子千之助君任官あり 主計頭なられたり 歸國の暇を玉はりぬ。よりにて宗伯をめし俱して食するに祿八十石月俸五日を以てせんと玉ひたり。宗伯こたへて仰はかしこけれど、父母稍とあそるべき年に向かはんとせれば遠く離るべからずとて、辭みけり。されど君にはなほ止みがたくやありけん今より後出入醫師の筆頭となし譜第の家臣並たるべしとて、近習格となされ、老侯の上をたのませ玉ひけり。

かゝる御覺なりければ此の後も間なく時なくめさせ玉ひけるが、老侯志州薩摩 朝臣相つぎてうせ玉ひ、幼君天保五年に家をつぎ玉ひてよりは、值遇又初の如くならず、宗伯さへ其の翌年うせにければ中らひ全く絶えにけり。